

はたらく魔王さま! 13

天使と勇者の母娘喧嘩は落ち着いたものの、依然仲が悪い忠実とライラにうんざり気味の魔王。ライラから異世界を救うための“お仕事”の内容が伝えられるが、それに不信感を抱いた魔王は、ライラに自宅を見せろと提案。昔で神界の自宅へ行くことを決める。

一方千鶴は、忠実のために動く魔王を見て落ち込んでいた。二人が仲良くなることを望んでいたはずなのに、セキモチを焼いてしまったのだ。しかも、二人は異世界に帰ってしまうのではないかと、授業も手につかない。その日の夜、思いがけず祭香からメールが。声優と食事に出かけたという梨香と「悪魔に恋する乙女たちの女子会」が始まるのだが――



電撃文庫

わ-6-14



はたらく魔王さま! 13

和ヶ原聡司

電撃文庫



ISBN 978-4-04-865205-6  
C0193 YS90E

ASCII MEDIA WORKS  
アスキーメディアワークス

KADOKAWA 角川書店 KADOKAWA

定価: 本体590円

※消費税が別記に示されています



和ヶ原聡司

「物語から」きめきドツボに転る和ヶ原に聞く秘録

和「帰って魔王から何が起こった？」  
和「みんな帰って大騒ぎするんだ」  
和「どこから帰って来ればよいやら」  
和「ツボに落ちた帰って来るとるんだ」

【電撃文庫作品】

はたらく魔王さま! 1～13  
はたらく魔王さま! 0

イラスト: ぬい

魔王様を助けて帰ったと思ったら、帰ったのに見た目は変わります。どこの魔王が帰ったんだという？



はたらく魔王さま! 13

和ヶ原聡司



電撃文庫

2014

はたらく魔王さま! 13

和ヶ原聡司

電撃文庫

DENGEKI BUNKO



## CONTENTS

序章  
P010

魔王、正しい態度を取る  
P023

勇者、道理できない事象に頭を悩める  
P100

女子高生、心の描計を露す  
P177

魔王と勇者、目の前にある現実を直視する  
P207



Shinichi Wagaoka  
Illustration ■ Onigiri

和ヶ原聡司

イラスト ■ 029

13



CHIHO  
SASAKI

EMI  
YUSA

SUZUNO  
KAMAZUKI

Acies-  
Ara

Alas-  
Ramus

ARAKU MAOUSAMAI HATARAKU MAOUSAMAI HATA  
USAMAI HATA





真奥三夫  
SADAO MAOU

イルファーン  
ROOM



# 和ヶ原聡司

イラスト 029

Satoshi Wajigahara  
Illustration 029

13



## 序章

闇の帳の端が今まさに世を覆わんとする凄魔が時に「それ」は闇に現いさきやかな命の営みを揺く人間の住処へとやってきた。

闇を窺ひ鋭い双眸。聞く者の注意を否が底でも引く喰り。他の同族と比してあまりに大きい体。腹に収める食い物の量。全身を染め上げた、闇にも負けぬ真紅の色。

どれを取ってもこの凄魔が時を駆け抜けるに相応しい偉容であった。

だが「それ」の嬌々しさを説明するには、この一言さえあれば良いだろう。

「それ」は、悪魔の王の乗騎であった。

鋭い光を放つ双眸も、腹に響く喰り声も、体軀の大きさも、食べ物の量も、全ての悪魔の頂点に立つ王たる者が顯るためにあるのだ。

「それ」を持つ悪魔の王もまた、「それ」の装甲に負けぬ真紅の衣に身を包み、決然たる視線を闇に睨むられようとする人間の世界に向けていた。

やがて悪魔の王とその乗騎は、今まさに闇に落ちんとする人間達の住処へと迫り着いた。

何人にも止め得ぬ宇宙の営みに今日もまた沈みゆくとする哀れな人間は、自分達の命を守

るため、闇に抗うため、必死で闇に光を灯す。

真紅の衣に身を包む悪魔の王は、真紅の兜を乗輪に預けると、その光を指して無慈悲な一歩を踏み出した。

乗輪は主が今まさに人間の住処を訪ねおうとするのを、瞳を閉じ、唸り声を發め、ここまで駆け抜けた体を少し傾けて休ませながら待っていた。

悪魔の王は、その黒い足を力強く一歩一歩踏みしめながら、人間の住処へと近づいてゆく。いつしか悪魔の王の目の前には、あまりに頼りない一枚の木の前。

悪魔の王にとって、それを力で破ることなどあまりに容易い。

だが、王はそうしなかった。

中から漏れ聞こえる人間の声に、一瞬だけ耳をそばだて、次の瞬間、その口元に、悪魔の王に相応しい笑みを浮かべ、そして口を開いた。

それは、聞く者全てに目を見開かせる声。

それは、聞く者全てに欲望を呼び起こさせる声。

それは、聞く者全てに王を迎えるための扉を開かせる声。

「大変お待たせいたしました！ マダロナルドアリバリーでございますー！」

「あっ、やっぱり真紅さんだー はいはい、今出ますー！」

扉の向こうから、少女の声と同時に頼りないシンダー錠が開かれた。

「お疲れ様です真奥さん！」

「……やあ、ちーちゃん」

マドロナルドカーターのウィンドブレーカーに身を包んだマドロナルドタルー、真奥貞夫は、最初の音楽スマイルから少しだけ緊張を解いて、自分を包みこんでくれた少女、佐々木千穂に素直な笑顔を向けた。

東京都渋谷区笹塚にある、本道二階建てアパートヴィラ・ローヤ笹塚（二〇一号室）。

今回の、真奥貞夫のマドロナルドナリナリーの配達先である。

思いつきり、自宅である。

真奥貞夫は今朝方、この部屋から勤め先であるマドロナルド轉々谷駅前店に出勤したのだ。確かにこのアパートそのものはナリナリー対象地区内にあるため、求められればナリナリーに赴くのは、悪魔の王でありマドロナルドのタルーである真奥貞夫の義務である。

しかし真奥は、肩に担いだ保温バッグから、電話注文されたバーガーセットを伝票と照らし合わせながら千穂に手渡しつつ、タルーらしからぬ演劇を作って部屋の中に声をかけた。

「俺が言うことでもないがな、正確どうかと聞きよ、二食連続この量ってのは」

「いや、すまない……昼の時点では、私はそのつもりは無かったんだが」

部屋の中で申し訳なさそうな顔をしているのは、がっしりした身体つきの中年男性だ。

「ノルドさんがイルオーン君のスタエストでそうしたのをどうやってか嗅ぎつけたアシエスち

ちゃんはどうしてもって聞かなかったんですよ。あ、注文したものの、全部揃ってます」

千穂は真実と共に伝票を照らし合わせながらオーダーした全ての品物が揃っていることを確認する。

千穂にノルドと呼ばれた男は、財布から五千円札を取り出しながら真実の手渡す。

「言っとくが、お前も人間があがめてた大天使は、一週間で警備レベルの太り方したからな。俺は注文されたら黙って聞けるしかねえけど、ガキの健康管理は大人の役目だってこと分かっておけよ。よし、五千円お預かりしましたので……四十五円のお返しです」

お金のやり取りの瞬間だけ、真実の中のタルー魂がタルーとしての言葉を使わせた。

「……ああ、肝に銘じる」

ノルドがぐうの音も出ない様子で頷いた途端、共用廊下の下からけたたましく駆け上がってくる音が聞こえる。

「デリバリーが来たんだネー」

「おなかすいた」

「おわっ」

真実の両脇をすり抜けるように、細身の影が二つ二〇一号室に飛び込んできた。

「ちよっとアシエスー イルオーン！ ちゃんと手を洗ってからにして！」

さらにそれを追いかけると、女性の声がぱたぱたと駆け上がってくる。

「ああああ二人共、そんな袋から直接食へるようなことしないで、せめてきちんとテーブルの上に出してからにさいな」

「んなこと言ったってお腹空いてたんだモン！ イルオーンがお昼食べてたのってどいワ」

「これ、マヨネーズ？ っていうのが、おいしい」

「マヨネーズは美味いよネー！ でもこれは食べたことあるかう、私はまず食べたことのないこつちのもらうヨ！」

「それ、お昼に来た人が『モァンゲンチイ』って言ってた」

「限定は食べなきゃだよネー！ いただきますース！」

「いただきます」

飛び込んできた二人の子供。

黒髪に紫色の髪が一房流じる少女、アシエス・アークと、黒髪に赤い髪が一房流じる少年、イルオーンは大人達の制止などまるで耳に入らないかのように、その場で直焼が持ってきたマカロナルドバーガーのセットを食うはじめた。

「二人共……手を……」

後からアシエスとイルオーンを追いかけてきた紫色の髪の女性には、先にいたノルドと共に紫とその様子を眺めていたが、

「おい、ライラ」

真奥の低い声に初めて彼の存在に気づいたように、どこもない動きで頭を真奥に向けた。

「お前もイルオーンとアシエスに完全に振り回されてるじゃねえか」

「いや、その」

「あの、ええと……」

「大家さんや天澤さんの手前もあるし、ちーちゃんや吉屋が許せば二〇一〇号室に出入りするものこの職仕方ねえ。だがな、飯を食い散らかしたまんまとかになつてりや、魔王軍一騎打ちやいねえぞ」

「……はい」

天界の大使たるライラ、そして異世界の勇者の父たるノルドは、ファーストフードでアルバイトする魔王のごくごく当たり前の注意喚起に、年中生も無く項垂れる。

すると、

「大丈夫ですよ！」

重くなった空気を吹き飛ばすように、横から千壁が両手をぐつと握って言った。

「私お昼の時間いて、イルオーン君とアシエスちゃんがきちんとお野菜取れるように、小松菜のおひたしとコールスローサラダ作ってましたから！」

事実テールの上には、もはや真奥には見慣れたタンパーが置かれている。

「それと、吉屋さんも今、肉だけでは栄養が偏るって言って、お魚買に行きました。鯖が鮭

かで悩んでましたけど」

「そっか。そっかそっか」

真淵は千穂の行き届いた気遣い、そして自分が不在の間もしっかり家を取り回している忠臣のことを思い東の顔頬を緩め、そして、

「恥し入れ大人。恥し入れ天使」

ノルドとライタを戦しく糾弾した。

「由日次第と云いません」

そして勇者の両親は、魔王の糾弾に素直に頭を下げ、

「真淵はともかく、佐々木千穂より先に僕の方の許可を取るべきだとは思うよ」

悪魔の住人でありながら、千穂以下の認識能力であった漆原半蔵が、聞いてもらえらると思っていない声でぼんやり抗議し、

「……さて、それではありますかとうございました。またのご利用をお待ちしております」

「お疲れ様です真典さん。今日ラストまでですよ。頑張ってくださいね！」

「ああ、もちろんいつも悪いな、帰るときは、真淵お礼に声かけろよ」

「はいー」

魔王は女子高生に自宅の、つまりは魔王城の壁のことを全て話し、デラバリーのために来たきたレッドデュラハン二号の下へと駆け足で急いだ。



「魔王、待て！」

すると、真鳥が階段を下り切ったところで頭上から声がかかった。

顔を上げると隣人の鐘月鈴乃が共用階段から少し身を乗り出している。

そしてその鈴乃の足元には、小さな体を目いっぱい広げながら手を振る愛くるしい姿があった。

「ばばー！ ばばー！」

「両親」である真鳥と恵美が動揺している間、鈴乃に預けられているアラス・ラムスである。

「いてろしやー！ がんばれー！」

「……おう！」

「一緒にいてやれないもどかしさをぐっと腹に収め、真鳥は引き続けた表情で『娘』の声に大きく手を振り応え、それから鈴乃に向けて、目だけでアラス・ラムスの顔を見せてくれた感謝を送る。

「よし、アラス・ラムス、もう寒いから戻るぞ」

「すずねーもや、まぐろばとたべないの？」

「そうだな。アラス・ラムスはもう少し大きくならねば、アシェスのように沢山は食べられんだろうな」

「あしゝすはたべてるのに……」

真真はバイタに跨りヘルメットを被りながら、鈴乃とアラス・ラムスの合點が共用廊下に消える音をなんとなく聞いていた。

隣人の心遣いで娘の声を聴き、勤務で疲れていた氣力が少し回復したところに、

「あ、魔王様、お勤めお疲れ様です」

背後から耳に馴染んだ声が聞こえた。

「おう、急ぎに行つてたつて？」

真真はヘルメットのバイザーを上げて、千穂が言つていた買い物から帰つてきたらしい声に軽く手を上げた。

「はい、まったくユスタイーナ夫婦の至らなさには目を覆うばかりです。聞けば大家さんのお宅も子供らに飲食の限りを厚くさせているようで、私と佐々木さんが養生を覚えさせねば、アシエスもイルオーンも早晚体調を崩してしまうと思ひまして」

「あいつらが体調崩したら、何が起こるか分かつたもんじゃないやねえしな」

イルオーンがウィラ・ローザ管理にいつくようになった経緯を考えれば、セフィラの千連の体調管理には万全を期して然るべきだと真真は思うのだが、どうもそのセフィラの子連に近い者達はあるで実践に至つていないようだ。

「苦労かけるな」

「いえ、長い目で見れば、これも未来の魔王軍のためです。あ、魔王様もお夕食は晩飯さ

でよろしいですか？」

「頼なんか久しぶりだな。頼んだ」

真美は一つ頷くと、バイクのサイドブレーキを逸としてエンジンをかける。

「んじやな」

「はい。お気をつけて」

軽く手を振ってから、真美は店に戻るためにバイクを急進させる。

遅く一度も信号に捕まらずに店に戻ると、

「丁度良かったわ。たった今次の注文が入ったところよ」

まるで真美の戻りを待ち構えていたかのように、真美の宿敵で、勇者で、ノルドとライラの娘で、アラス・ラムスの「仲間」で、今は職場の同僚である遊佐恵美が伝票を持って待機していた。

「住所はこれ。オーダーの内容はこれ。あと三分ででき上がるわ。今カワっちさんも木崎さんも出ちゃってるから、よろしくお願ひするわね。真美さん」

「……はいよ」

何時まで経っても、恵美から「さん付け」で呼ばれるのには慣れない。

「これ、あそこか、何回も注文してくれてる会社さんだよな」

「そうね。ただ偶然だけど、過去の配達は今野木崎さんが行ってるわ。がっかりされないよう

にね」

「無茶言うなよ」

恵美は要諦っぽく笑い、真実も苦笑せざるを得ない。

マダロナルド嬢々谷駅前店店長木崎真弓は、店員にも使えず固定ファンが訪れるほどのモデルばりのプロボーションと美貌を誇っているのだ。

「そういえば、アラス・ラムスの顔もよっとだけ見られた。いい子にしてそうだったぜ」

「あの子はベルの家で迷惑かけたりしないわよ。それより、きっきのオーダーはやっぱりお父さんが？」

「……まあな」

真実は今度とライラの体たらくを揶揄いつまんで説明する。

「千穂ちゃんに、今度きちゃんとお説教とお礼しなさや……」

「ちーちゃんどうこうもそうだが、まずはお前の親の方をなんとかしろよ」

「……」

恵美は少し口ごもる。

恵美とライラの関係は、過去の経緯もあり現状極めて悪いと言わざるを得ない。

「どうせまた話せてねえんだろ。お前が家族のことに首を突っ込みたいわけじゃねえが、俺達やちーちゃんか迷惑するから、できればきっきとカタつけてほしいんだがな」

「わ、分かってるわよ」

分かってるだけで行動に移す気の無いことが丸わかりの悪事を真実がした連続、カウンターの中でデリバリー用保温バッグにオーダーが詰め込まれているのが真実の目に入った。

「ま、今は仕事だ、行ってくる」

「……ええ」

真実が悪美との話を打ち切ると、伝票を確認しながらカウンター越しに保温バッグを受け取り店を飛び出した。

再びヘルメットを被り、バイクに跨り、サイドブレーキを下ろし、ベルトに懸いだコードの先のキーを捻ってエンジンをかけ、とっぶり目の暮れた街へと軽快に走り出す。

道すがら、赤信号で止まっている間に先ほどの悪美の愛車のような顔を思い浮かべながら、  
「色々あるわな」

ヘルメットの中で小さく呟く。

それぞれに事情を抱え、それでも人に言えば、仕事をすれば、なんとなく笑顔を始めとした色々な表情が垣間見える。

「それも大事な日常だ」

その瞬間、信号が青に変わり、真実は雑念を振り払いように少しだけ強くスロットルを捻った。

揮気と呼気が白い煙を引く衝は、もう冬の気配を濃厚に纏わせていた。

魔王、闇の覇者を倒す



夕方に勤務を上がり、更衣室で着替へも済ませてスタッフルームに戻った千穂は、配布された十二月のシフト表に間違いが無いかどうか確認しようとして、ある違和感に気がついた。

マダロナルドのシフト表は名簿形式で表記されていて、普段ならば千穂は十三番日に登録されている。

それが、今回配られたシフト表の中では十二番日になっているのだ。

ちなみに真美は九番日で東美は二十五番日だったのだが、真美の番号は変わらず、東美が二十四番日になっている。

しばし考えた後、千穂はシフトを書き写すための手帳を開きながら気づいた。

「分かった！ コウタさんがいないんだ！」

若手タラーの中でも主力格である太学生、コウタこと中山孝太郎の項目が消えていた。

「就職活動って言ってたっけ。そっか。本当に辞めちゃうんだ」

千穂は少ししんみりした気分ですフト表を見直した。

別にもさう言っていたし、本人からも聞いた記憶はあるのだが、いざこうして名前が消えているのを見ると嫌でも時間の移り変わりというものを感ぜざるを得ない。

「いなくなっちゃうんだな……」

孝太郎が太学生、千穂が高校生ということ、年齢が近いから話が合うかと思いきや、千穂はあまり孝太郎と込み入った話をしたことはなかった。



もちろん仲が良かったというわけではなく、同じ時間帯にシフトに入れば普通に話もしたし、幸太郎の方がアルバイトでも先輩だったので、彼から仕事を教わったことも少なくない。

だが冷静に思い返すと、千穂は中山幸太郎という人間のことを、通っている大学と、鶴ヶ谷のどこかに住んでいることと、趣味でゲームをやるということくらいしか知らなかった。

千穂はゲームでは通はないのでさういうところでは話が合わなかったし、大学生生活の話なら同じ大学生タラーである川田武文や大木明子の方が話しやすかったようだ。

ブライベイトに関する話題なら、一度だけ千穂が通をやっていてという話をしたら、幸太郎の彼女がアーチェリーをやっている、という反応があり、共通の話題なのかさうでないのか分からないざっくりとした「可笑トーク」で盛り上がったことがあるくらいだ。

ただそれも休憩時間中の千穂分程度の話題だったようにも思う。

千穂が中山幸太郎という先輩タラーについて知っていることといえば、ほんの数分で全て思い出してしまう、こんな程度のことではなかった。

それでも今、千穂の身近から消えいなく一人、いることが当たり前だと思っていた人間が姿を消そうとしている。

それは純粋な驚きであった。

感覚的には中学校を卒業したときに似ているかもしれない。

全校生徒と親しくしていたわけでもないのに、自分の周りにいつも当たり前だった人達があ

る目を境にいなくなり、何も言われぬ不思議な喪失感を抱いたものだ。

「どうしたちーちゃん。眉間に皺なんか寄せて」

「あ、木崎さん」

そこに顔相とインカムマイクを外しながらマダロナルド様々谷駅商店は長の本崎真弓が入ってきて、手組は顔を上げる。

「今のうちにシフト表を手帳に書き写そうと思ったら、コウタさんのシフトが無いことに気づいちやって」

「ああ。本当は年末までいてはしかったが、探検活動開始が遅くなった昨今でも、大学の勉強や色々な準備をしたいと思えば一ヶ月の遅れは結構響くみたいだからな。だが新しいクルーを入れようにもコウタが抜けた穴はそう簡単には埋まらんし、まったく頭の痛い状況だよ」

なんでもないことのように本崎は言うが、本崎は仕事に関することでは絶対に嘘も冗談も言わない。

幸太郎が抜けた穴は大きいのだ。

特にマダロナルド様々谷駅商店に於いては、単純にシフトの穴が開く以上に、ツーカーで仕事をできる仲間が一人いなくなるのは、全体にのしかかる純粋なストレスだ。

「本崎さんも、今日はもう上がりですか？」

本崎が帽子とインカムに加え、ネクタイも外そうとしていたので尋ねると、

「いや、これから別の店で緊急のエリア会議。こんな時間から参るよ。今日はまーくんも休みだから非常事態が起きないことを願うばかりだ」

本崎は嘆息しながら時計を見上げる。

ダイナースタイムを目前に店から店舗管理者がいなくなってしまう状況は、残されたクルーはもちろん、抜ける管理者側にも大いに不安が残る。

特にこの日は最初から真実がシフトに入っていないため、本崎としても本音では会議など行きたくないのだろう。

人一人がいらない、いなくなるこの影響は、実際にそうなってみると目撃者である以上に影響が大きいものだ。

「この時期はどここの店舗もうちと一掃で人手が足りなくなる。それでいて仕事は増えるから下手すれば幹線社員まで引っぱり出さねばならなくなるし、泣きつ面に笑だ」

本崎は肩を挫いて言った。

「色々片付けなければならぬこともあるから、今日はもう戻らない。緊急連絡はつけられるようにしたから、後のことはカワっちとアキちゃんときえみーに任せた」

「そう……ですか」

今日はもう戻らない、という言葉が何やら全く違う意味に取れてしまって、千穂の眉間の皺は益々深くなってしまう。

そんな千穂の顔を見ながら、木崎は珍しく、少し言いくさそうに声をかけた。

「まあそういう訳だから、ちーちゃんも、こういうことがありそうなら早めに頼むよ」

「え？ 何がですか？」

言われていることの意味が理解できず、千穂はしばし返事に迷った。

「いや、正直なところ、ちーちゃんにもギリギリまでシフトを抜けてはくれないと思ってるんだが、そういうわけにもいかないだろうか？」

「何がですか？」

千穂は長期の休みやシフトの変更を願った記憶が無いので真顔に首を傾げたが、木崎は急に困ったように言った。

「もう二年の冬だ。そろそろ周りが受験受験と騒がしくなってくる頃じゃないか」

「受験……あつて」

千穂はようやく木崎が言わんとしていることに気づいて、急に大声を上げてしまった。

「おいおい高校生、本人が忘れてるのに付け込むようなことをしたくないから、そこは自覚を持つてくれ」

千穂が本気で理解していなかったことを理解した木崎は、苦笑を深くする。

「ちーちゃんもすぐに三年生だ。あれだけ読んでいたちーちゃんがいい加減な進路を選ぶとも思えないしな。受験勉強が本格化したら今まで通りにはシフトに入れないだろうか？」

「そ、そうですね」

千穂は曲がり角で不意に大声で驚かされた時のように、心臓が跳ねていることに気づいた。つい先日、東美の友人の家でこのことを考えさせられたばかりではないか。

それなのに今この瞬間、こんなに驚いたということば、やはり自分の中で受容や基路というものはまだどこか遠い世界の出来事と思っていた、ということである。

木崎は千穂が道路に悩んでいることを義や教師、友人よりもよく知っている。

他ならぬ千穂自身がアルバイト面接のときに告白し、その後も病につけ相談に乗ってもらっていたからだ。

「その時……その時が来たら、ちゃんと相談します」

「頼むぞ。君のためにもな」

木崎はそれ以上何も言わず、着替えるために更衣室に入ってしまった。

扉が開き音を聞きながら、千穂はふと、バックルームの扉を細く開けて扉の隙間を見る。

「ここに来なくなる日が、いつか」

まだ働きはじめて一年にもならないこの店に来なくなる日が来る。

いつか、必ず来る。

その毅然たる事実、千穂は、胸が締めつけられる思いがした。

外氣が入ってくるわけでもないのに体が冷え込んだ気がして、千穂は出勤時に着てきたダウ

ンコートをしつかり着めため息をつく。

「なんだ、まだいたのか」

「ひゃあっ！」

今度は背後から肩を叩かれ腕時計に驚いて飛び上がった。

「随分遅着だな」

トレンチコート姿の水崎は、ダウンコートだけでなく頭から足先まで濡ふくれている千穂を少し物珍しげに眺める。

「あ、この後ちよつと行くところが……」

「そうか。まあ暖かくするのはいいことだが、外も暗いから早めに帰るんだぞ」

至極真つ直な大人の小言に千穂は素直に頷く。

そして、千穂の横に立って、千穂と同じようにスタダフルームの入り口から店内を眺め、水崎は言った。

「一応言っておくが」

「ば、はい」

「ここは君が骨を埋める場所ではない。まーくんにとってもさよみーにとっても、もちろん私にとっても、この店は人生の通過点ではない。とどまる時間は、人それぞれだろうが」

「……私はまだ、一年も経ってません」

「ちーちゃんがここで働きはじめてから今日までが短いと思うのなら、私は嬉しいけれど」

通過するにしても、とどまりはじめてからはんの少ししか経っていないという思いを率直に告げた千穂に、木崎は優しく微笑んだ。

「沢山働めばいい。世の中でしたり顔している大人達も、あの瞬間のあの選択は正しかったのか、これから自分が選ぶことが正しいことなのかと、ずっと悩みながら生きているんだ」

それは千穂にとっては、改めて言われれば当然のことと思えるけれども、言われるまでは想像すらなかったことだった。

再びドアの隙間から見えるマダロナルドタール達の背を見て、千穂はため息をつく。

みんなも、そうなのだろうか。

真央も、東葉も、そうなのだろうか。

「……お疲れ様でした。お先に失礼します」

「ん、気をつけてな」

少なくとも、ここで一人で思い悩んでいても答えが出る性質のものではあるまい。

千穂は本路にべこりとお辞儀をすると、手早く荷物を鞆に詰めて店を出た。

自動ドアを一枚閉めた外の空気が冷たく、仕事で温まった体と頬から熱を奪ってゆく。

「これから選ぶことが正しいのか、かあ……」

千穂はため息を空に溶かしてから、

「急がないと」

決然と足を前に出す。

今日は、千穂がヴィラ・ローザ（ローズ）の二〇一号室で、真実とライラの『交渉』の席に、初めて立ち会う日なのだ。

## ※

エンテ・イストラと姉妹、二つの世界に跨り発生する真実の発生源とも、裏で糸を引いていた張本人とも言える存在、大天使ライラ。

勇者エミリア・ユステイナこと遠佐真実の実の母親でもある彼女が、遂に真実達の前に姿を現した。

十六年も前から志渡真蓮と通じていたライラは、アラス・ラムス、アシエス・アーラ、イルオーンらセフィラから生まれた子達についても多くの情報を握っていると思われる。

セフィラ・イエソドから生まれた二人の子は、真実達にとつてもはや欠くべからざる大切な存在であり、ライラの出現はこれから真実や真実達が生きる上で、重要な情報がそのまゝ人の形を取って現れたかのようなものだった。

だが真実は、ライラが発端となって起こった様々な悲劇や混乱をたった一人で渡っていかな



ばならなかった自分の過去と、目の前に現れた「母」であるらしい女性の悪意の無い微笑気さの瞬間を受け入れられず、ライラを拒絶。

真美も最初はライラから色々事情を聞き出そうとしていたはずが、話の中でライラに対する態度を硬化させてしまい、やはり彼女を拒絶した。

世界の表舞台で戦い続けていた二人と、世界の裏側を駆け巡っていた一人は、再会直後から平行線どころかどんだんお互いの距離が遠く一方。

それから幾日も経たないうちに、東美と千穂の乗る地下鉄が、何者かの襲撃を受ける。

真つ黒な影法師とも呼ぶべき襲撃者は、東美の頸領を受けつけず、地球のセフィラの子孫である大羅天孫の力すらものともせず、遂には戦いの果てにライラに重傷を負わせた。

ライラは影法師の正体を知っている筈があり、この地下鉄襲撃もライラの思惑に端を発したトラブルの一つであることを察する真美と東美は、さらに態度を硬化させる。

二人の心の中に共通してあったのは、これ以上誰かの掌の上で踊らされるのは真つ平だ、という思いだった。

特に今や二人の共通の職場であるマダロナルド糖々谷製菓店の新業態、マダロナルドデリバリーが長い準備期間を経て始まった頃合いでもあり、異世界の魔王も勇者も、自分の生活を持するだけで手一杯なのだ。

だが、そんな二人に半は強制的にライラとの会談の場を設けさせたのが、彼ならぬ志枝美輝

と大馬天杯であつた。

志波と天路は地下鉄を襲撃しライラに重傷を負わせた影法師を捕獲。その正体がエンテ・イスタのセフィラ・ダブラーから生まれた少年、イルオーンであるという事実を真美と恵美に突きつける。

イルオーンの体が謎の物質を運びてしまったこととライラが抱えた秘密は無関係ではなく、ライラの抱える問題を放置し続ければ、いずれ真美と恵美の「娘」であるアラス・ラムスや、その妹アシエス・アーラにも、どんな影響が起こるか分からないとライラは言つた。

それでも尚、ライラとの対話を求める真美を前に、真美は三輪、西園、虚空の中から一人以上の上立ち合いの下、ヴィラ・ローサ館（二〇一号室）でのみ交際に応じるとライラに約束し、真美も真美に乘せられる形で、ライラとの交渉に臨むことを承諾してしまふ。

イルオーンに起こつた異常がアラス・ラムスとアシエスに即座に降りかかることはないというが、それでも志波が虚空の病室で語つた「エンテ・イスタの人類の危機」の話も含め、真美と恵美の見つめる道か先には、不確で、不確かで、いつやつてくるかも知らない漠然とした不安が横たわることとなつたのだ。

もはや救えきれないほど訪れた。ヴィタ・ローザ警備が、何やら別の建物に変わってしまったかのように見えるのは、恐らく千穂の内なる不安がそうさせているのだから。

いつもなら見慣れた廊が待っている安心感を思い起こさせる廊の灯りが、今日は妙に寒々しく見える。

共用階段の一段目を踏めば、もう声星と鈴乃と徳原が言い争う声が聞こえてくるはずなのに、今日は無音だ。

共用廊下の先は、まるで無人であるかのように静まり返っており、鈴乃やアラス・ラムスの気配もしない。

千穂の知る大切な人達が千穂を置いていなくなってしまったかのような錯覚にすら囚われた千穂は、曇る恐る二〇一号室の呼び鈴を鳴らした。

「ちーちゃんか。聞いてる。入ってくれ」

千穂は思わず訪めていた息を吐き出す。

固い声色だが、間違いない真実だ。なんの根拠もない不安に襲われていた自分に少し減入りながらも、これから自分が果たすべき役目を思い出し意を決して千穂は扉を開け、

「お邪魔しま………」

しばしその場で固まった。

「……ど、どうも、千穂さん……」

「おう、ちーちゃん。仕事お疲れさん」

「早く扉開めて、寒いよ」

気温が、比喩でなく低かった。

閉居間が入っているわけでもないのに、二〇一号室の中の気温が、単純に外より二、三度は低く感じられる。

そしてその事実を端的に示しているのが、部屋の中で手輪を捻りも凍えていた三人の姿であった。家主である真美は、頭に毛糸の帽子を被り、ユニシロのスーパータイトダウンのフアスナーを腰界まで上げ、靴下を二枚履きしているようだ。

パソコンデスクのボジションで左胸に背を向けている渡原も明らかに重ね着しすぎていることが分かる。腕の丸みと、不自然に重なった襟元を見て、隣にはタオルケットをかけていた。

唯一普通と言えぬ嗜好をしているのはライラだが、ちよっと生肌が厚手だけのワンピースが一枚で、それ以外に何か防寒対策を講じている様子は無く、先日地下鉄襲撃事件の際に髪色が茶色になってしまったこともあって、普段の二割増しで顔色が悪く見える。

あまりに室内が寒いので手輪は、もしや押入れに詰め込まれているという真模の魔力が漏れ出しているのではないかと疑ったが、特に生体気を活性化させなくても自分の体調に変化は起きていない。

つまり、どこまでも単純明快に、室内が寒いのだ。

「ほら見て、俺の言つた通りだろう。ちーちゃんはこういうとき、絶対に船所を外さない。二手も三手も先を読んで、入念に準備してくる。少しは見習え」

「は、はい？」

しかも真実から、啓突によく分からないお夜めの言葉を読み千穂は混乱を深くする。

「だ、だって、誰も想像しないわよ。この部屋、何處かリフォームされたんじゃないの？  
どうして外より寒いのでしょう」

千穂の疑問もついでに伏せするライラの抗議。それに対する家王の返事は簡潔だった。

「そういうアパートだ。ここは」

「……っ！」

悪魔の王の冷徹な宣言に、太天候は絶句するしかない。

「佐々木千穂、ドア閉めろって」

「あ、は、はい、すいません」

漆原が授け返って少し語気を強めたので、千穂は壁でて中に入って扉を閉めた。

扉を閉めたからといって別に室内が暖かくなったりはしないのだが、とりあえず漆原はそれで納得したようだ。

「……千穂さん、知ってたの？」

「な、何がですか？」

「この部屋……こんなに寒いつて……」

「え……ええつと……」

ライラの問いに、千鶴は少しだけ考えを巡らせてからふと自分の身に纏う一式を覗く。お気に入りの耳当てにマフラー。厚手のダウンコートの下はセーターで、ロングアニメの下には保温効果の高いタイツを履いている。

今日の天気予報では、最低気温は5度だが日中の最高気温は14度で、出勤する段階では確かに少し汗をかいたほどだが、今この場では丁度良いと感じる。

「し、知ってたわけじゃないですけど、今日は夕方ここに来るって思ったら、自然と」

「自然とって」

ライラは愕然とした顔をするが、真実を満ちげに頷いた。

「ちーちゃんほうちにまともな暖房器具が無いことをきちんと知ってるからな。気のつくちーちゃんなら、これくらいの手備はごく自然にしてくると俺は確信していた」

「誇らしげに言うことば」

これにはさすがに、この部屋本来の住人である漆原がライラ側に回った。

「佐々木千鶴も、あんまり真実を甘やかすなよな！」

「あ、いや、私はそんなつもりじゃ……」

「お前が真実の肩持つもんだから、部屋まで菓子に寒って暖房なんかいらなとか言い出すん

だぞー！ 見ろよこれー！」

そう言って、魔王が足元から何やら重そうな袋を取り出した。

「湯たんぽだぞー！ これ買ったからコタツは年明けまで出さないとか言い出してんだぞー！」

「ゆ、湯たんぽ良いじゃないですか。私も夜寝るとき使って……」

「寝るときだろー！ お前日中家の中で湯たんぽ抱えて過ごしたことあるのかよー！」

「無い、です」

「口を慎め、魔王。ちーちゃんは間違ってる。湯たんぽは良い」

「湯たんぽは良い」じゃないよ！ 真実がそんなこと言ってるなんて知られたら、エンテ、

イスラ役で敵った魔王軍将兵たちが草葉の陰で鼻息を立てて干からびるぞよ」

「うるせえ。エアコンだのストーブだの買っちゃったらそれこそ俺の銀行口座が干からびる」

「なんのための魔力だあああ！」

魔王の言うことは至極最もだと思いつつ、千穂としては真実と魔王の様子がいかに思っているのかいとも通りで最終の賭博はかなりぼかされていた。

するとまるで千穂の心の動きを見計らっていたかのように、

「チホー！ チホーいるんでショー！」

玄関ドアを外からたたきまくって叩く音と声。

「アシエスちゃん？ あの、真実さん……」

「マオウー 駄達の鼻からチホの匂いを嗅ぎうったってそうはトンヤが師し金！」

「何言ってんだあいつは……」

「駄達お腹減ってんだー チホが来たならさっさとそこにはオラアケがあるハズ！」

「わ、駄ハイト上がりだから今日は何も持ってきてないんです」

アシエスの真つ直ぐすぎる欲望に当てられておろおろとする千鶴を、真美は頭を抱えながらなだめる。

「あー、いいから、ちーちゃんいいから。それが当たり前だから」

「え？ 無いの。なんだ、残念」

ところが意外なところから文句が出てきた。漆原だ。

「最近アシエスやイルオーンに悪生させるんだって言って、虎屋もベルもおかずの敷被ってるから、僕々木千鶴が来るなら唐揚げくらい持ってくるかなってちよっと期待してたのに」

「漆原お前、よくそこまでストリートにちーちゃんの悪意を言葉通り食い物にできるな」

「あ、あの、すいません、次は作ってきますから」

「ちーちゃんは何も気に病むことなんてねえからそうかしこまらないでくれ。退院してからこつち、こいつ本当圓々しいんだ」

「圓々しいとはなんだよ。入院中も退院してからも、誰も僕の体調なんて気遣ってくれないんだもん。虎屋やエミリアの友達のことばかりでさ。そんなときにおかず一品多くしてほしく



らい言ってもいいだろ？」

「お前、まさかそれ本気で言ってるよな」

真真にしてみれば漆原は確かに入院こそしていたが、いちいち伝言してやるほど要領をきかしていたようには見えないのだ。

「真真、こそ本気なの？　だって天柙さんも大家さんも、僕の入院の理由最後まで教えてくれなかったんだよ？　僕の体に何か異変が起こってるのか想わないわけ？」

「大家さんの不思議な力が漆原さんの体に悪影響を与えた……もしか言えないですもんね」

先だって漆原が入院した際、志波の線香以外では千穂は唯一現場に居合わせた。

天柙から地球のセカイラの秘密について聞き出す間、それとなく漆原に聞き耳を立てるよう促したのだが、もう少しで天柙から話してもらえればすだったところに大家が帰還。

漆原は昏倒してそのまま病院送りになったのである。

その直前に、千穂の高校を襲撃した大天使カマエルの猛攻から千穂や鈴乃を守る際に傷ついた体を癒すため、という語らったらまた理解も気遣いもできようが、早に大家の言葉通りに会った、ということだけでは何をどうしようも無い。

「今だって大家さんが近くにいると、髪の色が抜けるんだよ？　絶対何かおかしいって！」

「お前も量多くてうがいから少しくらい抜けた方がいいぞ」

「誰が髪そのものが抜けた話したよ？　色だよ色！」

「ああもううるせえな。だが色が抜けるったってな。ライラ、お前そんなことあるか？」

「いいえ。私はこの前、あなたに治療してもらったとき以来このままよ。志波さんとお会いすることがあっても、特に変化は無いわ」

ライラは髪の色が漆原とは真逆の変わり方をしている。元が青銅色だったのが、真奥に魔力で怪我を治療された途端、髪色が漆原のような紫色に変化したのだ。

「見た目はともかく、それで体調崩したりとかも無いわね」

「漆原も特に体調崩したりしたわけじゃないんだし、髪の色くらいでガタガタ言うな。どうせ外出しないんだし、大家さんに近づきすぎえしなけりや問題ないんだろ。カマエルと戦った傷の後遺症とかでないんなら、ガタガタ言うんじゃねえよ」

「そりやそうだけどもあ」

尚も漆原は不満げな様子だが、

「やつぱりおかずが一品って聞こえたぞ！ 観念してこのドアを開けるんだ！」

漆原よりずっとうるさい太真鍮が、食べ物に関する単語だけを拾い上げて廊下で騒いでいる。真鍮は仕方なく立ち上がると、千穂を部屋の中に入れてから入れ替わるように自分が土間に下りてドアを開けた。

「やつはーチホわあッ！」

その瞬間、ありもしない千穂の差し入れを阻んで食欲全開の顔をしていたアシエスの姿が

紫色の光の粒子となり、真実の体へと吸い込まれていった。

「ハウスだ」

アシエスと融合状態である真実だからこそできるアシエス封じの要素である。

「あーうるせえうるせえ。話が終わつたら出してやつから少し大人しくしてろ。あとちーちゃんは今日、仕事上がりで疲れてるんだ。これ以上刺激かけんなー」

耳を塞いでどうにかなるものでもないだろうが、恐らく頭の中で全力の抗議活動を展開しているであろうアシエスに、真実は顔を蒙りながら言い返している。

「あれ？ アシエスはどこ？」

だが、廊下にいたのはアシエスだけではなかった。

彼女よりもずっと控えめな様子で顔を覆かしたのは、顔色も幾分健康的になり、ノルドとウイラが買い与えた日本の衣類を纏ってごく普通の少年と変わりなくなったイルオーンだった。

そういえばドアが開く前のアシエスは、私「運」と言っていた。

タイラや天祢が言うところの「暴走」状態から落ち着いたイルオーンは、最近では大体アシエスと行動を共にしており、その都度ノルドがウイラか天祢が振り回されたり、二人の食欲のせいで思わぬ出費を強いられていたりするのだが、今日は妙に鼻の利くセフィアの子達のことである。

千穂の匂いか千穂が纏うマダロナルドの匂いをかぎつけ、差し入れを当て込んで来たのだろうか。

「お前も、アシエスに振り回されんなよ。こいつの後くつついてると、いつか人として恥ずかしい、みっともないことする羽目になるぞ」

真実は自分の頭を指差しながらイルオーンをそう締め、ついでにまたうるさそうに頭を締め

る。耳には聞こえなくとも、千穂はアシエスが「シッシーなこと言うナー」と叫んでいるのがありありと想像できた。

「できるだけ、離れたくないんだ」

すると、思いがけず少年の口から飛び出してきたのはそんな言葉。

「僕らはずっと離れ離れだった。こうして毎日一緒に食事できることだって、未だに信じられないくらいなんだ。ここ数日は、夢の中にいるみたいだ」

「俺はお前らが毎日食ってる量が未だに信じられねえし、かかってる食費は夢でもなんでもなく裕贍な現実だ」

「あはは……はは」

千穂もアシエスとイルオーンの食欲をよく理解しているだけに、苦笑せざるを得ない。

しかし、あることに気づき、千穂の笑いは要んでゆく。

アシエスもイルオーンも、想像を絶する食欲を見せるが、体質に一切の変化が無い。

だが、かつては物理的に干支を交え、今はバーガーとチキンを片手に飲み合う同僚のセンタ

ツキーフライドチキン<sup>ツキーフライドチキン</sup>、糖々<sup>ツキーフライドチキン</sup>谷店<sup>ツキーフライドチキン</sup>店長<sup>ツキーフライドチキン</sup>、三月こと大天使サリエルは、本陣<sup>ツキーフライドチキン</sup>に熱を上げた末に、食マダロナルドのセツトを大量に食べた結果、期間中で驚くほど太ったものだ。

サリエルとアシエス達のどちらが物を決山<sup>ツキーフライドチキン</sup>食べた反応として普通かは考えるまでも無いし、大量とはいふもののサリエルが食べた量はアシエスやイルオーンに比べて圧倒的に少ない。

アシエスとイルオーンだけが見せる食欲には、大食いの一言で片付けてはいけない理由があるのではないだろうか。

千穂は喉<sup>ツキーフライドチキン</sup>咽<sup>ツキーフライドチキン</sup>な不安が湧き上がる心を鎮めようとするが、次にイルオーンの口から飛び出してきた一言で、はつきりと不安の海に突き落とされた。

「でももしこれが夢じゃなく現実なら、ここは僕らの居場所じゃない」

「……」

息を呑んだのは、千穂だったか、真央だったか、或いは双方<sup>ツキーフライドチキン</sup>だったかもしれない。

「僕にもアシエスにもアラス・ラムスにも、帰らなきゃいけない場所がある。帰りを待ってる皆がいる。でも、この前みたいに僕が使えなくなったら、次は帰れなくなるかもしれない」

「それ以上言うな」

真央は打って変わって厳しい声色になるが、イルオーンは構わず言った。

「金<sup>ツキーフライドチキン</sup>いたい皆がいる。力を貸してほしい」

「言うなっつってんだろ」

「……イルオーン、お願い、抑えて」

真実の鮮やかな気配を感じ取ったライラが低いが鋭い声でそう言い、ようやくイルオーンは収まった。

「分かった。ごめん」

素直に詫言じたイルオーンは、真実にべこりと頭を下げると、再び顔を焚きつけてしまった。千穂に向かつて、同じように頭を下げた。

「チホも、ごめん。僕はいつも、チホを傷がらせてばかりだ」

「え……あ」

千穂は、決して嫌がってなどいない。だが、セフィラから生まれた少年は、千穂の心に果敢なく前種の恐怖の正体を、敏感に感じ取ったのだろうか。

「初めて会ったときも、この前も。僕は、チホみたいの人を守らなきゃいけないのに」

「私みたいな人を、守る？」

「チホには何回謝っても謝り足りないのに、チホはいつも、美味いご飯を作ってくれる。優しくしてくれる。僕は……そんなチホから、大切な物を奪おうとしている。どうしたらいいのか、分らない」

「イルオーン君……」

「おい、いい加減に……」

「ああ！ こんな所にいたのか！」

その瞬間、井川階段の方からノルドが驚いた声で駆け寄ってきた。

「すまない、ちよっと目を離した隙に飛び出してしまつて」

幾度何かと真奥に脱散されることの多いノルドは完全に近所付き合いに悩むお父さん状態だが、ふと居座を見直す。

「アシエスは融合しているのか？」

「……出てこい」

「おワア！」

真奥の仏頂面からそれこそ噴き出されたように空中に出現し、そのまま壁の上に落下したアシエスは、それでもめげずに立ち直ると、真奥ではなく半腰に向き直る。

「チホ、やっぱ考え直した方がいいッテ」

「とう？ か、考え直すって？」

「マオウだヨ！ 嫁れたらマジでケガする男だヨ！ マオウと結婚したら絶対苦勞するヨ！」  
突然飛び出した「結婚」なるワードに、既に導きわかれの緊張感を覚えていた千穂の思考はあっさり臨界点を突破してしまった。

「アアアアアシエスちゃんや、な、何や、なんの話いきなりや」

「そのまんなまの話だヨ！ チホも見たでシヨ！ マオウはいつだって都合悪くなると私を融合

状態にしちやうんだモン——絶対将来、メンフロネルしか言わないロタデナシの水ウジヤタブジンなナースュカンバタになるに決まってあだうああああアアア——

一体どこから仕入れたのか、昭和のチンブレートを思わせるアシエスの言葉に千穂の思考が空転しはじめた瞬間、鈍い音と共にアシエスの口から神祕のセフィラの化身らしからぬ汚い絶叫が飛び出した。

「今のは痛いね」

「ちよ、ちよっとサタン、アシエスは女の子なんだからもう少し優しく……」

それまで車座を蹂躪していた藤原とライラが思わず反論するのはこの、真奥の鮮やかな放棄制裁の結果である。

「俺は言葉が通じないガキを大人しくさせる方法を、これしか知らねえ」

真奥はそのままアシエスの脳天と首根っこをがっちり掴むと、強引に二〇一号室から強制退去させ、ノルドに引き渡し、叩きつけるようにドアを閉めた。

大人しくさせる、と言いつつ外の廊下からはアシエスの懐み言やら呪詛やら罵詈雑言が延々聞こえてきてはいるのだが、真奥はその全てを無視し、ドアに鍵とチェーンロックをかけ、心算されたようなため息をついた。

「……悪いな、ちーちゃん」

「は、はい？」



「その……気にすんなよ。イルオーンと、アシエスの言うことは」

「え、あ、は、はい」

思考が空転していた千穂はほとんど条件反射で頷いてしまう。それを見た真美が再びライラと対峙するように畳に膝を下ろしたのを見て、今日自分がこの部屋に來た理由を思い出し、自分も座に降るべくダウンコートの前を開けて膝を下ろした。

だから、千穂はタールダウンはじめた思考の中で浮かんた、ささやかだが、確かな存在感を放つ疑問を口にすることはできなかった。

それは、この場では、全くもって意味の無い問いで、極めて個人的な疑問であつたからだ。千穂は、この場に呼ばれた理由を理解している。

異世界エンテ・イスタの人類の運命がかかつているらしい、魔王と大天使の会議の立会人、その一人に、悪い人である真美から直々に指名されたことは、千穂にとって傷むべきことである。

真美の傍にいられる、真美の役に立てる、真美の力になれる、その絶好の機会。だから、千穂はその言葉を真意に呑み込み、慎重な思考で返をした。

イルオーンとアシエスの言うことの、何を、気にしなくて良かったのだろうか。

## ※

實のところ、千鶴は真美とライラの合戦の立会人に選ばれてはいるものの、そも何を話し合  
うのかよく理解できていない。

藤原の病室での出来事から、恐らくライラは真美と真美の力を借りて、エンテ・イスラの  
セフィラ達が陥っている窮状を打破しようとしているものと思われる。

これまでのライラの全ての行動はそこに帰結しているはずだが、千鶴が知る全ての話を融合  
すると、つまりは幼い頃の真美が魔王サタンになることも、真美が勇者エミリアとして真美と  
敵対することも、ライラの要因したことだったのか、という話になってしまふ。

真美側にはアラス・ラムスの原型であるイエソドの欠片。真美側には「進化黒剣・片翼」と  
いう形でやはりイエソドの欠片があり、この両者のぶつかり合いは、ライラやヴィタ・ローザ  
師団の太鼓であり地球のセフィラとも密接な関係のある波動黒剣も行く先を憂いていた「エン  
テ・イスラの人類」に多大なる犠牲を強いたはずだ。

しかも、他ならぬ千鶴自身、エンテ・イスラの人類ではないにも関わらずエンテ・イスラの  
イエソドの欠片を一つ、保持しているのである。

千鶴は最終、欠片のあしらわれた黒輪を失くさないよう、特別に購入した黒付きのアタセサ

リーケースに入れて持ち歩いている。

高校生の身分で宝石のあしらわれた指輪など大っぴらにできないのも、当惑のようにアルバイトではアクセサリーの着用が禁じられているからともそも前に慣れられる時間が少ない。

欠片を持っていたことで天界の天使に狙われ命の危機に陥ったこともあったが、今となつては千穂の恩顧は天使など問題にならない力を持つ真真や恵美、天祥や志波などの強大な存在によつて守られている。

例より、千穂がこの指輪を手に入れた場所のことで、千穂にこの指輪を託したのが誰かということを考えると、今も日本で暮らすタイラやガブリエルが、千穂から欠片を回収しないようにしていることには一定の意味があると考えるべきだった。

千穂が見聞した偉大な謎の中心には、常にセフィラ・イエソドの欠片がある。

今日は、その謎が解き明かされるのだろうか。

「とりあえず、千穂さんにはこれを見てほしいの」

「あ、はい。え？ あれ、え？」

これまでのことを深刻な顔をして聴き返していた千穂は、ふと横から差し出された物を反射的に手に取り、それがなんなのかを確認して目を丸くした。

それは、ごく一般的なタリアファイルだった。

日本中、どここのコンビニエンスストアや文房具屋でも購入できそうな、青い表紙のタリアフ

アイルをこく自然に手に取り、表紙を開いてからふとおかしくなことに気づいてライラと表紙の顔を交互に見た。

おかしくはないか。これは、いくらなんでも。

「あ……世界の、危機……へえ」

百円均一のA4サイズ12ポケット綴りのタリアファイルに、一つの世界の、いや、惑星の危機というものは収まってしまふものだろうか。

表紙を開いた一枚目に、今時公民館で開かれるカルチャー教室のちらしだってもう少しまともデザインするであらう資料表紙が入っていた。

「セフィロトの樹への干渉から想定されるエンテ・イスラ人類の危機について」というタイトルが、立体的かつ弓なりに重み、白い部分を取りやう七色でグラデーション染色され、それがA4の紙の中心から大分ズレたところに印刷されている。

「……ライラさん」

「読みやすいように、色をレイアウトも考えてみたの」

目に得意げな光が宿るライラに、千穂は嘆息した。

由がりなりにも危機である。

しかも人類の危機ということば、多くの人命がこの問題に関わっているだろう。それなのに虹色はないだろう虹色は。



「なんて言うんですしたっけ、こういう文字のCGっていうか、デザインっていうか」

「ワープロアート。すっごい古いバージョン」

答へは顔が赤っていった。

「僕のPCにそれ使えるソフトが入ってないから分からないけど、少なくとも現行のバージョンではそのデザインはすんなり使えないはずだよ」

「あー確か、小学生の頃、両親の家で大きなパソコンで教わったことがあるような……」

「と、当時は最新式だったのよ!」

現代電子文明の恩恵に浴す漆原と千穂の反応がとことん冷めているので、得意げだったはずのライラが今度は顔で顔を赤くしている。

そして千穂は、目の前の「大天使」と名乗る『異世界の勇者の母』が、自前のパソコンを使ってこの資料を作成した、ということを決れの中で確認した。

「今みたいに安くもないし簡単に買えるものでもなかったけど、私頑張って働いて買ったんだから! その後ちゃんと、うちの人のためのお金もしっかり稼いだし」

「ライラが最初日本に来たの、十七年前だったっけ? その頃はまだデスクトップPCのCD-ROMが2GBとか4GBとかいう時代でしょ?」

「いくらなんでも十七年前のをそのまま使ってるわけないでしょ! 十年前に買い替えたからハードディスク容量は60GBあるしビジネスソフトも当時の最新式よ! それ以外にも、パン

コンに魅れる機会だってちゃんとあるんだから！」

タイラは反論するが、反論してほしいのはそんなことではないし、パソコン界隈で十年前の最新式とは、現在ではどこを探したって見つからない貴重品ということではないか。

「このノート、真実が詐欺にかかったレベルの型落ちで買ってきたのに、それでもCDタイプ80GBあるんだよ。十年前とかとつくにSサポート切れてるだろ。危ないよそのPC」

「いいのよ別にー ネットには繋いでないからー」

千穂はなまじ身を以ってタイラの脅威的な力を体験しているだけに、今でも彼女に対して真実や徳原ほど身近に感じられないところがあった。

しかし、大天使と随天使が手持ちのパソコンのスペックについて極めて悲しいラインで言い合っているのを見て、ちょっとだけ微笑ましい気持ちになる。

千穂にとって今更こんなこと、驚くに値する光景ではない。

「ネットに繋がってない十年前のパソコンとか、一体なんのために存在するの？」

「だって、ネット見るだけならスリムフォンの方が簡単でしょー」

タイラが部屋の際に置かれた靴の中からスリムフォンを取り出したのを見たとき、千穂は確信した。

「やっぱり親子なんだなあ」

「え？ 千穂さんなあに？」

「あ、いえ、別に……」

千穂は思わず口からこぼれた言葉を慌てて隠す。

ライラと恵美の間の溝は、先だっての地下鉄襲撃事件以降はんの少しだけ埋まったかに見えるが、恵美に母と向かい合う覚悟ができないのと、ライラが娘との接し方を決めかねていることが重なって相対どころか会話すらまともにできていない。

そんな二人に「親子だ」などと言えば、ライラは喜んでしまおうし恵美は嫌がるだろう。

「ライラさんなんと言うか、普通の人間と変わらないんだあって」

「あら、それは個人的に嬉しい感想よ。私は天使なんて存在になんたくてなったわけじゃないし、むしろ身近に感じてほしいとずっと思ってたんだから」

ライラは千穂の言葉を好意的に解釈するが、そこに隙原が水を差した。

「今の佐々木千穂のセリフは『もう少しそれっぽい人だと思ってたけど、なんか思ってたのと違った』って意味でもあるから、素直に喜ぶのもどうかと思うよ」

「隙原さんー」

千穂は思わず抗議の声を上げるが、

「違わないだろ。お前基本的に天使にも悪魔にもどきどきしないし、何かと僕とかサリエルなんか」  
に「本当に天使なのか」とか言ってきたりするし」

「や、それはそんな……た、たまに言ったかもしれないけど」



「確かに、そうかもしれねえな」

「真鳥さんまでっ？」

漆原だけならともかく真鳥にまで言われてしまうと、千穂としてもショックを受けざるを得ない。

自分は意識してはいないだけで、そこまで皮肉味、或いは嫌味っぽい態度を取っていたらどうか。落ち込む千穂だが真鳥の言わんとすることは、漆原のそれとは少し違っていた。

「や、なんつーかき、ちーちゃんって気持ちというか心というか、そういうところまみじやなく強いからさ、俺も程度の悪魔やサリエルやガブリエル程度の天使じや、ちーちゃんからの畏敬っていうのが、そういうのはまだまだ引き出せないなって意味でさ」

「そ、その、天使の人間は置いておくとしても、私は真鳥さん達のことを尊敬しますー」

パニッタに陪きつつも、しつかり天使達中を排除しつつそんなことを言うものだから、ライラの千穂教しい顔を作っていた真鳥もつい笑ってしまう。

「そう言ってくれんのはありがたいけどな。まあつまり、ちーちゃんは今のままでいてくれていいんだよ」

「あわわわわわわ……」

真鳥の言わんとすることが分かるようで分からない千穂は憤て続けるが、涙を浮かしておろおろする千穂の顔を優しく押さえて座らせたのはライラだった。

「大丈夫、大丈夫だから」

「なななな何がですか」

「千穂さんが悪いように思つてなんかいないって分かつてるから、ね、良かつたらそれ、認んでみて」

「それって、あ、そうだこれ……」

海原のふたりの一言のせいで話がズレてしまつたが、そもそもはライラが天使らしからの資料を纏めてきたことが発端だつたのだ。

とにかくタイトルからして世界の危機など概念も想像できない雰囲気（きふき）をひしひしと感じながらも、千穂は意を決して一枚目をめくつた。

## ※

地球にも生命の樹、つまりセフィロトも、そこに生まれるセフィラがかつて存在していた。そしてエンテ・イストラにもまた、同じように生命の樹と、セフィラがある。

セフィロトは、生命の樹と詠（よ）まれる通り、巨大な樹木であり、セフィラはその樹木に成る実と時（とき）んで差し支（さ）へは無い。

地球とエンテ・イストラのセフィロトが同一の存在であるかどうかは断定は不可能である。

セフィロトは、酸素をエネルギー源として呼吸する脊椎動物が繁栄し、類人類が生まれた惑星にのみ現れる。

そして、その惑星に最も影響を及ぼす最寄りの衛星惑いはそれに準じる天体に寄生して、惑星上に存在する類人類の中から「文明を持つ人類」を育てるといふのだ。

セフィロトが人類を選別するわけではなく、基本的には進化と淘汰の歴史の中でゆるぎない順事を手にした種の進化を助ける、という形を取っている。

地獄でも道徳的に現生人類との関連が否定されているヒト属がかつて存在していたが、セフィロトが彼らを排除したわけではなく、もし彼らが現生人類の祖先を上回り惑星上に繁栄した場合は、彼らこそがセフィロトに「文明を持つ人類」と認識されていたのだ。

では「文明を持つ人類を育てようとする側」とはそもそも一体どういう存在なのか。

残念ながらライラはもちろん、天界もセフィロトの正体については解明できていない。

ただ一つ、事実として天界がかつて観測した現象がある。

セフィロトは、あるとき「最後のセフィラ」を滅亡させた後に、根付いた星から生物学的意図を以って離れ、宇宙へと消える。

地球とエンテ・イスラのセフィロトが同一のものであるかどうかは不明なのは、ここに理由がある。

ライラは現時点でセフィロトの軌跡を三つ確認しているが、現状明確に存在しているのはエ

ンテ・イスラの一族だけだからだ。

とにかく、セフィロトは進化するべき人類の運命を終えろと、彼らを助けるべく『子供達』を生み出す。

それこそが、セフィロトが生み出す十のセフィラ。

思考と創造のケテル、知恵のコタマリ、理解のビナリ、愛のケセド、峻厳のゲブラー、美のティファレト、勝利の本ジアク、栄光のホト、基礎と精神のイルムゾド、王国と物質のマルタト、セフィラ達の役割は、人類に『危機』が訪れたとき、致命的な大滅亡を防ぐために人類を助けることにあった。

思考と創造、知恵、理解、そして美が多くの人を蝕む病や災害や争いから身を守る方法を見つける手助けをし、勝利と栄光が戦争を生んで文明を磨く手助けをし、峻厳と慈悲が競争のための戦いを生み出し、あるいは収める手助けをし、基礎と精神、そして王国と物質が個としての人類と集合としての人類の在り方を整える手助けをする。

セフィラ達は、決して人類の守護者でもなければ歴史への干渉者でもない。

ただ知覚なる形であっても、人類が絶滅の危機に瀕した時点での人類の文明がその危機を避けようがなかったときに限り、人類を滅亡させるために力を振るうのである。

だが、エンテ・イスラに於いて今、セフィロトもセフィラも、その機能を封印されてしまっている。

天界の天使達が、エンテ・イスラのセフィロトを鎮圧し、セフィラを独占しているからだ。

エンテ・イスラ人類とセフィラ達の間に天界を存在させることで、天界の天使達は言葉通り、エンテ・イスラ人類にとって奇跡を起こす「天の御使い」になってしまった。

これによって起こった弊害は様々ある。

まずエンテ・イスラ人類全体で、科学技術の進歩が大きく遅れてしまったこと。

そして、聖法氣と魔力という「資源」を、エンテ・イスラ人類が発見してしまったことである。そもそもセフィロトが寄生する惑星の環境は、発生する人類の類似点を見ても分かる通り、極めて限定的かつ似通っている。

故にエンテ・イスラ人類が本来の進歩を辿るのであれば、程度の差はあれ地球の歴史がそうだったように、人を癒すために医療が、戦うために兵器産業が、生活を便利にするために科学技術が進歩するはずだった。

だが天使の介在により、エンテ・イスラ人類はそれらの技術を発見したり編み出したりする機会を逸してしまふ。

天使は人類の危機を、天使が元から持っていた方によって直接的に救ってしまった。

そしてその方を見たエンテ・イスラ人類が求めたのは、人類の恒久的な進歩を促す創造ではなく、天の御使いが振るった奇跡の力の再現であった。

即ち、それが聖法氣をエネルギー源として発現する法術である。

聖法氣の存在にエンテ・イスラ人類が気づいた頃と同時に、天使達は地上に降りることを控えるようになる。

結果的に天使の存在は神格化され、現代まで続く大法律教会の教義の礎を生み出すに至り、以後エンテ・イスラ人類は聖法氣の正体を解明しながら法律によって文明を発達させてゆく道を選んだのである。

だが、ここに大きな問題があった。

まず単純に、天界にも天使にも、セフィラ達が生来持つてゐるような人類を守るといふ先天的意志が不足していること。

人類を育てるといふ一つのシステムとして構築されているセフィロトとセフィラは、決して人類の滅亡に繋がる致命的危機を見逃さない。

これもまた天界で観測された事実として蓄積された情報だが、天使達にその代役は決して務まらない。

物理的にも意識的にもこれまでの経緯を見ても、天使達の行動がセフィラのそれとまるで一致しないのは明らかであり、セフィラの目録で見れば、これまでエンテ・イスラ人類が滅びに瀕していないのも、ある種奇跡に等しい。

そして何より問題なのは、聖法氣は、決して無限の資源などではないということだ。

セフィロトは「文明を持つ人類を育てる」という機能を持つが、セフィロトもセフィラも有

食物である以上、なんらかのエネルギーを摂取しなくては生きられない。

セフィロトが必要とするエネルギーとは、他ならぬ「人類の精神力」であつた。

実を結ぶ農作物ががわずかな水と栄養で育つべき成長を遂げるように、セフィロトと人類は生存に必要な力を補い合うという意味で、共生関係にあるのである。

だが、今この聖法氣が、エンテ・イスラ全土で悉るべき勢いで消費されている。

法術を基礎とした文明が発展したために、聖法氣消費量がセフィロトに必要なエネルギー量を大きく上回っているのだ。

「精神力が、エネルギー……」

この記述に行き当たった千穂は、思わず息を呑む。

真実達の魔力が、悪魔や絶望の精神を糧に生み出されていることを知っている千穂には、無視できない事実だ。

これを信じるのなら、忠実や節乃はもろみん、自分の身の内にある聖法氣の正体は、エンテ・イスラに生きる人類の精神エネルギーということになる。

それを意識的に漏れ出し、エネルギーとして消費してしまうと何が起ころうか、次のページに記されていた。

聖法氣の大量消費の結果として予見される現象は、セフィロトの枯死とセフィラの死。

絶对的な危機における切り札を失ったエンテ・イスラ人類の速くない未来での衰退。

危機に対して切り札となり得るセフィラを失った上に、法術のエネルギー源である聖法氣の総量は莫大な消費によって絶対量を減らし、いずれ法術が發動しなくなる日が来る。

それは、エンテ・イスラ人類が文明を喪失する日と同義だ。

エメラダやアルバートやオルバのような許容聖法氣量が多い人物でも、いずれは善悪を失いただの人となる。

そうなったとき、科学の発展していないエンテ・イスラ人類は、危機に陥っても己を救う術を持たないのだ。

聖法氣がそもそも人間の精神力を源とするエネルギーである以上、それを過剰に消費してしまふことの悪影響はこれだけにとどまらない。

ライラの衰弱の結果、聖十字を構成する五大國の全地域に於いて、出生率がこの何百年の間、緩やかに下降しているのだ。

聖法氣の過剰な消費が、新たな人類が生まれることすら障害している可能性をライラは指摘している。



志波が、エンテ・イスラ人類の危機はもう百年先に迫っているかも知れない、と述べた理由もこの事実に関るところが大きい。

だが、全世界を侵略して統計を取るような文化はまだエンテ・イスラには存在しない。

魔王軍侵攻によって破壊された五大陸連合騎士団も、そこまでの機能を持つには主らないだろう。

むしろこれから魔王軍の突撃からの復讐やさらなる発展のために、益々法術文明が隆盛していくことは想像に轉くない。

だからこそ、ライラは今からでも先づのセフィラを解放しなければならぬと強く考えていた。起こつてしまったことは仕方が無い。

だが、今ならまだ、セフィロトとセフィラをあるべき姿に戻せば、大きな犠牲を払うことになるだろうが、エンテ・イスラ人類をこの危機的状況から救うことができるかもしれない。

だが、その未来の前には天界とそこに住まう天使達という大きな障壁が立ちはだかっている。天使は何も、エンテ・イスラ人類に対して天使面をしたいがためだけにセフィラを蝕占しているわけではない。

蝕占することによって、天使達もまた大きなメリットを得ているのである。

それは天使達の超長寿命や際立つた力に関係することなのだが、この先に關しては、真実と虚偽がライラの目的を知った上で力を貸してくれるかどうかによって、話すべきか話すべきで

ないかは変わってくる。

ライラの目的は、セファイロトとセフィラを天界の支配から解放し「最後のセフィラ」を産み落とすのを見届け、エンテ・イスラ人類の未来を救うこと。

そのためには、多くの戦いを覚悟する必要がある。

多くの天界の天使達が敵に回することは必定であり、その力に対抗し得る存在を、ライラは長い時間をかけてずっと探していたのだ。

## 幽

「……よく、分かりました」

「どうだった？」

剣神に讀ちたライラの声を聴きながら、千穂は返事に迷ってしまふ。

とうあえず、書かれている内容について疑うことはしない。

かつて天界や天衆から直接聞いた話と関わり合いが深い事柄は決山あるし、自身がこれまで見聞したことと照らし合わせても、納得できる点が多い。

しかしである。

エンテ・イスラの危機だといふのだから、このタリアファイアには多くのエンテ・イスラの

人々の命がかかっていると考えなければならぬ。

それなのにこの報告書には、そういう緊張感がどうにも欠けているのだ。

ライラの強く危機や、これからエンサ・イスラに起こる問題はなんとなく理解できた。

だが、この他人事感（*otherness*）はなんだろうか。

外国で口伝されている神話を児童向けに翻訳した絵本でも見せられたような感覚に、千穂は眩暈（めまい）がしてくる。

模式図や図解や表なども織り込んで、ライラなりに読む者に分かりやすく纏めたつもりなのだろう。

だが、こういうことではないのだ。

千穂が求めていることも、そして恐らく真実（*truth*）が求めていることも。

これも大事だけど、これだけ聞かされたって真実や千穂はなんの判断もできないし、気持ちの上で通にも通にもならない。

「ちょっと、僕なこと聞いていいですか？」

「……」

千穂はやはりライラでなく真実（*truth*）に許可を求めるように言くと、真実は目だけで聞いた。

「どうぞ、なんでも聞いてー」

ライラは言葉通り、どこからでも来い、という気配を全面に押し出して千穂に対面する。

「じゃあ」

千穂は小さく咳払いをしてから、ライラにしっかりと顔を向けた。

「ライラさん」

「ええ」

「今、何か日本でお仕事されてるんですか？」

「……………え？」

この場の誰かが予想だにしなかった質問を発した。

ライラは男でバスターボックスに入ったのに、エースビotchャーに敬遠を食らった四番打者のような顔になる。

「えつと……私の、仕事？」

「はい」

「……として？」

ライラは張りついた笑顔のまま、千穂に問い返した。

「え、なんでも聞けて」

「そ、それは言っただけ……でも、として？」

「なんかお前、性格おかしくなってるぞ」

真奥の突っ込みも耳に入らないほど、ライラには動揺が見て取れた。

「いえ、これを読んで気になったんです」

タイラは目を点にしながら、千穂、真央、漆原の後方頭、そしてまた千穂へと目まぐるしく視線を動かした。

「その、質問に質問で返すように申し訳ないんだけど」

「はい」

「何かわかりにくかった？ 私の仕事や生活が気になるようなことが書いてあったとか……」

「いいえ」

千穂の返答は短かった。

「タイラさんの生活に関して、気になることが何一つ書いてなかったから気になりました」

「は……」

また千穂の言わんとすることが分からないタイラとは違い、真央は苦笑して言った。

「ちーちゃんは優しいなあ。俺、そこそこはこいつ自身が気づくまで絶対言わないつもりだったんだけど」

「あー、ま、マズかったですか？」

千穂は、真央がそもそもタイラの話を聞くことに乗り気でなかったことを思い出して後悔するが、真央は苦笑して首を横に振る。

「いや、誰かが言わないと自分気づきそうになかったし、いい機会だったよ」

「真実はその言う通り、突然」とするライラを目の前に、カラーボックスの中から一枚の紙と、千鶴も見ださなかったカードケースのようなものを手に戻ってきた。

「これ、お前に渡された契約書の車賃額な」

「え、ええ」

ライラは、目の前に出された見覚えのある紙面に目を落とし頷く。

「こんなもん出してきたからには少しは分かったのかと思っただけど、これ見て俺まだ半分お前の話を真面目に聞く気にはならないだろうと思っただんだ」

「な、何か不備があった？ 一応色々なテンプレートとが見たり、本とか買って勉強はしたんだけど」

「内容以前の問題だ。ここ」

と、真実は車賃額の下の方を指差す。

そこには、契約を持ちかけたライラと、契約を持ちかけられた真実、或いは真実の名前を書く欄と、押印のための「印」の文字。

「何か足りなかった？」

「ライラさん、これ……」

欄から車賃額を覗き込んだ千鶴は、ざっと一読した上ですぐに真実が何を言いたいか気づいた。

「住所です」

「へ？」

「住所。書く欄が無いです」

「じゅう、しょ」

ライラは未知の言語を聞いたかのような顔になる。

「そ、そんなもの、いるの？」

「いりますよ！ 何言ってるんですか」

ライラは衝撃を受けているようだが、千穂こそ衝撃を受けたい気分だ。

せいぜいアルバイトのための労働契約書くらいしか触れたことのない高校生だって「けいやくしょ」というものには住所氏名捺印が必要ことは知っている。

ましてライラは、真真相手にしつかり報酬まで規定された契約書を取り交わそうとしているのだ。それなのに遠方<sup>とほ</sup>の住所を書く欄を用意していないとは、意識が回らないにも極がある。

「だって」

だがライラは食い下がる。

「私は約束を破ったりはしないし、何か不満があったってお互いこの国の司法機関に駆け込むことはできないでしょ？ お互いの名前と意字を記したものがあればそれで……」

「ふふっ」

千穂は、異世界の魔王と大天使が裁判所で、

「世界の危機を救ったために約束された報酬が支払われていない！」

「規定通りの報酬は支払いました！」

「モフィラの解放にかかった千圓が、全モフィラで一律なのはおかしい！」

「子見される因襲の上限まで繰り込んだ上で算定された報酬」ということは、事前合意が取れていました！」

と民事的に係争する場を思い浮かべてしまい、思わず吹き出してしまふ。

ついでに言うところの千圓の想像の中の法理では、裁判長は属土城の國人、二〇二号室に住む助教、審議官タレスティア・ベルこと鎌月鈴乃の妾をしていた。

「ち、違いますライラさん、真実さんそういうこと言ってるんじゃないやありません！」

「じゃ、じゃあ一体……！」

「佐々木千穂も言ってたろ。僕ら普通の人と変わらないって。でも僕達に言わせれば、ライラはまだ「天使」なんだよ」

「ルシフェル？」

「ま、そういうことだ！」

千穂と津原の言葉を受けて、真実も頷いた。

「俺は、お前がどこに住んでるか知らない」

ライラは、きょとんとして目を瞬かせた。





一頓はうちの店長に言ひような真似もしてたから小金も持ってるんだろ。女と見ればすくいい顔したがるのは鼻につくが、自分のトコに従業員との関係は悪くなさそうだ。俺と鈴乃が忠実を助けにエンテ・イスラに行くに当たっては、何かあったときには商店街を守ると言うくらいには、嘘々谷に馴染んでる」

真兇は出自的な意味でも、戦場的な意味でも、因縁的な意味でも敵である大天使サリエルについて、そう論評した。

「お前のこの話、サリエルが持つてきた方がまだ真面目に聞けたかもな」

「えっ？ サリエルより、下……？ そ、そんなに？」

ライラは、真顔にシヨツタを受けたようだが、

「もつと言うと、サリエルさんはもう少し分かりやすいファイル作ってくれる気がします。作業工程とか、マニュアルとか作って」

千穂に追い打ちをかけられ、完全に撃沈してしまう。

「別に俺もあいつの人となりを利用してるわけじゃねえし、個人的に連絡を取り合ってるわけでもねえ。あいつにこういう身分証を提示させたわけでもねえ。だがあいつは木崎さんが轄々谷に居る間は、絶対にあの場所から動かない。異動の内示とか出ても、大天使の力を駆使してテコでもあそこから動かないと思う。こんな感じであいつの生活や日常ってのは、大勢の人間の間で合意が取れる」

「私も、最初は醜いこともされましたけど、色々あって最近では商店街の中で顔を合わせれば、挨拶もするようになりました」

「意外に働き者だっってこともこの間分かったしねー」

千穂も過去の遺恨は抜きにサリエルを評価し、漆原も真奥と鈴乃がエンテ・イスラに遠征した際のことを思い出して、身の程を弁えぬ感服を漏らした。

「それに比べてお前はどうかだ。どこに住んでるかも、どこから金を得てるかも分からない。今は珍しく俺達の前に頻繁に顔を見せちゃいるが、いざ消えられたら追いかける手段も無い。これまでのこと考えたらお前、下手すりゃ真奥やノルドが危険な目に遭ったって出てこない可能性もあるだろ」

「そ、そんなことは……」

ライラは否定しようとするが、真奥は強い調子でそれを遮った。

「真奥もきつと同じこと言うぜ。それに俺に言わせれば、これまでずーっと奥でこそこそしてたくせして、どうしてこのタイミンダで俺達の前に出てきたのか、その理由すら変に分からないままだ。なし崩し的に魔王城の喉元に集たりしてるが、皆が皆そこんとこ通してると思えるよ」

「それ……は……」

ライラも、ようやく真奥が言いたいことが分かってきたのか、疑心が固々しなくなり顔を赤かせてしまう。

「要は体裁はつか整えようとしてもお前のやり方は不誠実なままだよ。その物語の設定は資料風のファイイルで情報を隠蔽<sup>かくぺい</sup>するように見えて、後でドロンするために自分の現状だけはセザイクかけとこうって遠慮<sup>えんよ</sup>かと隠蔽<sup>かくぺい</sup>りたくなるくらいにな。大体その情報も、あやふやなことだらけで内容がとことん薄<sup>うす</sup>いし」

「……ごめん……なさい」

「そうなりや結局、その話だってどこまで本当か疑わざるを得なくなる。俺にとってお前も天使が敵対組織であるという前提に目を瞑<sup>こ</sup>ってまで、信用したくなる要素にならない。例えお前の行動が、アラス・ラムス達の将来を思っていることだったとしても、だ」

「……」

「ライラさん……」

千穂は、俯<sup>うつむ</sup>いてしまったライラの肩に手を添える。

「大丈夫、千穂さん、ごめんなさい」

ライラはその手を、優しく抱んだ。

「そうよね、この前ルシフェルの病室で千穂さんにも注意してもらったのに、私はまた同じことを繰り返そうとしたのね」

「ずっと日誌者に敬してたから、日誌根性が染みついてんじゃないの」

「おいライラ。お前、誤解<sup>ごかい</sup>にまでこんなこと言われて、恥<sup>は</sup>ずかしいのか」

「ちよつと真実！」

「いいの、言われても仕方が無いし、それに」

「ん？」

ライラは少しだけ顔を上げて、少しだけ顔を横に向けて漆原を見た。

「ルシファエルがこうなってしまったのは……私にも責任があるし」

「は？」

「え？」

ここにきて初めて、真樹と千穂は妻の表情で疑問の声を上げ、

「あのさ、私がこの子の育て方を間違えたんですみたいなの言ひ方すんなよ。真樹に傷つく」

漆原もまた、心臓がどうにライラを殴んだ。

「でも、ルシファエル」

ライラは食い下がろうとするが、漆原は首を横に振る。

「気にしてないしそもそも本気であんまり覚えてない。どんだけ昔の話だと思ってるの」

「そう……」

それきりまた漆原は顔をパソコンに戻して黙った。

ライラは少し並しげにその背を見ていたが、そんな二人の様子を見た真樹と千穂は穏やかではなかった。

「な、もちろん。今何か俺、恵美ん家の家庭争議がとんでもない方向に流れそうな話聞いた気がする」

「私も、潮と連絡にならないことを聞いた気がします」

「その二人、受け取り方と受け取る人次第で様々な機微の命が潜えそうな誤解やめろよ」  
「え？二人共どうかしたの？」

今の会話を真奥と千穂がどう捉えたか分かっている者と分かっていない者が揃って二人を見た。

「いや、別に……」

真奥と千穂は同時に気不味そうに顔を歪らす。

「でもそうね、分かったわ。ねとサタン。それによければ千穂さんら」

「ん？」

「なんですか」

「二人にはこの話は一旦忘れてもらって」

と言いながら、ライラは何の世界の危機ファイルを手から引き取ってしまった。  
そして改めて座を直すし、しつかりと二人の目を見て言った。

「もし良かったら、私の家に来てほしいの。もちろん、日本の私の家よ」

「お前の……」

「おうち、ですか？」

千穂はキコトンとして、真奥はやや不審げに眉を蹙める。

「そう」

タイラはしつかりと頷いた。

「初めて日本に来たときから何處か引つ越してゐるんだけど、ここ五年はずっと同じ所に落ち着いているわ。仕事柄、帰れないことも多いんだけど」

仕事柄、という言葉が、果たして世界の危機ファイルに関係する話なのか、千穂の質問の答えなのかはこの時点では判断のしようがなかった。

「そこにはこんなファイルだけじゃなくて、私が何十年も世界を回って集めたり纏めたりした資料も置いてある。文庫や法具や天界にしかない道具なんかも置いてあるわ。あとは……やろうと思えば、天使の羽根ペンだって、サタンやエミシアや千穂さん……ここに来る皆さんの分だけ作ることもできるわ。それなりに時間はかかるけど」

「それって……」

思いがけない道具の名に千穂は驚き、真奥も軽く眉を上げた。

天使の羽根ペンとは、大天使の翼の羽根を使って作るもので、本来ならダート術を使えない者でも自由にダートを作成できる道具だ。

タイラ自身大天使であり、やろうと思えば天使の羽根ペンも作れるのだらう。

本渡曰く、エンテ・イスラの天界は地球との接触を完全に断ちダートでの行き来も不可能だ  
というが、ライラが天使の羽根・ペンを人数分作るといふなら、セフィラの解放云々を抜きにし  
ても真流達にとっては悪い話ではない。

元がライラの羽根なのだから、ライラがもし行方をくらましたとしても、追跡するずがかり  
にもなるだろう。

根気強く待つてようやく見えてきた具体的な手がかりに千穂は思わず真流を見ると、真流は  
千穂が思った以上に迅速な判断を下した。

「俺は別に今からでもいいぞ」

「えっけ」

今度は千穂とライラが声を揃えた。

「ちーちゃんはずすがにこの後マズいか？ 時間、遅くなっちゃうか」

「え、あ、あ、えーと」

「……なんだよ二人共」

真口同音に憤てふためきはじめる大天使と女子高生。

「そ、その、心の準備が」

迄事まで一緒だ。

「心の準備って、お前が来いっつつたんじやねえか」



ライラに向かって呆れた調子で言う真美に、ライラは両手を合わせて押むように頭を下げた。  
 「ご、ごめんなさい。来てほしいのはやまやまなんだけど、まさかこの後すぐなんて言われるとは思ってたんで、その、ちょっと、今日は無理なの」

「なんだだよ。この後何か予定あんのか。真美は今日は夜十時までバイトのはずだから、真美と会うってんじやねえよな」

「う、うん、違うけど、その」

「おいまさか……まだ真美も、お前ん家知らないってんじやないだろうな」

「!!」

真美の低い声に、ライラと千穂は、またシタロしたように鼻を音んだ。

だがその後の二人の反応は、二手に分かれた。

ライラは真美から目を逸らし、千穂は口を引き結んで下を向いてしまったのだ。

「じ、実はその、エミリアとはまだこういう話、全然できてなくて……」

「お前なあー」

どこまでも言い訳がましいライラの返答に、真美は目を見開いた。

「まだできてねえのかよ。あれから何日経ったと思ってるんだ」

真美と真美がライラと取引をすると言いついてから、既に一週間以上経っている。

「俺達だぞ、真美より先にお前ん家行くとか。後で俺が何か言われるっていうより、お前がま

な恵美の不興を買うことになんぞ」

世の中も年末に向けて慌ただしくなっているこの時期に、まだ恵美とまともな会談の機会を持てていないというのは、一体どちらに原因があるのやら。

「そ、そうよね。分かつてる。分かつてるの。エミリアにもちやんと話す。そ、それらあつてとにかく今日はダメ！ ごめんなさい！ あ、明日……ううん、明後日なら……」

「明後日？」

真美は胡散くさげに鼻を鳴らしながら、冷蔵庫に貼られた今月のシフト表を見る。

「ふん、丁度いいことに夕方以降は俺もちーちゃんも恵美もシフトに入ってたやな。こんなこと、流石に無いぞ。いいんだな、明後日で」

明後日は平日だが、如何なる偶然か、夕方以降は真美と千穂と恵美の三人が同時にシフトから外れていた。

「が、頑張るわ」

明後日家に行くぞ、という言葉に対する返事としてはおかしい反応だったが、少なくともこれで、ライラという謎の存在を包むベールが少し薄くなることが約束された。

「それと、いい機会だからお前の携帯電話の番号教えろ。もう本当、取れるときにお前の情報取っておかぬと不安で仕方ぬよ」

「はい、分かりました」

ライラは素直に先ほどのスリムフォンを取り出し、電話帳を渡すして真美に見し渡す。

真美は自分の携帯を聞いて双方を見比べながら手打ちで番号を入力し、千穂にも同じように登録させてからライラに放つて返した。

「あと、真美にはお前の口から話しておけよ。お前の連絡先はこっちで勝手に共有させてもらうが、俺やちーちゃんが都合良く真美に連絡するなんて思わない」

「……そっちも頑張って」

真美がすっかり割れた釘に、ライラは神秘的な顔で頷いた。

話がなんとか纏まりそうになったとき、津原がふと尋ねる。

「で、夜々木千穂の心の準備って何だったの」

「……え、あ、はい」

最初は動揺を見せたものの、ライラが自宅に真美達を招く、という話の途中から徐々に千穂の様子に落ち着きはじめていた。

「ちーちゃん？ どうした？」

というより、ともすれば落ち込んでいるとすら思える様子に真美が心配そうな様子を見せるが、千穂は力なく首を横に振った。

「いえ、その、大丈夫です、今の話の間に、解決しました」

「うん？ なら、いいんだけど」

「千穂さんも来てくれる？ 良ければルシフェルや、あとアルシエルさんやベルさんも……」

「あ、はい、私、伺います……」

千穂は少し低いトーンのまま頷き、

「僕はやだ、面倒くさい。行つたつて何もやることないし」

津原は全人類が予想した通り、外出を拒否。

「あとは百屋と鈴乃か。まあ、そろそろ行つたつて仕方ないかもしれないが、一応聞いておくか。じゃあ明後日な。俺のシフトが十七時までで、あとはちーちゃんの学校の都合を確認してから改めて持ち合わせの時間をこっちから連絡する」

「い、いいわ」

さつきから、妙にライラは口調が悪い。

「真真さん、ノルドさんとエメラダさんも誘つた方がいんじゃないですか」

「ああ……まあエメラダはともかくノルドは確かに……」

先ほどのライラの口ぶりからしてノルドも場所は知つていても行つたことは無いようだ。

行くのが重要だけならともかく、幸の他人の真真や千穂が行こうというのに連れ合いのノルドを無視するのは仁義に背くだろう。

そう思つてのこくこく一粒的な配慮だったが、血相を変えたのは彼ならぬライラだった。

「あの人はダメ!!」

「は？」「よう」「何それ」

この反応は、三人共さすがに予期外だった。

「ダメつつたつたってお前さういう訳には……」

真奥は困惑してしまふ。

ノルドは、タイラの夫である。一方、悪い言い方をすれば真奥は赤の他人の男だ。

それなのに真奥が良くてノルドがダメ、とはどういうことだろう。

「う、うん、おかしいことは重々分かつてる、分かつてるの、でも、その、あの、あの人が来るとなると、明後日はその……」

「意味分かんねえよ。明後日がダメなら、俺達二人がフリーの日なんて当分ねえぞ！」

真奥は冷蔵庫に貼られている、十二月のシフトを見て顔を曇める。

「分かつてる、分かつてるわ。そう、ここまでは放っておいたのは私が悪い。私の罪。大丈夫、なんとかするわ。あの人が来ると言うとも限らないし、まあ、明後日で、明後日でいいわ」

魔王サタンが行くと言っているのに、夫が来ないということはあるまいと思ふのだが、これ以上何が言つてタイラの気が変わっても困るので、真奥はそれ以上突っ込まなかった。

「タイラさん……それで、私達は明後日はどこに行けば？」

「あ、そ、そうよね。そう。えっと、新宿、新宿駅で待ち合わせでいい？ 大江戸線に乗るか、京王線の西口改札でいいかしら」

「分かりました」

千穂も、友人と遊びに行くときなどはよく待ち合わせに使つた場所だ。

「サタンも、それでいい？」

「ああ」

「その、あの人には、あの、私の家のことは私から話すわ。やっぱ、自分で話さなきゃいけないことだと思ふし」

「恵美にもだぞ。忘れんなよ」

「……ええ」

なぜかノルドの名前を出した途端に冷や汗をかきはじめたライラも、このときの恵美の気持しには真剣な顔で頷き、

「……」

千穂は、少しだけ寂しげな笑顔でただ、その様子を見ていたのだった。

「はあ……寒くなったなあ」

千穂は夜の静寂の町を一人、家路に着いていた。

真実が家まで送ってくれようとしたが、千穂は断った。

書院なら真奥の車し由に飛びつくところだが、今日は真奥と二人きりになりたくなかった。ライラはもつと何か話したそうにしていたし、日が暮れても時間的にはまだまだ可憐な頃合いだから危ないこともない。

天使も悪魔も日本に攻めてくる理由が無く、先日のトラブルの原因であるイルオーンも保護されて、危険らしい危険は今、一切無くなっていた。

だから真奥の手を煩わせるには及ばない。それが、一つの理由。

もう一つの理由は……。

「真奥さんは、優しいな」

誰にも聞こえないように呟いた言葉は、白い吐息となつてかすかに空を漂い誰の目にも入らぬとまらぬことなく消えた。

ライラさへ良ければ千穂だってこの後枝女の家に出向いても構わなかったのだ。

ただ、ライラの家を訪ねるという話が飛び出したとき、千穂の脳裏に浮かんだのは恵美の顔だった。

真奥が良くてノルドがダメなのはどうか、という疑問と愛想の淵は同じである。

実の娘である恵美を差し置いて、他人の手帳がライラの家に行っているのか。

千穂にできていなかった「心の準備」とはこのことであつた。

恵美がどんなに頑強な壁をライラとの間に作っているとしても、ライラは何を費いてもまず

はその壁を乗り越え、東美との距離を縮めなければならない。

万が一東美よりも先に誰か他人がライラの自宅の場所を知り、そのことが東美に伝われば、東美は間違いないと傷つく。

そしてこれまで以上に、ライラに対して適度な警戒をとるようになるだろう。

それは世界の危機云々の問題ではなく、千穂は東美の友達として、絶対に避けない人間であった。

だがそれをすぐに言い出せなかったのは、千穂の中にも真実と同じ秘密があったのだ。同時に、ライラの存在の不確かさ。

ここで迷宮に陥れば、真実がライラに近づくチャンスを失うかもしれないと思ったのだ。だが千穂が確認したすぐ後に、他ならぬ真実がライラに言っていた。

「確信だぞ。東美より先にお前ん達行くとか」

真実は、ちゃんと東美の気持ちを考えていた。

「後で俺が何が言われるって言うより、お前がまた東美の不測を賣うことになんぞ」

本人にそんなつもりはないかもしれないが、真実の言葉はライラに厳しいことを言うようで、間違いないライラと東美のためになることを促している。

「何か、いいなあ」

エンターイスラから帰ってきて以来、真実はずっと、東美のために力を尽くしている。



恵美の気持ちや、恵美の仕事や、恵美の人間関係を良いものにするために。

真美に言えば絶対に「そんなことはない。そう見えたとしても結果的には自分のためだ」と否定するだろう。

だが千穂に言わせれば、いや、千穂に言わせなくても、真美が人間として自然な振る舞いをすればするほど、そういうことになるのだ。

情けは人の為ならず、は逆に言えば、自分のために良いことは、人のためにもなり得るということに愧ぢない。

「源次さんとライラさん、特直りできればいいな」

千穂は自分の純粋な願いとして、そう思う。

そしてそのときは、意外遠い未来ではないのではないかと思っている。

残念ながら恵美側からは歩み寄るには至っていないが、真美が間に入ることで恵美とライラの距離はゆっくりと近づいている。

それは、例えばライラが魔王城の夕食に押し寄せてきたときや、マダロナルドの仕事のさりげない恵美の言葉や行動などにも表れていた。

真美に「そのつもり」が無いように、恵美も「そんなこと」は無いと言うだろう。

真美が恵美の意思を思い、力を尽くしていることを。

だが、千穂は知っている。

最近の恵美は、前よりもずっと沢山、真面目に笑顔を見せるようになった。

「……やだなあ」

こんなことを思う自分が、嫌だ。

だが、自分の中に生まれた嫌いを否定しようと思えば思うほど、先ほど藤原に言われた言葉が、荒々しく自分の心をかき乱す。

「彼々本千穂のセリフは『もう少しそれっぽい人だ』と思ってたけど、なんか思ってたのと違った」って意味でもあるから」

思ってたのと違った。そんな嫌味な態度をとっていたということを確認したくない。

でも、受け取り方次第でそう見えることを一切していい、という自信もない。

なんか思ってたのと違った。

千穂はずっと前から、真実と恵美に、仲良くなってはしなかった。

憎み合わず、殺し合わず、どうにか気持ちの着地点を見つけて、エンテ・イスラの辛く苦しい過去と訣別してくれればと、心から思っていた。

今、目の前でその思いが成就しつつある。

それなのに。

「どうして……」

どうしてこんなに胸が騒ぐのだろうか。

自分が望んでいたのに、今だって心から望んでいるのに、喜んでいるのに、その喜びの裏に、どうしようもなく悲しく骨い感情が隠れている。

そしてその思いは、惠美が真真に向かつて笑う度に、真真が惠美のことを気遣う度に、千穂の全ての喜びを碾歌<sup>せんか</sup>らして、千穂を支配しようとするのだ。

「やだ」

なんか思ってたのと違った。

「いやだよ」

思ってたのと違った。

「なんで私……」

違った。

「こんな……っ」

「千穂殿！」

「ちーねーちやー」

「……っけ」

千穂は、もうすぐ築塚<sup>きづか</sup>駅という所で正国から願<sup>ねが</sup>ふんだ声をかけられ、弾<sup>はじ</sup>かれたように顔を上げた。

夜の昏く暗く心を鎮めるために、無意識のうちに顔を伏せ、袖を食いしばって歩いていたよ

うだも

相手の姿を認めて自然に微笑もうとして、顔の筋肉が弛緩していることに気づいた。

「鈴乃さんとアラス・ラムスちゃん……」

駆け寄ってくる声は間違ひなくアパートの二〇二号室に住む藤月鈴乃だが、

「あれ？」

竹まいがいつもと違う。

千穂は見間違ひかと思ひ、数瞬前まで抱いていた昔い気持ちを一瞬忘れ、思わず目をこす

つてしまった。

だが鈴乃は、最初に千穂が抱握した姿のまま、アラス・ラムスの手を引きながら千穂の前に

押つくりと駆け寄ってきた。

「ちーねーちや、ここにちやー」

「もしかしてアパートからの帰りか？ タイナがいたのだろうか？」

「え、ええ、そうです、けど……あれ、あれ？」

寒さの中で、撫でて頬を上気させている鈴乃とアラス・ラムス。

「珍しくかなり着込んでいるな。だがアパートに来たのなら、さすがの防寒対策だ」

「ちーねーちや、ちらうすぐまみたい」

着ぶくれた千穂をリラックス服とのたまりアラス・ラムスに愛想笑いをすることすらできず、

千穂は目を丸くして鈴乃を見た。

「え、えええ、ええ、あの、鈴乃さん」

「スーパ―のタイムセールルの時間に合わせて出かけたのだが、千穂殿、商店街にいつもバザーのように色々な商品が入れ替わる店があるのを知っているか？」

「え、ええ」

「そこに可愛らしい物（モノ）が売っていったんだ。見てくれ、十字に見える雪の結晶（けっしょう）があしらわれたこれ（コレ）がどうしても気に入ってしまった。その流れでつい本来の目的を後回しにして商店街を彷徨（さまよ）っていたらこんな時間になってしまった」

「みてみて！　すすねーちゃんにもらった！」

アラス・ラムスは千穂も初めて見る毛糸の帽子を被っており、それをまるで頭髪（かみ）でもするかのように千穂目（せんぷくめ）がけて脳天（のうてん）を見せつけてくる。

「そ、そうなんだ。良かったね、似合ってるよ、似合ってる、うん、でも、アラス・ラムスちゃん、ごめんちょっと待ってもらっていい？」

「う？」

買（か）い物のエコバッグを手に持（も）った鈴乃もアラス・ラムスもテンションが高く、アラス・ラムスと手を繋（つ）いでいる鈴乃の左の手首（しゅ）には、細いベルトの腕時計（うでどけい）が巻（ま）かれていた。

「あの、すいません鈴乃さん、重要なこと聞（き）いちやうかもですけど……」

「うん？」

「ど、どうしたんですか、その格好」

「ん？ あ、ああ、これか」

鈴乃は、初めて自分の身なりに気づいたかのように、少しだけ頬を赤らめた。

「自分で見繕ってみた。おかしくはないだろう？」

「え、ええ、似合ってます。ただ単純に驚いちやって、鈴乃さんが……」

千穂は鈴乃を上から下まで無遠慮に眺めてしまう。

「全身洋服着てるなんて」

長い髪を纏める簪かんざしを差しているのはいつも通りだが、タレーのボンチョコートの下に、白の中シャツとショート丈のネイビーニットワンピースを重ね、足元は謎の厚手のレギンスパンツにフリンジのショートブーツを履いている。

「急に寒くなっただろう？ ついこの前まで日中は気温が高いのをいいことにそろそろ衣替えなどと悠長なことを言ってたら、突然これだ。先日は雪まで降ったしな」

「そ、そうですね」

「正直、寒かったんだ。手持ちの制限だと」

「は……」

「薪きりぎりすの着物は冬も着られるというが、あれも薪の裏が挟はさんでいることには変わりないんだ。裾すそ

紳を穿くしても雨が降るし、結尾箱の問題は解決できない。何せあのアパートだろう？ 志保

殿には悪いが、暖房器具を賣いてもよと油断すると寒さが厳しくてな」

「それは分かります」

千穂もそれが想像できたからこそ、この重裝備だったのだから。

「それでいざ着る趾を決めたところ、洋服の方が安くて暖かったのだ」

カスリノキモノとやらがどんな着物なのかさっぱり分からないが、要するに鈴乃は、寒さと値段に負けて、和服を常用するという節を曲げたらしい。

「ただ、晋校者として洋装を纏うことを認めただけで、いざ例があった場合には釋奠服として、和装で越くつもりだ。このぼん……ぼん……なんだったかこのコートは」

「ボンチコート、ですか？」

「もうそれだ。ぼんちよ。灰色のぼんちよなら、着物の上に羽織っても問題ないというしな。

私もそれなりに日本に馴染んだのだから、和装と洋装を着分けることも覚えた方が良くかと思つてな」

「うん、鈴乃さん、すごく可愛いです」

鈴乃の洋服姿を見るのは自身と恵美の合同誕生会のおき以来だが、こうして鈴乃が今の日本の街並みに完全に溶け込む様子を立っていると、年相応（といつても千穂は鈴乃の真年輪を知らないのだが）の一人の女性にしか見えな

「最近ずっとなんですか？」

最近とはいうが、千鶴が前に鈴乃と顔を合わせてからまだ三日くらいしか経っていない。

そのときには普段見慣れた和装姿だったはずだ。

「どうにも寒さに耐えかねて、臆念して洋服を買いに行つたのは一昨日だ。まだ数は少ないから、数を増やすか従来の和装を堅持するかは検討中だ。おかげでアラス・ラムスを今日は随分ウインドウショッピングで連れまわしてしまった。疲れただろう？」

「じよぶ！」

アラス・ラムスのスタミナや筋力は未だ謎に包まれた部分が多いが、少なくとも今は、大人の買い物ペースに付き合つたからといって疲れたり寝たりした様子はないようだ。

それに、先ほどは余裕を失って気がつかなかつたが、鈴乃に買ってもらつたという毛糸の帽子が、よく見るとかまわぬ柄なのがなんとも面白い。

「鈴乃さん的には一大決心だったんですね」

言葉の端々に和装へのこだわりを捨てたわけではない、という矜持めいたものが覗くのがなんだかおかしいが、実際鈴乃に洋服が似合うのは本当のことだから、これを機会に洋服のお洒落をすればいいのにとも思ふ。

「そうだと、それを魔王め、廊下で顔を合わせるなり化物にでも遭つたような顔をしておつて」

「真由さんが？」



「ああ、第一声が『冬なのに熱でもあるのか』だぞ。失礼だとは思わんか」

突っ込み辛い。夏の暑さでおかしくなった、という言い回しはよく聞くが、冬は普通に暖かさをひいて熱を出すことだってあるだろう。

そんなことを千穂が思っている、鈴乃は何げなく、こんなことを言った。

「まあ、奴も最後には似合っていることを認めたから、そこで手打ちにしてやったが」

「真奥さんが？」

「ああ、決ってはいたがな」

と、鈴乃は苦笑する。

その笑みを見て、なぜか千穂は先ほど顔を伏せることでさわめきを押えていた心に、またきつきの黒い波が立つのを感じた。

「真奥さんが……」

「うん？」

「あ、いえ……」

だがその波を誰かに知られることが、なんだかとても真くないことのような気がして、暗くて細かい表情が分かり辛い夜であるのをいいことに、首を横に振ってごまかす。

鈴乃も特に気にしなかったようで、ふと、千穂の後ろの方を見て虚脱を寄せた。

「それにしても、いくら今現在憂慮すべきことが無いとはいえ、夜道を千穂殿一人で帰らせる

「な、魔土も気が利かんな」

「え？ あ、それは別に……」

あれ？

「日常生活の危険は、何も天使だ悪魔だという途中ばかりとは限らんといいのに。ああ、でも千穂殿にとっては天使だ悪魔だという途中にばかり危険な目に遭わされている方がおかしいかなんたろう。」

「千穂殿、真っ直ぐ帰宅するなら、私が送ろう」

「……いい、いえ、そんな、別に」

「別に時間はあるし、いつもまうしていることじゃないか」

「なんだか、今日は、」

「大丈夫……ですっ」

「……千穂殿？」

「ちーぬーちゃ？」

「さ、ダメだ、」

「わ、私……」

「こんなの、嫌なの」。

「ど、どうした？ 何かあったのか？」

鈴乃は唐突な事態に慌てふためき、千穂の頭を下から覗き込む。

「私、大丈夫なのに……っ」

涙が流れていた。

なんて惨劇で、なんてつまらない理由で流れる涙だろうと、千穂は思った。

それなのに、止まらない。

「その、どうした、魔王が何か、いや、魔王に襲って千穂殿に妙なことをするはずもないし、怪我してる様子もないし、あれか？ ルシフェルか？ 何かまた新鮮なことを……」

「ちーねーちゃ、いたいの？ いたいの？ とんでく？ いたいの？ とんでけー」

突然はらはらと涙を流しはじめ、立ち尽くしてしまった千穂に、鈴乃は心戚んで口が空回りし、アラス・ラムスは何かを吹き飛ばそうと千穂の腰を小さな手でしてしと叩く。

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい……」

「と、とりあえずあれだ、落ち着くんが千穂殿、そ、そうだ、種が駅に喫茶店が、その、何があったか知らないが、とりあえずここは来い。な？ 場所を移して何か温かい物を……」

鈴乃は柄にもなくあたふたしながらも千穂を腕し、笠塚駅へと向かう。

笠塚駅ガード下のエキセントリック・シオールに千穂と鈴乃が入っていったのを入れ替わりに、

「いかんいかん、こんな時間になってしまった。もう僕々木さんは、帰ってしまったかな」



「悠太郎の改札付近から、慌てた様子で飛び出してきた男がいた。」

「思わぬ長電話をしてしまったな。さすがに少し冷えた」

エコパツダに、あちこちで買った食材をたっぶり入れた長身の男、声調四郎は冷え切った手をさすりながら悠太郎を渡にしたのだった。

# ※

「おはようさあみー!」

「あ、明子さん、おはようございます」

仕事に入れば十八時でもおはようございます。

十二時から二十一時までのシフトの惣菜は、休憩上がり同僚の十八時に出勤してきた先輩タルーの大木明子と顔を合わせた。

明子は川田と同じ年だが、マダロナヤド帽々各駅商店にタルーとして採用されたのは半年ほど遅く、学年も一つ下。

本人曰く、「遅延が続いてみんなを迷惑させていたせいで浪人した」らしい。

十一月の後半は大学生生活が忙しいとのことであまり顔を見なかったのも、東菜が明子と顔を合わせるのは一週間ぶりくらいになる。

「さよみーさあ」

「はい？」

恵美は読んでいた本をロッカーに仕舞おうとしていたところで、制服に着替えようとする明子に声をかけられた。

「元は甥のことで働いてたんだよね？　Oしっぱいことしてたんだっけ」

「はい。ドコダモのコールセンターで」

「コールセンは　どれくらい？」

「一年半くらいだと思います。ちよつと実家の都合で長期休まなくちゃいけなくなったら契約解除されちゃって」

異世界に因われ悪魔相手に大戦争を繰り広げたあの出来事も、総括してしまえば恵美にとっては間違ひなく実家の都合に他ならない。

明子は「契約解除」のところで肩を震めた。

「うわー長期離脱でタピとかキビシ。でも一年半って長いよね？　私一ヶ月で音上げたのに」

「やってたことあるんですか？」

「かける方ね」

「私は基本、受信でした」

コールセンターと一口に言っても大別して二種類あり、恵美の元職場はお客様の問い合わせ

せを待つ『受信専門』の態勢だった。

明子が多様な業種のコールセンターにいたかは分からないが「かける方」ということは、客に商品をお勧めたり注文を取ったりするところだったのだろう。

そして会社によっては当然、発信、受信の両方を扱う所もある。

「こんどコウタが談話でいなくなるじゃん？ そのせいか最近私そのときのことやたら思い出してちゃってさ」

「はあ」

「コールセンの仕事は敷しいって聞いてたけど、私が最初バイトしたとき、結構大手の教材会社だったんだ。お客さんは子供のいるお母さんとかだったりするわけじゃん？ そういう人相手ならまあ優しいことはないかなって思ってたの」

「……最初は、そう思いますよね」

恵美はなんとなく話の先が読めて苦笑した。

「最初めの頃、問い合わせしてきたお母さんに、私のせいで日本がダメになったんだって言われたことがあります」

「あの論理の飛躍、凄（すご）いよね」

明子は自分の話のオチを言わぬまま、さもありなんと思（おも）った。

「『普通の人』はとく、なんて言うのか、人（ひと）情や感情の歪（よ）れ幅が狭（せま）いって思いました。最

初から不機嫌<sup>ふきげん</sup>だったり怒<sup>いか</sup>ったりしてゐる人の方が、怒鳴<sup>いかめ</sup>ったりとかはあるんですけどもたなんとななるんですよね」

ちなみにドコデモ時代、恵美一人の寂<sup>さび</sup>れに日本を背負<sup>う</sup>わせたお年寄りは、最近の電子機器は老人を置き去りにするにも程がある、あんたのような若い人が機械にばかりかまけてゐるから日本の産業も重工業や電子産業ばかりに金をかけるようになった、しかも若者は皆携帯電話の画面<sup>がめん</sup>だけ覗<sup>のぞ</sup>いて世界を知ったような気になり喧<sup>けん</sup>かしい、一方で地方は疲弊<sup>ひへい</sup>し農業は壊滅寸前である、こんな日本をダメにするような会社にいるあんたはけしからん、少しは外の世界に目を向けろ、あんたがそんなんだから日本がダメになったんだ、という流れの話を三時間かけて行<sup>い</sup>ったり来たりしながら怒鳴<sup>いかめ</sup>り声とお説教を交<sup>か</sup>ててのたまつたものだ。

理不<sup>りふ</sup>尽な罵声<sup>ののしり</sup>や蔑<sup>あやう</sup>視<sup>し</sup>に動揺<sup>どうごう</sup>するような恵美ではなかったが、單純に仕事に慣<sup>な</sup>れていなかったことと最後まで聞いても結局このお客様がどういった目的で問い合わせてきたのかわからないままだったため、この問い合わせは深く印象に残<sup>のこ</sup>つた。

このとき恵美は次の選挙で必ず投票に行くことを約束せられた後に電話を切<sup>き</sup>られた。

フロアリーダーと親友の鈴木梨香<sup>鈴木りか</sup>を含めた同期入社<sup>しゅうきりゅうにゅうしや</sup>の何人かが恵美に夕食をおこつてくれたくらいに問い合わせ案件<sup>けいけん</sup>としては極<sup>きよく</sup>まったレベルであり、しばらくフロアの「社<sup>しや</sup>總<sup>そう</sup>な問い合わせ」の基準<sup>きくせん</sup>になっていたほどだ。

「ねー、だからさ、私<sup>わたし</sup>あるとき、将来就職<sup>しゅうしゅう</sup>できるのになつて落ち込<sup>おちこ</sup>んでさ、こういうと



ここでお客さんと顔合わせで一対一で話す分には問題無くなったんだけど、いざ机に座って電話とかで遠くトラウマ刺激されそうで。でもそういうのやってたから、木崎さんもさえみーを電話オーダー担当に据えたんだろうなあ」

「でも、夜を明い合わせて、やっぱりすごく変だから印象に残るだけで、そうじゃないの方が丸型丸分ですよ、明子さんだって意識の明い合わせとか受けてますし、心配することありませんよ」

「そーなだけとねー。教材助めた結果人殺し扱いされた過去はなかなか忘れ難いのよ」

一休柄がどうなってるんなことになったのか大感興味深いのが、唐美は時計が回もなく休憩上りの時間に針を合わせるのを見て、慌ててクルーキマツとインカムをセットした。

「ところで、なんでこんな話になったんでしたっけ？」

「え？ ああ、そういえば」

自身も準備を終えた明子が、はたと手を打った。

「多分ですけどさ、さえみーの友達、お店に来てるよ」

「え？ 私の友達？」

「うん、友の人。何回か顔見てる気がするんだけど、ともかく〇しっぱい感じの人だったからさえみーの前の職場の友達かなって」

そんな人物は、一人しか思い当たらなかった。

「や……恵美」

「やっぱり梨香！ 突然どうしたの？」

恵美は、一階席の隅でなぜか肩身が狭まうらしサイズのホットコーヒーを啜っている鈴木梨香を発見し、笑顔で駆け寄った。

「今日はもう仕事上がりなの？」

「う、うん。今日早めの上がりでもよつとその、夕方暇だったもんだから恵美の顔でも見に寄ろうかなって」

「そうだったんだ。でもごめん、私はまだしばらく上がれないんだ。今日十時まで……」

「知ってる。聞いた」

「え？ あ、そうだったの？」

誰から聞いたのだろうか。

千穂と同じく、今の梨香は恵美の真実の姿やエンターイスタにまつわる出来事を理解している。梨香は以前よりも千穂や鈴乃達と頼りに連絡をとっているようだから、その辺りから聞いたのだろうか。

だが、誰から聞いたにしろ、知っているのならどうして恵美の上がりまであと四時間もある

こんなタイミンダで来てしまったのだらう。

惠美が心の中で言を續けていると、その当惑を読み取ったか梨香は慌てたように言った。

「こ、こめんね、遅い時間の上がりだつてことは分かつてたんだけど、でも、その、いてもたつてもいられなかったというか、惠美の顔見て安心したかつたっていうか」

「……どうしたの、何かあつたの？」

さすがにここまで来れば惠美も、梨香の様子が不自然なことは分かつた。

やたら早口だし、妙に目が泳いでいるし、落ち着かなさげに体が揺れている。

その様子を見た惠美は、梨香がこんな風にいつもの調子を失うケースが少し前であつたような気がしてきた。

「で、さ、惠美、明日は朝早くないんだよね？」

「う、うん」

「私、持ってるっていうか、目障りだったらどつか轡所で時割消してくるからさ」

「目障りつてことは無いけど」

「だから今日仕事の後……ちよつとだけ付き合つてくんない？ 晩ご飯、おごるから」

「付き合うのは別に構わないけど、どうしたの？ 本当に」

「いやあ……その、後で話すよ」

ここまで煮え切らない態度の梨香も珍しい。

「気になっちゃりわよ。仕事に集中できないし、何か相談事とかだったら、上がるまでになんとかなく顔の片隅に置いておきたいから」

「ん……そう？　その、そんな大したことじゃないんだよ、本当」

ここまで不自然な態度を見せられて、大したことじゃないも何も何もあったものではない。

「あのね、そのね」

「うん」

梨香は顔を洗った上に、二度も三度も大きく深呼吸をした末、ようやく吐いた。

「さっきなんだけど……直樹さんからお誘いの電話があつてね……」

「……ああ………ああ、うん」

恵美は頭のとこかで、覚えがある気がしたのはこれが、と納得する自分の声を聞いた。結局この後、恵美はあまり仕事に集中できなかった。

「お前、何でこんなことをするんだ？」



「もしもしベヤ？ 夜遅くにこめんね。突然で申し訳ないんだけど、今日、泊まらせてもらえないかしら。ええ、件事は今終わったんだけど、急に予定が入って……惣書が本店に来たの。何か大事な話があるらしくてできるだけ遅くならないつもりだけど、終電間に合うかどうか微妙なの」  
「構わんぞ。惣書殿によりしく伝えてくれ。ふんっ！」

「え？ あ、その、ありがとう。戻るときにメールとかして、大丈夫？」

「ああ、私も今日は少し夜更かしになりそうだから、急がずにゆっくりで……このっ！ 爆れる時間になったら連絡してくれば……うるさいっ！ 大丈夫だ！」

「そ、そう、ありがとう……」

電話の向こうが、やたらと静々しい。

鈴乃の声にも、時野妙な感音とも嵐声ともつかぬ何かが混じっている。

東美の帰りが遅いことを察しているわけではなさそうだが、鈴乃の声のBGMに右回でも叩いているような鈍い衝撃音が混じっているのも妙な感じがした。

「そうだ、クイラがニミシアに話したいことがあるらしくて、アパートで待っているぞ」

「ええ？」

東美は腰を撃つ音が、鈴乃に文句を言っても仕方が無い。

「いつも言っている例の頼み事とは全く質の違う話らしいが……」

「どんな話か聞いてないの？」

「一応私も聞いてはいるが……ああうるさい！ 電話中だ少し黙れり」

「ベル音」

様子から言って、どうやら電話の向こうには鈴乃以外にも誰かいるようだ。

そして鈴乃がこんな口の利き方をするのは、魔王城の男三人以外にはありえない。

「もしかして、今取り込み中？」

「そんなところだが、構わん。場の主導権は私にある。アラス・ラムスも私の味方だしな」

一体何が行われているのだろうか。まるで想像できない。

「とにかく、私も話聞いてるが、あれはきちんとタイラの口からエミリアに話すべきことだと思ったから、伝言はしない。何時までも待つと言っていたから、帰ってきたら私の所よりも先にタイラを防ぐてくれ。多分、ノルド殿の部屋で待っているはずだ」

「……分かったわ」

「ではな……さあ、言い訳があるなら何か……」

最後に銅音（銅音）な声だけを残して、鈴乃との通話は切れた。

「な、何があったのかしら……」

状況だけ考えれば、真美（まみ）が鈴乃に悪相をして鈴乃が怒っているというのが一番ありようなところだが、アラス・ラムスが鈴乃の味方、とはどういうことだろう。

鈴乃に睨（にら）まれることより、アラス・ラムスに嫌われる方が真美にとってはダメージが大きい

気がするが、

「まあ、いいか。それより」

恵美はスリムフォンを操作して、水堀町のマンションにいるエメラダにも、鈴乃の部屋に泊まる新メーブルした。

エメラダからの了解の返信を確認すると、恵美は鋭く気を吐く。

「さて、むしろ気合を入れなきゃいけないのは、ここからよここから！」

結局、恵美は、恵美が仕事を終えるまで店待っていた。

型番が、声屋に関する相談を持ちかけてくるのはこれが初めてではない。

だが、これまでと今回では大きく違うことがある。

型番はもう声屋の正体を知っている、ということだ。

声屋西郎の要魔屋、要魔大元帥アルンエルの姿こそ見たことは無いものの、彼がかつてどんな行いをしてきたか、何を目的に日々を生きているか知っているのだ。

それでいて、

「お隣の電話があつてね……」

ということは、

「……………どうすればいいのかしら。はあ」

時計を見上げると、既に二十二時を十五分も過ぎている。



あまり梨香を待たせても悪いし、ここで悩んでいても帰宅時間が遅くなって鈴乃に迷惑がかかる。

「流れを見ろしかないか」

恵美は覚悟を決めると、決然とスタツフルームを出て、明子を始めとした同僚タクルー達に挨拶をしてから、梨香と連れ立って店を出た。

「ごめんね、なんか突然」

梨香はいつもより体を一回り小さく縮めて、恵美の後に続く。

「いいわよそんな。私こそ待たせてごめんね。ご飯って言いたいところだけど、梨香、結構食べてたわよね」

「あ、うん。でも恵美が食べたいものとかでいいから」

「そう言ってもね、この時間だと飲み屋さんとかになっちゃうんじゃないかしら」

「飲み屋……って、いいの？」

「どうして？ 前もよく行ってたじゃない」

「だって、恵美って実はまだハタチ前なんですよ」

「ああ、そういうこと」

恵美の実年齢は日本の法律上は未成年であることを、梨香は気にしていないらしい。

「向こうではそこまで厳密な決まりは無いし、日本の戸籍ではもう二十一とかになつてはす

だからそういう意味では大丈夫だけど、お酒入っちゃダメな感じ？」

「う、うん、ダメ、じゃないんだけどその、冷感でいられる自覚が無いというか……」

今だって全く冷感ではないのだが、今の聖香にアルコールを入れたら顔が腫まらなくなるような気がして、恵美は聞いた。

「少し歩いた先にファミレスがあるから、そこでいい？」

「うん、なんかごめんね」

今日の聖香は、謝ってばかりだ。

「大丈夫よ。でも……まあ、もしかしたらこれから聖香にとっては厳しいこと言っちゃうかも知れない、おこりはいいよ。普通にご飯食べよ」

「……うん」

目指す方向が決まり、恵美と聖香は若干重い足取りで目的のファミレスへと向かう。

夜も二十二時半を過ぎるとさすがにファミリレストランは空席が目立つ。

禁煙席に陣取ると、恵美は仕事上がりなこともあって、しっかりと飯という感じでアサリの本ンゴレにスープとサラダとドリンクタバーのセットを、聖香はドリンクタバー単品の注文を済ませる。

「なんか久しぶりだね、こうやって二人でお店に来るの」

「前みたいに帰り一箱についてわけにいかなくなっちゃったからね。聖香の方から毎回こつちに来てもらって、嬉しいけどちょっと申し訳ないわ」

「いいのよ。どんな事情があつても、タビになつた職場の近くつてのは微妙でしょ」

「そうでもないわ。私、あの会社の期りで榮壽に色々なお店に連れてつてもらつて、おかげで日本の食事に一気に馴染めたのよ。次は私が行くから、タイミランダが合つたらまた真季ちゃんとか誘つて行きましょ」

「あの道も入れ替わり早いからねー。前にみんなで通い詰めたロシア料理屋さん覚えてる？」

あそこは片断店しちやっただよ」

「ええ？ あそここのビーフストロガノフ凄く美味しかったのに！」

「その後に唇抜きで入つたのがパスタ屋なんだけどさ、これが残念なことに美味しくないの。ただでさえパスタの店なんか有り余つてゐるのにあれじやあつて感じでさ。内装に元のお店の名残があるから余計に寂しかったわ」

「かと言つてあのお店のロシア風のお洒落な内装でラーメン屋さんとか牛丼屋さんになられても困るけどね」

「美味しければなんでも良かったんだけどね。もちろん片断店しないのが一番なんだけどさ」

とりとめのない話をしてゐると、やがて惠美の注文した、奇しくもパスタのセットがやってくる。

「見てたらなんだかお腹空いてきたな」

「何か頼んだら？」

「んー、とはいえない、ロクに運動もしてないのにこの時間に重いのも……うーん」

結局数々悩んだ末に梨香は何も注文せず、やがて惠美もあらかた食事を終えた。

すると梨香は、仕切り直すように改めてドリンクバーからハーブティを一杯取つてくると、居住まいを正して惠美に向き直った。

「それで、さ」

「うん」

惠美も、お冷で口の中をすっきりさせてから頷いた。

「なんか前にも同じようなことで惠美に電話した気がするんだけどね。まあ声屋さんからお誘いってのが、携帯電話をかうのにアドバイスをくれって話だったの」

「じゃあ、また梨香を電話屋案内に使おうっていうの、あいつは」

以前惠美がテレビを購入した際に、声屋は梨香に携帯電話の購入を検討していることを告げ、そのアドバイスを求めていた。

結局その日に声屋は携帯電話を購入せず、その後色々なトラブルが重なったこともあり、声屋は未だに携帯電話を購入するに至っていない。

「まあ、大枠はそれなんでしょうさ」

梨香も否定はしない。

「この前のこととか今まで色々黙ってたこととか、そういうののお詫びも兼ねてお食事に誘わ

れたんですね、これが」

「ふっ」

憲美は、無意識に手に持っていたお冷のグラスを握力で締こまそうになった。

「しょ、食事？」

男性が女性を誘う手段としてはごくありきたりな話ではあるが、青屋が喫香をよなると少々話が変わってくる。

「そ、それで？」

「断る理由ないし、OKしたよ。かなり食い気味で」

ところでその食い気味のやり取りが行われていたのが憲美には分からないが、とにかく喫香は青屋の誘いに乗る気質々であるということだけは理解できた。

「そ、そう」

憲美は当惑すると同時に、真真に二人の食事風景を想像し、頭を抱かかえたくなった。

何せ、あの青屋である。

人間相手に自分を飾り立てたり印象を張ったりすることに、青屋とは違う意味で一切意味を見出みださないあの青屋である。

これがもし真真なら、まだ妙な良策りやくさくを張って少しい店でもと考えるような気はする。実際に憲美は一度、真真のお洒落着とデートシーンというものを目撃している。

後々になってあのときの真奥のお酒落着は青屋がコーデイナートしたものだを知ったが、恵美の中で、真奥は改まった場ではちゃんとするというイメージは、アルバイト中の勤務態度も相まってかなり早い段階で定着していたと言つて良い。

廻つて青屋である。

彼は、身だしなみこそ清潔に保っているが、真奥と違って恵美には青屋が「あのときこんな服を着ていた」という記憶がまるで無い。

必死に思ひ出せば思ひ出すほど、夏場の軽装や肉体労働時の軽装くらいしか出てこず、布面は小さくなるばかりだ。

「そ、その、食事って、どこで？」

「さあ、でも恵美の心配してることも、なんとなく分かるよ」

動物が押えられない恵美に、梨香は苦笑した。

「私だって真奥さん家の事情はもう分かってるもん。まんまろうとんとかマダロナルドだって、私は別に構わんのよ」

「それは逆に構った方がいいと思うけど」

梨香がそれで納得するなら恵美がこれ以上何か言うことではないのだが。

「じゃあその、相談って、そのことじゃないの？」

「青屋さんが何を食べるのか、恵美に相談してもしようがないじゃん」

それはそうだ。

「康美もきつき、私に厳しいこと言っちゃうかもって言ってたじゃん、その、つまり、そういうことだよ」

「そういうことって……」

「まあどんな話になるかって言ったら、要するに私が真実さんや康美から聞いてもう知ってることの続き直しになるんだと思うんだ。話したいっていうのも最終に西屋さんが個人的に私にお詫<sup>わづら</sup>びしたいって流れなんだと思うのよ。ってか、本人がそう言ってたし」

「そうなんだ……」

康美はきつきからそうそうそうしか言っていない。

「ま、まあそれでさ」

ここにきてまた、梨香がそわそわしはじめた。

「この際だしね、その、私、ドカンとやっちゃおうかと思っんですよ」

「え？ 何を？ ドカン？」

「う、うん、その、ね、あの」

「うん」

梨香の顔が、どんどん紅潮してくる。身をよじり、口がうまく回らない様子だ。

それでも、梨香は意を決したように何度か荒い息を吐きながら言い切った。

「わ、私、わ、その、あ、高屋さんのこと、わ、その、ぶっちゃけ、好きに、なって、しまつてね、それで……」

「知ってる。それで？」

「……………」

「え？」

「……なん、で？」

「なんでって、ま？」

「え？」

顔を紅潮させた梨香と、真剣な表情の恵美は、東の両袖を交わしたまま沈黙した。

「知って……あ、って、ま？」

「梨香、もしかして、私が知ってたことに驚いてるの？」

「……うん、だ、だって今、私、本当、死ぬほど恥ずかしいの我慢して言っただけで……」

それはそうかもしれないけれども、梨香には申し訳ないが、恵美にとってはあまりに今更すぎる話である。

「悪いんだけど……多分、梨香とアルシエルの様子見てる人なら、気づかない人、いない」

「……そー、かな」

「多分ね」



「真壁さん、本人は……」

「そこは意外と、気づいてないかも知れど……でも、魔王やベルあたりは、もしかしたら気づいてるんじゃないかしら」

「梨香はしばし目を瞑く。そして、

「真壁さんと、鈴乃ちゃん……あがっ？」

「梨香？」

突然妙な悲鳴を上げると、テーブルの上のカップが跳ね上がる勢いで机に壁を打ちつけたではないか。

「そ………だったあああああああ!! なああんで私忘れてたあああ!! 私、私あの日、言われてたじゃんかあああああ!!」

「ちょ、ちょっと梨香静かに!! どうしたの突然!!」

「ああううあああああ言われてた気づかれてたそうだったあの日真壁さんにうぐぐぐ」

「魔王? 魔王が何を言ったの? あの日って、あいつらがテレビ買った日のこと?」

「そ………よ! その日!! 真壁さんに私、私、言われた、気づかれてた、私の、気持ち、うがあああああああ!!」

先ほど思いの丈を明かすことに躊躇していた乙女が、今は爪を研かれたマレブランタのようなダミ声で呻きのたりら回っている。

「戸屋に、惚れた？」ってー！ 真奥さん！ 真奥さん言つてやがった！ 駄言われてやがった！ ああああああ！ あの後なんか、真奥さんが鈴乃ちゃんにブン殴られてから首絞められてたあああああ！ なんだこれ！ なんだこれ！ 何私！ なんて戸屋さん絡みでこんな恥ずかしいことばつてんの？ バカなの私！ 恥ずかしい恥ずかしい死ぬほど恥ずかしい何この恥だらけの人生！！」

「……魔王……っ！」

どんな状況でその会話があつたのかは分からないが、亜美は近日中に真奥から厳しく事情聴取をすることを心に決める。

「大丈夫、大丈夫よ梨香、魔王はその、デラカシーは無いかもしれないけど、そういうことを他人に簡単に言うようなヤツでもないし、アルシエル……戸屋にそのことが、誰かの口から伝わってゐることは、多分無いわ」

「そー……かなあああ？ 何か伝わっちゃってる気がするんだけどなああああ」

顔を上げた梨香は、鼻の頭を真っ赤にして目には涙を溜めていた。

「だ、大丈夫よ。大丈夫、その日、ベルに首絞められてたんなら、最悪でも情報はそこで止まつてると思えば……」

「言つてる亜美自身がそれあんまり信じ切れてない感じがするんだけど気のせい？」

「……………こめん、絶対とは言ひ切れない」



「うわあああああああああああああ——」

梨香に囁（ささや）けつけない。恵美はあつさり正直な感想を口にしてしまった。

「で、でも、お誘いとやらは声屋（こゑや）が直接言ってきたんでしょ？ そのとき何も、違和感（わごかん）によるようなことは無かったんでしょ？ ならきつと大丈夫よ。いいように扱（た）えましようよ——」

「た、確かに電話ではその、普段通りの声屋さんだったけどさあ、不安だ、いきなり不安になつてきたよおお！ 声屋さんって、昔はこう軍師（ぐんし）っぽい感じの頭脳派（ずのうば）仕事してたんでしょ？ 他人には悟（さと）られないようにしてたとか、そういうことないかなあああああ——」

「大丈夫だってば！ 意外とあの男、感情的だから、隠せない方だから——」

声屋が感情的になるのは大塚が真実を暴露（ばくろふ）されたときや謙（けん）順（じゆん）が悦（よろこ）び込みをしたときや家計（かけい）が駄（だ）しいときや想定外の出費（しゆひ）をしたときなどに限定（げんてい）されるのだが、今はそう言うしかない。

「そ、それで梨香、結局相談（さうだん）つてなんだったの？ アルシエルのこと知りたいとかつていうんだったら、悪いんだけど、梨香がいつもの事情（じきやう）を嫌（きら）った今でも、前に話した以上のことは話（はな）してあげられないと断（ことわ）るんだけど——」

「ううー……」

梨香はまだ涙目のまま、専美（せんび）を見上げた。

そんな顔（かお）されたって、実際恵美にはこれ以上言えることは無い。

声屋（こゑや）四郎（しろう）だろうと、悪魔（あくま）大元帥（だいげんし）アルシエルだろうと、恵美が人に教えられる個人情報など限

られている。

過去の遺恨を抜きに考えても、買収用惣賃金使約がコストパフォーマンス最優先の服を着て歩いていて、食事の好き嫌いは一切無い。

真実のように寛格やら免許やらを取得している気配は無いが、図書館通いが高じて知識は豊富なようで、時々妙な人間的特徴を発揮して魔王城の家計を支えている。

だが専断はそういう場面を話に聞くだけであまり目撃してこなかった。

料理の腕は家庭レベルなら一級品で、真実が負けを認める数少ない彼の長所である。

単純に持っていない、触れる機会も無いということと電子機器には弱いらしいが、緊急だつて携帯電話購入についてアドバイスを求められているのだからそんなことくらいは知っているだろう。

「だから本当に私が言つてあげられることなんて前に話したのと大して変わらなくて、正直アートの役に立ちそうなことなんか何も……」

「アートって言うなあー！ 恥ずかしいじゃんかー！ 向こうはそう思つてないだろうし！」

「他にどう言まつて言うのよ」

「それは、それはそうだけじゃー！ ああもうなんで私こんな恥ずかしい思ひしてるんだー！ 忠告の方こそ聞きたい。」

髪はひとときリアアシートの上で立たした後は、顔を真っ赤にしたまま髪を整理した。

「その、相談っていうのはさ……あーもう恥ずかしくて暑いし心臓痛い……由美にはちゃんと聞いておきたいのよー……私さ」

梨香が必死の思いを吐露しようとした瞬間、恵美の脳裏にある光景がよぎった。

かつて一度、この表情を、この気持ちを見たことがある。

「私が首屈さんを、す、す、好きでいていいかどうかっ!!」

「……」

やはり、という思いと共に、恵美は顔を思い放った。

「私に聞かれても困るんだけど」

「ちよっ!!」

恵美の返事に、梨香は首をかくんと顔に出した。

「だ、だってあんた、恵美以外に聞ける人いないでしょ」

「どうして」

「どうしてってそりゃあ……だって首屈さんは……」

言い募ろうとする梨香の顔を見て、恵美は思わず微笑んでいた。

「首屈は私の故郷を滅ぼした悪魔の仲間だから？ それって、何か梨香に関係ある？」

「おっ……」

梨香は思わず顔を赤らせた。

少しだけ高低差のある視線がテーブルの上で交わる。

「……無い？」

「と、思いうわよ」

恵美は梨香を見上げながら言った。

「そとうろ」

「うん」

「……なんで？」

梨香は息を呑む。

「大分前にもう通った道なんだけどもね」

「もう通った道？」

「うん」

恵美は落ち着いた様子で、先ほど轉しかけたグラスのお冷を一口飲んだ。

「最近では慣れ合いとかそういうレベルじゃなくなってきたところもあるけど、私とアルシェが敵同士って関係だけは今でも変わらない」

「うん、だからさ……」

「それでも私は、梨香がアルシェを好きって気持ちも、察うことはできないわ」

正面から自分の気持ちを覆唱されて、梨香の顔の温度がまた少し上がる。

「梨香も私やアルシエルの過去を知って商あいつを好きだって気持ちが変わらないから、私のことが気になつちやつたんでしよう？」

「へ、まあその、聖美もそうだし、鈴乃ちゃんやエメラダちゃんだってそうなんでしょ、エンテ・イスラの人だしさ」

梨香は、聖美が「も」と言つたことには気がつかなかつた。

「そうね、でも、それでも関係ない。もちろん」

聖美の態度で、梨香の顔に、もう一人の大切な友達の顔が重なる。

「積極的に応接はできないし、もしアルシエルが危険な行動をとるようなら、私は梨香の気持ちより周囲の安全を優先する。でも元はいえは、彼が日本に来たのは私達の責任で、梨香は何も知らずにたまたまあいつと会つてあいつを好きになつた。それをどう言う資格が、私にあると思う？」

そういえば、あのときも食事を終えた後だった。

彼女もまた、今の梨香のように目を丸くしていたように思う。

「だから、梨香の気持ちは、これからもずっと梨香自身で決めて」

「……………そう」

梨香はようやくよく理解していた腰を落として、呆けたように聖美の顔を見た。

「私はてつきりこう、エンテ・イスラの人の気持ちも考えろとか、戦争のことなんか何も知らない



いくせにとか言われちゃうかと思つたのに」

「そんなこと言わないけど、実はそれよりもっと酷いことは言つてゐるわよ。だって」

「分かつてるよ。場合によつちや私の好きな人を容赦なく殺す、って言つてゐるんだもんね」

「そういうこと」

惠美は苦笑して頷いた。

「そこだけは私が讀めない一編。今はあんまり意味が無いけど」

「へ？」

「だって、あいつらが日本で誰かを危険に陥すようなことをするなんて、もう私も思つてないもの。だからあいつらが日本にいるうちは、私は絶対にあいつらを殺さない。ちよつと調ならお父さんの仇だつたから、まだ憎しみを胸に縋を引く意味はあつただけだね」

「そ……か」

榮香は小さくため息をついた。

「じゃあ……今、惠美は真美さんや西原さん、藤原さん連のこと、どう思つてゐるの」

「……敵よ」

わずかな遠慮

榮香はそれを見逃さなかつたし、惠美自身はつきりと自覚している。

「お父さんは、結果的には生きていたわ。でも、あいつらのしたことが私達の人生を大きく変

めて、あるべき姿……あると思つていた夢から醒れてしまった事實は堪へるがない。それにいつらのしたことでも命を落とした大勢の人の無念や、失われた命を憐む大勢の人の悲しみは、間違ひなく私の心の中にあいつらに受けさせるべき報いとして残つてゐる」

だが、もはやそれが、恵美の中の憎悪の熾火を熾え上がらせる燃料としては方不足であることを、恵美自身が自覚してしまつてゐる。

「何度も考えたわ。板定の話をなんかしても仕方ないけど、魔王達が何かしなくなつて、エンテ・イスラは常に人間同士の争いが絶えなかつた。絶えなかつたってそうでしょ？　日本は比較的平和だけど、世界中では常に大小の戦争が起こつて毎日人が死んでゐる。私の場合、たまたま攻め込んできたのが魔王で、私には対抗する力があつた。深山殺されそうになつたし、深山殺したわ。その果てに私はこの国に来た。この国で、同じ年の女の子が明日命が失われるかもしれない恐怖なんか知らないまま宰相に暮らしているのを見て羨ましいって思つた。でも彼女達をどれだけ羨んだつて、私の過去が彼女達のように修正されるわけじゃない。何より」

恵美は、テーブルの上に置かれた製香の手を握つた。

「私は製香と友達になれたこの国での時間を、盡した人生の願望だなんて思いたくないの。もしもう一度自分の人生をやり直すことになつたとしたら、私は製香に会えない人生を選びたくない」

「恵美……」

握られた手を見ながら、製香はまた頬を赤らめた。

「え、えらく賣ってくれているけど、わ、私そんな大した人間じゃ……」

「榮香が私にとってどんな人か、決めるのは私よ。榮香は私の人生に欠かすことのできない大切な友達」

しばらくもどろの顔書に、恵美は面と向かつて言い切る。

「っー、ちよつちまつきとは全然違う理由で私ずかしくなってきたぞや。あんま私ばかり持ち上げてたら、後でエメラちゃんにヤキモチ妬かれるよ？」

「そうね。でもエメだって、本来なら私なんか直接話をすることもできないような、高い身分の人よ。そんな彼女と女の子として一対一で笑い合えるのも私の人生の結果の一つ。ああ見えて、凄く頼りがいのあるお姉ちゃんなの」

「悪いけど、エメラちゃんの方が恵美より年上つてのは今でも納得がいかない」

「私ってそんなに年より上に見える？　かなり前のことだけど、千穂ちゃんにも年のことで驚かれたことあるのよ」

「エメラちゃんが幼く見えるってのもあるし、言っちゃ悪いけど恵美が年より上に見られちゃうのはハードな人生の賜物じゃないかな。私自身今も恵美が年下なんて感じしないし、サシで付き合えば年相応のところも見えてくるけど、ハタから見れば恵美って、それこそあのマダドの店員さんくらいには大人に見えるもん」

「本崎さんくらいに見えるなら、女として純粋に嬉しいけどね」

惠美は微笑んで、梨香の手を放した。

「涙を戻すけど、とにかく梨香は私のことなんか気にする必要ないから、自分の気持ちの赴くままにぶつかってきて」

「そういうやそういう話だったっけ。でもあれだよ。今は惠美相手だけど、本人目の前にしたら何もできずに撤退してきちゃう可能性だってあるんだからね？」

「そのときはそのときよ。それも梨香の選択なもの。そんな話、聴くでもないでしょ。告白したかったけど結局できなかったって」

「はーずーかーしーからやめろーー!!」

梨香は両手で顔を押さえながらまたひとしきり離れた。

「でも裏し返すようだし私が言うのもなんだけどさ、よくあらりと割り切れるね。言っても惠美にこっちや自分で言うように敵のことなのに」

「言ったでしょ。一度通った道だったって」

「彼女」の反応は驚くほど毅然としていたが、そのときに思ったことが今、間違いない惠美の中で確固たる考えとして定着していた。

即ち、真島と西屋と藤原はエンテ・イストラ人類の敵だが、そのことと日本の、地球の人類は何も関係が無い。

関係が無いからこそ、彼らを愛する人がいても当然のことと思ひし、関係が無いからこそ、

いざというときには彼らを断罪するのに躊躇もしない。

「通った道ってる、もしかして千穂ちゃんのこと？」

「千穂ちゃんは今でこそ下手すれば双連よりよっぽど強いけど、根っこの部分は年相応の女の子よ。あのときの千穂ちゃんは相談できる人も守ってくれる人もいない中で、たった一人で魔王や私の正体を知っちゃったから、随分悩んだと思う」

「そりやシヨノタだよわ。あれでしょ？ 藤原さんが真更さんの敵で、高速道路に潰されそうになって助けるときに恵美が足折ったとかいう話」

製作者は恵美がエンテ・イストラに捕らえられている間に千穂本人から聞いた話を盗み出す。

「まあ、大体そんな感じ。冗談でなくCG映画みたいな環境にたった一人放り込まれて、しかも自分以外は誰一人そのことを覚えてないっていう状況は、本当に怖かったと思うわ」

「ん？ 何それ。誰も覚えてないって」

製作者が首を傾げると、恵美は自分のこめかみを指差して見せた。

「記憶操作って言えば分かってもらえよ？ 魔王も私もべらも、人の記憶をある程度操ることができるの」

「はあ？」

製作者は目を見開いた。

「何、それは例の魔法みたいなやつで？」

「魔王は魔王。私達は法術で秘密には全然違う技術なんだろうけど、やられてる方は一體でし  
 ようね。榮壽、聞いたことないでしょ？ 首都高層落なんて五年十年語り継がれてもおかしく  
 ない大事件よ。魔王が戦いの過程で外からは何も見えないように結果を張って、中にいる人全  
 員のごく短時間の記憶を消去。言うのは簡単だけど、魔王だからできたことね。私達や鈴乃は、  
 一人一人の記憶を消すのにもかなりの手間がかかるのに」

「な、何か私は恐ろしい話を聞いた気がするけど……」

「私は、聖書に生まれとかのことで嘘はついていただけと、記憶を操作するようなことは言っ  
 てないわ」

「ああ、うんまあ、そういえば初めてエンテ・イスラの話を聞いたとき、真実さんがさりと  
 『恐ろしい記憶を消すこともできる』とか言ってたね。色々衝撃的すぎてそのときはそんなこ  
 ともできるのかーくらいにしか思わなかったけど、冷静になって考えると怖い話だ。でも、そ  
 れってエンテ・イスラの犯罪捜査とかで運用されたりしないわけ？」

「うーん、どうなんだろう。解呪の方法があるって聞いたことあるから、法術の場合は記憶を  
 完全に消し去ることはできないんじゃないかな。私は基礎的なことしか勉強したことないから  
 知らないけど、ベルなら多分……」

「や、私がその詳しい話知ってもどうしようもないからいいんだけど、でもさ、それってな  
 んか変な話だね」

聖香はあることに気づき、言った。

恵美は、そのあることを理解した上で敢えて尋ねた。

「どこが、實だと思ってる？」

「そうや真央さんが、千穂ちゃんだけ証人をそのままにしておいたことよ」

「……そうよね」

恵美は深く頷いた。

「真央さん、千穂ちゃんのこともの確く大事にしてるじゃない？ でも言っちゃアレだけど、怪我とかしたわけじゃない私だって、あのカプリエルとかいう人のせいでどって熱出して寝込んで結構トラウマになってんのに、死にそうになったとか並みじや乗り換えられない筋さだと思っただけど……」

「しかも千穂ちゃん、あいつらの悪魔型を目の前で見てるのよ」

「悪魔型って要するに、真央さん達の本当の姿ってこと？ その……私はまだ見たことないけど、やっぱりいかにもモンスター！ って感じなの？」

「モンスターの定義によるだろうけど、普通の女子高生が日常でお付き合いしたい見た目かって聞かれたら、ちょっと難しいと言わざるを得ないわ。詳しく知りたい？」

「……後学のために」

聖香は一転、深刻な顔で頷く。やはり悪い人の正体は、気になるだろう。

「ルシフェル。つまり凄惨が一番キヤップは少ないでしょうね。今の見た目に大きな黒い翼がある程度だから」

「あ、そんなに驚わらない感じなの？」

梨香が「瞬気を緩めようとするが、恵美は首を横に振る。

「アルシエル、つまり青屋の悪魔型には、驚みたいな尻尾が二本あるわ」

「し、尻尾？」

正確には一本の尾が二股に分れているのだが、恵美は悪魔の尻の構造までは知らないため見たままのことを告げる。

「尻は例も過ぎない金属でできたエビの殻みたいな硬く固い構造で、顔から腕から体から全部その固い肌で覆われてるわ。地の声はものすごく耳障りよ。輪郭だけなら辛うじて人間と構成要素は似てるけど、身長も今より少し大きくなるし、左側に隠れてる足元とかは、どうなってるのか私もちっこり見たことがないから分からない」

「え、エビ……」

どうやら梨香の頭の中では、想像力がうまく働いていないようだ。

お飾料理の真ん中に鎮座しているイセエビに青屋の翼をつけたような面構だけが、想像上のストーリーンを行き来してしまっている。

「なんか、いまいち想像できない」



「まあ、人間に近いという意味ならまだ魔王の方が人間らしい形してるわ」

「あ、そ、そうなの？」

「うん、でも身長は三メートル近いし、腕も足も九太みたいにムキムキになるし、足は膝で頭には角生えてるし、出し入れ自在の翼も持ってるし」

それが人間に近いとはどういうことなのか、理解を放棄した梨香の目は点になってしまう。

「出し入れ自在の翼ってどういうことよ」

「分からない。魔力で形成されたものののが、最初からあるのか。でも翼がなくても飛べるらしいし、あれかなんのためにあるのか、ちょっと私には分からないわ」

「認識ってないよね？」

「何をどう感れって言うのよ」

実物を見たことがない梨香がそう言いたくなる気持ちは分からないではないが、事実の言うことは全て真実である。

「はー……何か全然想像できないわ」

「見せろって言ってもあいつらが素直に応じるとも思えないし、それに必要な処置をしないと梨香が死んじゃうかもしれないし、難しいからね」

「ん、何それ私が死んじゃうって」

「強い魔力に当てられると、普通の人間には命の危険があるのよ。あいつらは高等悪魔だから

ある程度外に漏れないようににはできるらしいけど、万が一のこと考えると怪重傷が残らないとは断言できない」

「……………」

今度は梨香の顔が明確に引き緊った。

「もちろん今は大丈夫よ？ あいつら魔力なくともご飯食べてれば生きていられるし、今の声星は歌えて魔力カラッポにしてもみたいだから、近づいたり触ったりしても危険は無いわ」

「毒蜘蛛とかじゃないんだから……」

「理論的にはかなり近いかも」

やはり正直に話せば話すほど友達の好きな人をこき下ろすことにしかならず、恵美は少しだけ声が上ずる。

「次の道ってレベルじゃねーな、こりゃ」

「そ、そうかもね」

恵美も同意する。

「でも私の前には一人、その道に立ってる子がいるんだよね」

「あの子はエンテ・イスラに生まれていたら、きっと一庫の人物になってるわ」

「今だって大したもんじゃん。私が知るまで、たった一人で皆の秘密を抱えてたわけでしょ。私はちよっと、できる気がしない」

「そう……そうね」

梨香も千穂と同じようにエンテ・イスラ側の夢中で危険な目に遭い、結果的に悪夢逆逆の真実と正体を知った。

だが千穂と梨香では、真実が明らかにになった後のケアに、明確に差があった。

梨香は戸屋を誘拐しに来た、カブリエルとエンテ・イスラ東大陸の騎士団に襲撃され、大塚天寿に助けられた。

その後本人が言うように熱を出して寝込んだ間は千穂が通いで看病をし、千穂の手引きで真典と鈴乃と藤原と天祥がそれぞれに梨香をケアした。

だが、千穂はどうだろう。

当時は鈴乃も天祥もおらず、真典と戸屋は千穂と深い関わりがなかった。

そんな中、ルシフェルとオルバに誘拐され、非常識に過ぎる戦いに巻き込まれ、信賴し想いを寄せていた先輩が異世界の魔王であるという事実を突きつけられた。

全ての顛末の記憶を共有できる人もおらず、事実を知る為の先輩への想いと戦いの記憶の狭間で苦しんだであろうことは想像に難くない。

その後、真典と隠し事なく友達となった目に映った切れた様子は見せたものの、結局真典と以前のように話ができるまで、かなりの時間を要したようだ。

「千穂ちゃんは何んでもないような顔をして、きつと沢山苦しんだ。ううん、もしかしたら、

「今も」

千鶴は真風の真実を知り、真実の姿を知り、何度か命の危機に瀕し、今再びさらなる真実に足を踏み入れ、その結果何が起ころうとも、決して自分の想いを曲げたりしないだろう。

「ちよっと突っ込んだこと聞いていい？」

「なあに？」

恵美が首を傾げると、聖香は真面目な顔で言った。

「恵美のお父さんは、天使と結婚したんだよね」

「……そうね」

今の恵美のためらいはタイラを「母」と自分の口で言うことに未だに抵抗があるからなのだが、聖香は構わずに続けた。

「ならこれまで、聖魔と一緒にあった人間って、いるの？」

確かに突っ込んだ質問だ。

だが、恵美の両親のことを知っている者なら、控いても全く不思議ではない疑問。

これに対する恵美の答えは、明確だった。

「私は知らない」

まさしく聖魔の証明だ。

人と天使が手を携えることができる。

ならば人と悪魔は？」

「……ここで言っても分かることじゃないか」

梨香は顔笑んで頷いた。

「ありがとね、恵美。遅くまで相談乗ってくれて」

ふと顔を上げると、店の壁の時計はもう深夜を時近くを指していた。

「ううん、私も久しぶりに梨香と二人でご飯できて、楽しかったわ。電車大丈夫？」

「ずめ調べといた。まだまだ大丈夫だけど、恵美、アラス・ラムスちゃんを鈴乃ちゃんに

似けてるんじゃない？ 遅くなりすぎると鈴乃ちゃんやアラス・ラムスちゃんにも迷惑がかかってしまうし」

「今日はちゃんと言っておいたから大丈夫だけど、でもありがとね。それで开心的ことを聞き

忘れたけど「勝負」はいつなの？」

「明日のお昼」

「随分急ね」

「お互い時間空いてるのが明日くらいしかないってことになってねー。だから焦って恵美んと

ここに集ちやっつたってのもありまして。へへへ」

梨香は照れくさそうに笑った。

「そっか。応援はできないって言ったばかりだけど、それでも応援を祈るわ」

「正直今の段階でも、どうなるのが一番いいのかよくわからないけどね」

帰りの準備をしながら立ち上がる惣吉が仁徳堂を取りうとするので、恵美はそれを押しとどめた。

「ちゃんと食べた分は自分で払うわ」

「いやでもそういうわけにはいかんよ」

「こっちもいかないの。今日のことを大元の大元まで遡れば、私の方こそおごらなきゃいけないもの。だから今日も、いつも通り食べた分だけ」

「……かなわんなあ」

いつも通りを満喫された惣吉は、早々に降参して両手を上げたのだった。

随々谷駅前で惣吉と別れた恵美は、一人ウィタ・ローザ旅館への道を歩く。

正直なところ、惣吉の想いが芦屋に届く可能性は低いだろうと思っている。

恵美と違い、芦屋は常に人間に対し一歩引いた場所にいる、というのが恵美の日から見た印象だ。

恵美ほど人間に入れません、恵美ほど人間に適合せず、きりとしてかつてのように無意味に人間を監視せず。

「だからこそ、道にももうまくいっちゃったなら、それはそれで驚くけど」

白い息が街灯の光に紛れて散るのを見てから、惠美は少しだけ早足になった。

グイタ・ローザ管理では、惠美を待っている者がいる。

減はずべき敵が住むアパートに、愛すべき存在がいて、大切な友がいて、そこに通いながら敵と友と同じ空間で仕事をする今の日常が始まってまだ一ヶ月と少し。

この複雑怪奇で玉石色で、信じられないくらい居心地の良い世界がずっと続けばいいのに。惠美は街灯の光や車のライト、コンビニから漏れる灯りなど多くの人の営みが零れさせる光の中を歩きながら、そう思った。

今や通い慣れた道の向こうにアパートの灯りが見える。

二階の二つの窓の灯りはまだ灯っているから、真央と鈴乃は起きているのだろう。

この灯りを見ると、心がほっとするようになってしまったのはいつからだっただろうか。

「やだなあ。こんなんじや、いけないはずなのに」

刺客とあんな話をしたものだから、また心に妙なエラーでも出ているのだろうか。

「……ん？」

目にも何かがエラーが出ているのか、見上げるアパートの脇に、奇妙なものが見える。

共用階段に誰かが腰を抱えて座っている。

しかも二人。

それを認めたとき、惠美は思わずアパートの敷地の壁に身を隠してしまった。

「恵美のヤツ、もうとっくに勤務終わってるはずなのに、何やってんだ……」

「ペルさんが言ってたけど、なんだか、お友達と会う予定があるらしいわよ……」

真美と、ライラだ。

この寒空の下、何をあんな所で二人揃って駐こまってるのだろう。

「友達か？ 鈴木梨香か？」

「誰かは知らないけど、急にお店に来たとか……」

「じゃあ間違いないねえ、鈴木梨香だ。あいつ結構頻りに店来るんだ」

「誤だか知らないけど、エミリアの友達なの？」

「ああ。地球の人間だが俺達の正体も知ってる。恵美が一番仲良くしてるみてえだから、多分

お前のことも知ってると思うぞ」

「そうなの。なんでも話せる友達がいるのは、いいことだね」

「だが、何も今日来なくてもいいじゃねえかよ。鈴乃のせいで恵美が帰ってこねえと邪魔入れ

ねえのに、鈴木梨香が来たってなると何時終わりになるか分かんねえぞ」

ライラは恵美が帰ってくることを待ち構えて例の話をしたいのかもしれないが、一瞬に真

美がいるのが解せない。

いくら以前と接し方が変わってきているとは言っても、真美がこの寒さに耐えて恵美の帰りを外で待っているはずがない。



「そういえば先ほどの鈴乃との電話の向こうで真実が何かしら非難を浴びているのではないかと予測したことを思い出したが、それに関係しているのだろうか。」

「だが鈴乃が何を言おうと、寒風吹きさらば中、真実を外に締め出すようなことを真実が了承するとは思えないのだが……。」

そんなことを考えながら、

「なんだか、こういうの久しぶりだね」

真実が以前は、よくこうやってワイラ・ローザ校長の様子を一人探っていたことがあったのを思い出す。

アラス・ラムスが現れて以降、もう堂々と乗り込むことが常態化したか、そう昔のことでもないのになぜだかひとく懐かしかった。

「俺、これでも氣い回してたつもりだったんだけどなあ……」

「男のつもりってのは、女に言わせれば言い訳よ。結果的に通ったわけでしょ？ どんな効果的な策を打つても、結果が伴わなきゃ意味ないの」

「お前に言われたかねえよ」

「でも、思い出せば本意のことよ。私も長いこと色んな国の色んな人に会ってきたけど、不思議とみんな、似たようなことが原因で喧嘩になつてるわ」

「喧嘩したわけじゃねえし」

「喧嘩してゐる方がまだお互い意思疎通してゐるだけマシってこともあるのよ」

「なんだよそれ」

魔王と大天使の会話にしては随分と中近な話題のような気がするが、真美が誰か女性の機嫌を損ねたために、あんなことになっているようだ。

だが、一体誰の機嫌を損ねればこんなことになるのだろうか。

今日の朝にいるライラではないだろうし、恵美は今日真美と顔を合わせていない。

電話に出た鈴乃は不機嫌だったが、鈴乃の機嫌を損ねたところで真美を締め出すことを認める声屋でもないだろう。

とすると、あと真美が不興を買いそうな女性といえば、天祥かアシエスか大家の志波くらいしか思い浮かばない。

真美も声屋も通らないヴィラ・ローザ製菓の大家、志波美舞になんらかの叱責をもらつてしまい、声屋が泣く泣く真美を外に締め出しているという事態が最もありそうなことに思えたが、話は恵美が全く予想だにしない方向へと流れていった。

「だって話聞いてると、完全にあなたの甘えたもの」

ライラがため息交じりに言う。

「甘え……いやそうかもしれないけど、お互い普通感覚で損ける話じゃないってのは分かってたはずだから……」

真美は反論するが、その声には力が無い。

寒さに揺れているというのではなく、單純に自分の言葉が反論になっていないことを分かつていて、それでも言わざるを得なかったかのような響きだった。

「分かつてたはず」っていうことに甘えてるのよ。そのときは仕方なかったって、後から不満や不安が出てくることなんて世の中いくらでもあるでしょう」

「そう……だけどもお、んなこと言ったって今は他に決着のつけようが」

「つけられなくても、つけようって努力はした？ その努力を彼女に見せた？ あなたの意志を常に尊重して、なんでもあなたのことを察してくれてるとタカをくくって、威嚇させる努力を怠ったんじゃないの？」

「……………」

ライラの言葉に思うところがあるのか、真美は黙り込んでしまう。

「あなたね、あの子の顔の広さと精神の強靱さは確かに規格外かもしれないけど、それでも女子高生より、人生経験だった十六、七年より、何百年も生きてる悪魔の自分と同じって考えていいと思わないで」

「そりやそうだけど……分かってるけどさ……うう、寒い、真美早く帰ってこねえかな……」  
真美は思わず息を呑む。

真美とライラの共通の話題に上る「女子高生」など一人しかいない。

千穂だ。

真央は、千穂の不興を買ったのか。

「言っておくけどね、『罪な男』なんてのは、ドラマや映画に出てくるイケメンで金持ちで社会的地位の高い男だって許されないの。ドラマでも許されないってことは、つまり現実じゃ絶対に許されないのよ」

「お前がドラマや映画語るな。旦那が泣くぞ」

「あの人も時代劇好きだから太丈夫よ。ちなみに時代劇で女を弄ぶ遊び人は、改心したってエディンダも持たずにヤクザ首や悪代官の手先に殺されるケースが後を絶たないのよ」

「もうなんの話してるか分からねえよ」

「可愛い女の子を傷つけた男は、その何倍もの報いを受けるって話」

真央はライラの時代劇分析に思わず大きく頷いてしまったが、すぐに我に返った。

「どうやら、真央が千穂を傷つけた、ということでも間違いないようだ。」

それなら電話での鈴乃の様子も、真央が真央を外に締め出しているのも頷ける。

鈴乃は千穂のことをとても大切に想っているし、真央も千穂のことを一顧の存在として敬意を払い、真央などよりよほど千穂に接している。

だが真央の知る真央は、千穂を傷つけるようなことをするはずが無いのも事実だ。

先ほどの梨香との話の中でも確認されたように、真央は千穂をずっと以前から特別扱いして

いた。

真美自身がマダロナル下のタルーとして働きはじめたから、木崎や明子や川田らの話をそれとなく聞いて、真美が千穂と接する態度は、正体を知られる前と後で全く変わっていないことも知った。

「千穂ちゃん……大丈夫かしら」

できることならあの二人はこのまま東京の下に放置し、真美のせいで傷ついているらしい千穂を抱きしめに行きたい。

だが、時間はとつくに二十四時を過ぎしており、さすがに今から押し掛けるのも非常識だ。

それに千穂のことだから、真美にどんな酷いことをされたとしても、決して真美を毒く言うことは無さそうな気がする。

だがそもそも、真美は千穂に何をしたというのだ。

話を聞いていても、具体的な話が一切出てこない。

「それにしても、懐いねえ。まるで昔の私を思い出すわ」

「寂びけたこと言ってるの後ろから腹り落とすぞ」

「あなたのとういう男の子っぽい反応も初々しくて良……きやあつ？」

「？」

タイラの小さい悲鳴が聞こえ、真美が思わず顔を壁から覗かせると、タイラが荒い息を吐き

ながら不自然な格好で階段の手すりに縋りついていた。

「どうやら真美は、本当にライラを陥り落とそうとしたようだ。」

「は、は、本当に願わなくなっていていいじゃない！ 落ちたら危ないでしょ！」

「天使が魔王をからかつてその程度で済んだんだから転落しろ。それにチメエの娘は、数え切れないくらいこの階段から転げ落ちてる。似た者親子にしてやったんだ！」

真美の凄まじい論議にライラは腹を食う。

「あ、あなたまさかエミリアを突き落としたの？」

「あいつが勝手に転がり落ちたんだよ。一回だけ助けてやったこともある。感謝しろ！」

そういうばかんなこともあった。

最近はずすがにあの階段の上り下りで足を滑み外すようなことはなくなったが、それは単純に、上り下りを精算にするようになったからだ。

ヴィラ・ローザ塔の二階との距離感が縮まると共に、真美はあの階段を登れることは無くなっていた。

真美とライラに怪られないように喉の奥から出たため息が、ゆっくり鼻を抜ける。

「で、どうするの？」

「……考え中だよ」

「私が言うこともじゃないけど、放置すればするほどこじれる問題よ」

「本島にお前だけに言われたくねえよ。いい加減姉と仲直りしろ」

「だからそのために私もこうして外で待つてるんじゃない」

「言っとくがそのことをもともとでも思着せがましく言ったらアウトだよ。恵美の頑固さつつたら妹大抵じゃねえからな。気に食わねえとなったら俺なんかよりよっぽど冷徹だ」

「そ、そうなの？」

「……冷徹とは何よ冷徹とは」

ライラの口調が若干強硬なものと同時に、恵美も見えない所で眉根を寄せて文句を言う。

「何せハードな人生歩んでるせいかな、人を簡単に信用しねえからな。ちーちゃんや鈴木葉香なんかはともかく、今はあんなに仲良くしてる鈴木ですら、初めの頃は鈴木本人が仕方ないと認めるレベルで警戒しとくってたからな」

「……今はとてもそうは見えないけど」

「今だからだ。お前が知ってる恵美なんか、生まれたてとここ最近の所だろうか」

「あなただって大して変わらないうでしょ」

「少なくとも今年一年間のアドバンテージはある。なんだかんだで無駄に一緒にいたからな」

「……無駄とは何よ無駄とは」

恵美はまた、眉根の皺を深くした。

「理解が通らないことは大嫌いだし、通ったところであいつが納得できる理解じゃないとすぐ

感情的になるし、すぐ手が出るし、そのくせメンタル豆腐だからつまんねよことですぐ黙ひし、やつてられねよ」

壁に隠れているので顔は見えないが、今の真実（まこと）はきつと、本気で顔を壁（かべ）めてタチを言っているに違いない。

だが、これだけ好き放題（ひたひた）口を叩（たた）かれているのに、恵美（けいみ）は不思議と怒（いか）りを覚（おぼ）えなかった。

「……何よ」

その代わり、何もそこまで言わなくてもいいではないか、という思いがほんの少しだけ、まるで真（ま）つ白（しろ）なハンカチに落（お）としてしまったなかなか落ちないカレーの染みのように、恵美（けいみ）の心にぼつりと浮（う）かんだけだった。

「ふうん」

一方のライカは、顔が人間の顔（かお）に類（たぐ）しきまに隠（かく）られているのに、まるで動物（どうぶつ）の無（む）いような反応（はんのう）恵美（けいみ）はむしろ、こちらに怒（いか）りを覚（おぼ）えるほどだ。

この通り複雑（ふくざ）な子供（こども）なのだが、それを白覚（はくかく）するのも嫌（きら）いなのでじつと我慢（がまん）する。

「アラス・ラムスのことに聞（き）いて、だけは一人でよくやっていると思（おも）うけども、それでもあいつ、昔（むかし）は俺（おれ）に会（あ）わせると悪影響（あくえいじやう）だとか五月蠅（ごげつよう）かつたくせに、最近（さいきん）は休（やす）みの日（ひ）になると当たり前（あたりまえ）の顔（かお）でこの通（と）うろつきやがって。アラス・ラムスも喜（よろこ）ぶし、あいつもその友（とも）がタチなんだろ（う）けどな」

「へえ……そう」



「おい、なんだよその態度は……ってあれ？　なんでこんな話になってんだっけか」  
 ライラの興味なさそうな反応に真美ははたと我に返る。

「私がエミリアとそう簡単に仲直りできないって話でしょ」

「ああ、そうだったそうだった」

理解はしたが、勢いを失った真美はそれきり黙り込む。

真美はあんまりな言われようとして、そのことで自分の心のハンカチの染みがわずかでも広がっていることを自覚したくなくて、もういい加減出ていこうと考えたそのときだった。

「あなた、エミリアのことだったならなんでも知ってるのね」

ライラの一言が、真美を再びその場に縛り止めた。

「……あ？　お前何言ってる……」

「エミリアが好きなおこと、嫌いなこと、昔校考よてること、なんでも出てくるじゃない。あなたがしつかりとエミリアのこと、見てるからよね」

「……っ」

真美は息を呑み、同時に急激に頬が熱を帯びるのを感じた。

そして、そんな反応を見せた自分に戸惑いを隠せず、きちんと身を隠しているにも関わらずその場に陣取り込んでしまう。

「私、今、なんで……」

「お前そういう誤解を招くような表現を……」

「あなたと私しかないのに、誰の誤解を招くの。この間ガブリエルと言いついていたときも、あなたまでエミリアの気持ちを誤って、感づてくれてたわ」

「やめろそのときの話は」

真実の声が少しだけ離れた。頭でも抱えているのだろうか。

「私がかしからなくてもいいのに」

「私がかしがつてんじやねえよ。大体よく見てるって、見えるを得ないだろー。最近はずっと、前は悲美にいつ寝言掻かれてもおかしくない状況だったんだぞ。それこそ一挙手一動足見ておかないと、首が物理的に飛んでくかもしれないなかったんだからな」

「でも、見てたのよね」

「強引にそういう方向に話持っていくのやめろ！」

「で、そのせいで、あなたにストレスをかけず、居心地のいい環境を用意してくれる千穂さんには、全く注視していなかった」と

「……………」

「え……………」

思わぬところで千穂の名が出てきて真実が黙り込み、悲美も意外そうに目を見開く。  
真実が、千穂のことを覚えていない？

「そこで黙り込んでやるのが、素直よね」

「……どんなつもりだったとしても言い訳になるつつったのはお前だろ」

「そうだけでも」

ライラが苦笑する気配。

「言い訳するにしたって、お前にしても始まらねえ。書屋と鈴乃と、もっと言えばちーちゃんに言い訳しなくちゃ、俺家に入れてもらえねえし。第一朝の面されるにしても、どういう理由で恵美が帰ってくるまでなんだよ意味分からねえ」

「時間的に丁度いいからなのか、それとも駄の霊機があるのかしら。いずれにしろ、今から千穂さんのおうちに行くわけにもいかないものね」

「俺が非難的なマネすれば、悪り返ってお婆さんや祖父さんからのちーちゃんへの理解が下がる」

「そういうところ弁えてるのに、どうして一番分かりやすいところを怠ったのかしら」

「そういうところが鈴乃や書屋やお前が言うところの言い訳で甘えなんだろ」

「かもね」

「はあ……とりあえず、早く恵美帰ってこいよ……そうじゃねえと俺本気風邪ひく」

それより真実もライラも黙ってしまった。アパートを沈黙が支配した。

結局書屋の下で長いこと坐み聞きをして分かったことといえば、どうやら真実は千穂に対してなんらかの配慮が足りなかったせいで、恵美が帰ってくるまで端の面されているということ

だけだった。

一方でライラは、真奥が千穂よりも恵美のことを理解している、という話もしていた。翻れば、真奥はそのことについて、千穂の複雑な感情を讀めたことになる。

「……き、聞いて良かったのか、悪かったのか」

なんとなくだが理解した。

そして、理解した結果、恵美の中に純粋な怒りが生まれた。

真奥が直感的に何か言ったかやったかしたか、それとも真奥の行動や言動を受け取った千穂がそう考えたのか、はっきりしたことは分からない。

だが一つだけ言えることがある。

千穂に、真奥とのことでヤキモチを妬かれた。

「ど、どうしたらいいのかしら……」

千穂にそう思われても仕方が無いことだった。

いくらライラの出現とイルオーンのトラブルもあって動揺していたといっても、ここ最近の自分は、エラーだのなんだのと色々言い訳をして真奥の優しさに甘えっぱなしだった。

「得って、早合点はだめ。きちんとべらに聞いて、そうなら誤解させたことを千穂ちゃんに謝らないと……」

誤解だったら、真奥を体よく利用しているだけと言って偉らなかつたが今は違う。

自分は純粋に、真実を言っている。

そしてそれを許すところか、精神的にそうさせる自分が心の中に生まれているのだ。  
そして千鶴は、それを敏感に感じ取っていた。

「こ、こういうの、なんていうんだっけ。なんか、悪人と一緒にいるうちに、えっと、どこかの国の街の名前の……」

靴の中からスリムフォンを取り出そうとする手が震えている。

指先が乾いて、画面がうまく反応しない。

「あっ」

手が滑り、スリムフォンがアスファルトの地面に落ちる。

鈍い音に真実とライラが授けいた気配は無かったが、真実は動揺している自分の心を鎮めることが遂にできなかった。

このままここでもとまっていては、思考があらゆる方向に暴走する。

今日は長い時間仕事をしていたし、梨香の相談事にも真剣に対応してきつと頭が疲労しているだけだ。

そう思わなければ、その場で立ち上がることもすらできそうになかった。

真実はのろのろとした動きでスリムフォンを拾い上げると、よろめく足取りで壁を離れ、アパートの入口へと向かう。

すると、

「あつー 惠美ー やつと帰ってきやがったー」

「え？ あ、え、エミリア、お、お帰りのな……きやつー」

「お前どこはつつき歩いてやがったー なんてそんな方向から帰ってくるんだー」

惠美との接し方が未だに分からず顔が引き皺むライラを押しのけて真央が階段を駆け下りてくる。

「……そんな所で、何してるのよ」

惠美は真央の問いには答えず、勢めて拘えた声で質問を返した。

「いや、何してたっていうか、とにかくお前帰ってくるまで俺締め出されてたんだよ！ 早く鈴乃んとこ行ってくれ！ もう寒くて死にそうだ！ 声屋ー 鈴乃ー 惠美帰ってきたー 帰ってきたから頼む入れてくれ！」

「あつー！ ちよっ……！」

無造作に手を引っ張られて、惠美は振りほどくこともできず、結局真央の力に負けて手を動かれたまま階段を引っ張り上げられる。

途中タイラの呆然とした顔とすれ違ってから、惠美は共用廊下へと引き込まれた。

騒がしい真央の様子に二〇一号室と二〇二号室から同時に声屋と鈴乃の三白眼が覗き、真央は身震いしながら二〇一号室に入っていく。

「ここまでのことをしておきながら一言の説明も無く失礼な話だが、当の恵美はここまでの引張られる間、ろくに抵抗しなかった自分に困惑し、動揺し、呆然としていた。」

鈴乃は二〇一号室に消えた。恵美の気配を感ずしげに眠るでから、恵美に顔を寄せる。

「アラス・ラムスはもう寝てしまっている。静かにな。それと、外にライラがいただろう。話してきたか?」

「……あ、うん。べル、たたいま……」

鈴乃の問いに対して、恵美はとんちんかんな答えを返す。

「うん? あ、ああ。お煙草。それでもし話が済んでいるのなら、少し千穂殿のことで話があるんだ。残れているところ申し訳ないが、茶を淹れるから時間を……」

「エミリア? その、仕事で残れてるときに、ごめんなさい、ちよつとあの、お願いがあつて待つてただけ……べルさんごめんなさい、まだ私」

そこにライラが共用廊下の玄関から顔を覗かせて、二人の様子をうかがってきた。

「なんだ、まだ話はできていなかったのか」

「ちよつと、それと……ちよつと……」

期せずして、母子の声が抜けた。

「うん?なんだ?」

「あ、ううん。その、千穂ちゃんのことって……」

「優先順位からいけばライラの方が先だ。まずはライラ、早めに頼む」

「え、ええ、実はねエミリア……エミリア？」

鈴乃とライラに話しかけられて、なんともなく心ここにあらずといった様子で、素直に不審なものを感ぜながらも、言葉を紡ぐ。

「聞いてるわ」

「そ、そう。実はあの、明後日ね、サタンと子機さんが私の……東京にある私の家に来てくれることになってるんだけど……あなたにも、是非来てほしいの」

「……家？ 魔王と子機ちゃんが？」

「そ、そうなの。明後日、あなたとサタンと子機さん三人のお仕事が無い日だって聞いて、それで是非……その、お父さんにも声をかけてね。と、どうかしら。真かつたらエメラダさんやベルさんにも一緒に来てもらって」

「そ……」

恵美は必死で言い募るライラの言葉を聞いているのかいないのか、ほとんど生返事だ。

「アルシエルさんとルシフェルは予定は無いけどさすがに来てはくれないみたいで……その、今まで不確かだったことや不誠実だったことも、きちんと明らかにして、あと、色々成せるものとかもあるから……」

明後日、声屋は何も予定を入れていないのか。



ライラの訴えから鹿美が拾った情報は、明らかに話の本筋から外れたそんなことだった。鹿美のことを好きだと言つてのけた親友が、全てを理解した上で勝負に出る日の曜日。

鹿屋はアパートにとまより、特に予定を入れていない。

梨香の想い。

千穂の想い。

自分の想い。

見えているようで、全く見えない人の心。

それぞれにとっては人生が一変するような大きなうねりでも、世界にはほとんど影響も及ばさない、古から連続と受け継がれてきた想いの核の中で自分を見失いかけている鹿美は、

「好きにしたら、私は別に、興味ないから」

気がつけば、そう言っていた。

「え……」

「エミリア、いいのか？」

鹿美の返事にライラはシロクを受けたように硬直し、鈴乃も思わず答えを欲せうとする。

「行つて何があるわけじゃないし、あなたが私にさせたいことが変わるわけでもないでしょ」

「で、でも私の誠意として、見てもらいたいの。今まで私はあなた達の周りで好き勝手に世を表したり隠したりしてきたけど、もうそういうことをしないって証明のために……」

「あなたがそう會話したならいいわよ。魔王と千穂ちゃんがそれで納得するならいいじゃない。私は別に、あなたが住んでる所を見たって何も得することは無いもの」

「そ、そうかもしれないけど……」

「魔王がこんな暮らししてて、ササエルやガブリエルだって日本の人達と大きく違う暮らしをしている気配は無い。あなただってきつとそうなんですよ。なら改めて見たいとも思えないわ。寒い中待つててもらって悪いけど、私は行かない。それにやあ、おやすみなさい」

「え、エミリアア」

「タイラ、すまないが」

鈴乃は恵美の意志が固いことを悟ると、タイラの視界を遮って扉の中に恵美を招き入れる。同じられる支那のドアの向こうに、シロフタを受けているらしいタイラの胸が覗えてから、鈴乃は、鈴乃の布団の隅で寝息を立てているアラス・ラムスの傍に腰をついて、娘の髪を撫でる恵美に小さく声をかけた。

「エミリア……大丈夫か」

「ベルが魔法で言ってた大事なことって、今の話？」

「あ、ああ。その、魔王がエミリアより先にタイラの家に行くのに抵抗があると言つて、エミリアを誘うならタイラに直接言わせろということまで……」

鈴乃は恵美の意図を探いつまんで伝える。

「そう。なら、魔王にはちよつと悪いことしたわね。折角<sup>せがひ</sup>氣を遣<sup>つか</sup>ってくれたのに」

「う、うん？」

ライラではなく真央に悪いと言ったことに違和感を感じつつ、鈴乃はこれ以上ライラの話題に触れるのは得策ではないと気付き、少しだけ声を高<sup>たか</sup>くして話題を変える。

「そ、それでだ。魔王も外に締め出されていたろう？ 私は今夜一晩放り出せと言ったんだが、アルセルがせめてエミリアが帰<sup>かえ</sup>ってくるまでに負けろと言<sup>い</sup>うから仕方なくな。実は夕方、千穂殿と街で会ったときのことなんだが……」

「魔王が私のことを千穂ちゃんより大事にしてるとか、そんなこと、ないわよ」

「魔王の、千穂殿の原意に甘えきっていてそれで千穂殿が……何？」

「魔王は別に、私のことを大事にしてるんじゃないわ」

「え、エミリア？」

鈴乃は目を丸くしている。

「魔王が、何を言ったのか？ それともよもやどこかで千穂殿と……？」

「どっちでもないわ」

真央は穏やかな表情で、ただアラス・ラムスの聲を聴き続けている。

「魔王はね、誰にでも優しいのよ。命を救<sup>すく</sup>ってる私だって仲間だって思<sup>おも</sup>つちやうほどこに。最近私は私がトラブルに巻き込まれたり環境が変わったりしてるから私を気にかけてるだけ。私が魔

王の「特別」になつたわけじゃない」

「エミリア……何か、あつたのか」

「その証憑に、魔王はタイラにも優しいでしよう？ 気に入らない気に入らないって言いながら、タイラが魘を通すまで辛抱強く待つてる。私とタイラが仲直りできるように、契約を進める条件だなんて面倒なこと考へたりして」

撫でられていたアラス・ラムスが小さく頬返りを打ち、悪魔の手から離れ、悪魔の手が虚空で止まる。

「ねえベル。魔王が心から大事にしているのは……討等に控したいと思つてるのは千穂ちゃんだけだって、千穂ちゃんに分かつてもらうには、どうしたらいいと思う？」

「そ、それは……」

鈴乃は絶句してしまふ。

「やっぱり、魔王自身の行動が伴わないとダメかしら？」

「そ、その、今日そのことでアルシエルと共に魔王に説教を……」

「そうね。思へば魔上って、千穂ちゃんを大事にしてるようで、その裏大事にされてるだけだもんね」

「あ、ああ。それで……」

「大事にされたいって、思うわよね」

「ええ」

「……今日はダメ。ちよつと色々複雑な話の後だから、寝なことを考えよう」

惠美は虚空で止まってしまった手を下ろして、ため息をついた。

「おえべル。言うべきじゃないけど、でもどうしても誰かに聞いてほしいの。私自身の気持ちを整えるために、ここだけの話、聞いてほしい」

「あ、ああ」

鈴乃は立ち戻<sup>もど</sup>くしたまま、喉<sup>のど</sup>を鳴らした。

「さっきライオウから、家に來てほしいって言われたとき、私が最初に何を思ったと思う？」

鈴乃は応えられなかった。

どんな想像も、間違っている気がしたから。

そして惠美が続けて言った一言は、確かに鈴乃の想像を超えるものだった。

「魔王は、まだ私の……宿敵である勇者エミリアの家に來たことが無いのよ。それなのにライオウの家にいくなんて、フザけると思わない？」

「エミリア……エミリアまさか」

「……ね、私がどれだけ混乱してるか、分かるでしょ」

惠美が憔悴<sup>せうすい</sup>しきった顔を上げ、鈴乃を見上げる。

「分からないの。そうかなそうかなって思ってた真剣に考えてみるんだけど、でも、隠している

んでも「まかしてゐるんでもなく、はつきり違ふの」。それでも、さつきは思つたの。私の家にも来たことが無いのに、つて、これじゃ、とてもじゃないけどあなたの相談には乗れない。今の私じゃ、腰を合せるだけで千穂ちゃんを刺激しちゃう。だから、明後日は行けない。こんな弱い気持ちのままそんな所に行ったら、なし崩しに全滅訪問いちゃうそうで、千穂ちゃんと魔王から逃げるためにね。……私、やっぱり疲かしら」

「……疲では、ないさ」

鈴乃は東美の前に跪くと、その肩を優しく抱き締めた。

「エミリアも、私も、この国でごく短い間にあまりに環境が変わりすぎた。馴染むには時間がかかる」

「ええ……」

「馴染むには時間がかかる」

鈴乃は、東美の耳元で小さく繰り返した。

「千穂殿は、エミリアを思つて泣いていた。此処なことで経験し感情を抑えきれなかった自分に怒り、嫉妬してしまつたことが申し訳ないはずと泣いていた。千穂殿もまた、ごく短い間に激変する環境に身を置いていたことを、私達は忘れていたんだ。それだけ千穂殿は強く自覚したから」

その千穂の強さを支えていたのは、東美にも、そして鈴乃にも正洋として無いもの。

心の中にある確信が、千穂を支えていた。

その支えだけを頼りに千穂は、異世界の、圧倒的な力を持つ者たちと共に過ごしてきた。

必死で思いを共有しようと、共有できないことを感じようと、足手まといになるまいと、悪魔や魔術師や煉獄や鈴乃の友でい続けたい、ただそれだけのために。

その全ての土台にあるのは、真実への想いという確信だ。

「また誰も、調染み切ってはいなかったんだ。本当の意味では。未だに千穂殿と我々の間には世界と力の壁が横たわっていて、千穂殿にだけそれが見えてしまっている。それを取り払えるのは……」

「魔王だけ……か。まったく……フザけた話ね」

「それが取り払われたとき、きっと千穂殿と私達は、同じ平面に立ったことになるのだと思う。そしてもしその瞬間、はつきりと確信を持っているのが千穂殿だけだったとしたら」

鈴乃は微笑から顔を離して、言った。

「私は、千穂殿を祝福するよ」

「じゃあもしその平面に、他の『確信』があったら？」

「そのときはきっと……」

鈴乃は微笑んだ。

「私達は一切の垣根の無い本当の友になれる」

ライラは、鈴乃の部屋壁の壁に背をもたせかけながら、共用廊下に座り込んで俯いていた。

「エミリア……」

小さくうめくように呟いた瞬間、共用廊下のドアが開いた。

「ダメだったか」

ノルド・ユステイナが、心配そうにライラに声をかけた。

「焦るのはいらないって、頭では分かっているんだけど」

ライラは俯いたままため息を吐く。

「一体今まで何して生きてきたんだろう。何千年も生きてきて、娘と仲直りする方法一つ分からない」

「娘が娘と簡単に意志疎通する方法が分かる者がいたとしたら」

ノルドはライラの側に跪くと、手を取って立ち上がらせた。

「その者はきっと、人類の歴史に名を残しているよ」

一人の娘の父親は、映めしい顔に小さな微笑みを浮かべ、妻を励ました。

「またチャンスはやってくる。君達は生きて、平和な世界で会うことができるんだから」

「……うん」

ライラは頷いて、ノルドに手を引かれ二階の廊下から外に出た。



「人生何があるか分からない。私はこの年になって魔王と同じ共同住宅に住むことになるなど悪いもしなかった。それを考えれば、種族のある母と娘が仲直りできる日の方が、ずっと当たり前にあることだろうか」

「そのときは、あなたも一緒よ。三人で、家族なんだから」

「ああ、そうだな。……さあ、部屋に入ろう。冷えるから」

「ねえ、あなた」

「うん？」

共用階段の途中で夫婦は向かい合った。

「私、本当に今、焦ってるの。これが本当に最後のチャンスなんじゃないかって気がして。これを逃したらまた何百年も彷徨える自信が無いわ」

「君とエミリアが美しいまゝ生き続けてくれるなら、私はそれでもかまわないんだが」

「嫌よ。生き飽きたわけじゃないけど、私は『人間』になりたい。エミリアにも『人間』でいてほしいの。この世界に、この宇宙に数え切れないほど存在する当たり前の家族のように一日一日を大切に生きて、そして死にたいの。あなたとエミリアと一緒に生きること以外、考えられないわ」

「……なら、今こそ幸福のときだ」

夫は、妻の手を取って注意深く階段を下りた。

「私にできることがあればいいんだが……こんなときだけ、ただの人間である自分の身が恨めしいよ。せめて肩達を守るために戦う力があればな」

「あなたは私を『人間』にしてくれた。それだけで、十分すぎる贈り物」

妻は夫の頬に小さく口づけすると、微笑んだ。

「ありがとうあなた。また明日から、めげずに頑張るわ」

「ああ」

「それと……」

「うん？」

「その……驚かないでね？ 私のその、家に」

「ん？ なんだい？ まさかもの凄（こ）い暴走にでも使（つか）んでいるのか？」

「ううん、そういう方向じゃないんだけど……とにかく、明後（あした）日までにきちんと来てもらえるように頑張るわ」

「よく分からんが、楽しみにしているよ」

夫婦のききやかな会話が一〇一号室に消え、やがてアパート全ての灯りが消え、深夜の夜に完全な静寂が降りたのは、もう午前二時のことだった。

女子選手、心の壁を越す

身体みを知らせるチャイムが鳴って教室中が解放感に包まれる中、一人自分を机に拘束したまま動かない者がいた。

そしてチャイムの余韻が消えると、そのままコマ落しのようにゆっくりと机に伏して動かなくなってしまう。

「ちょっと義経」

「あ？」

「あんた、何が聞いてないの？」

茅渚北高校二年A組の東海林佳織は、勉強会みでクラスメイトで部活仲間でもある江村義経の机でひそひそと声を交わす。

「何、佐々木のこと？」

義経は、佳織の言いたいことを敏感に察して首を横に振った。

二人にとってクラスメイトで部活仲間、高校に入ってからのお互い友達である佐々木千穂が、朝から全く踪影を欠いているのだ。

授業中に指名されても上の空。休み時間はあおして机に伏しているかふらりとどこかに消えてしまい、心配した佳織が三時間目が終わったところで何があったのか尋ねてみると、千穂は明らかに無難のある笑顔で、

「心配かけてごめんね。ちょっと家に、お財布と携帯と手帳と筆記用具とノート二冊忘れてき

ただけだから大丈夫」

と、普段の千穂を知っていれば絶対にそれは大丈夫じゃないだろうと思ふ言ひ訳をされてしまった。

ノートと筆記用具だけならともかく、それ以外はうつかり忘れたら紛失していいかどうか気もどろになるタイプの忘れ物のような気がする。

「お前が何も聞いてないのに俺が聞いてるワケねえだろ」

「それもそうか。でもご飯食べる様子も無いからさ……」

「財布忘れたってんなら俺がお前が貸してやりやいい感じもするけど、佐々木って基本いつも弁当じゃなかった？」

「いつもってわけじゃないけど」

俺は良いが、部活を離れた学校内では義体はあまり千穂や佳織と一緒に行動しない。

こういうとき、女子は女子、男子は男子のグループになるものである。

昼食はいつも千穂と佳織、時によってタラスの他の仲のいいメンバーと共に学食で食べるのだが、千穂の昼食は大体弁当七、学食三の割合だ。

「弁当……弁当ねえ……？」

「なんだよ」

「んー、あんなには関係ないな」

「おい、関係ないはないだろう」

話を振られたのに却座に突き放されて、義孝は鼻白む。

「俺だって一応部長だぞ。部員が門入でたらケアしてやらなきゃいけないって事なんだぞ」

二年生部員が千穂、佳織、義孝しかいない。豊橋北高校の道部は、三年生が引退した現在、全校生徒の予想を裏切って江村義孝が部長を務めていた。

しつかりもので純粋に人望のある千穂が、後輩の面倒見が良いおおらかな佳織が次期部長と目されていたところに、まさかの義孝である。

理由は単純に、義孝が中学校の後輩を部引き込んだことで、弱小ながらも豊橋北高校の道部が男女五人立に必要な人数を揃えることができたからだ。

一年生男子四人に女子一人が義孝の後輩ということもあり、佳織が、

「なら最大深層持つてる義孝が部長やればいいじゃん。私達は副部長二人態勢ですがー」  
からさ」

と言い出し、千穂も賛成したのが今年の夏頃のこと。

夏の縣大会の成績は残念ながら団体個人共に僅々決勝敗退であったが、団体戦に於いて千穂が太閤（一番手・九鋒）を、佳織が落（五番手・主将）を務めそのまま勝ち進んだこともあり、実りのある部活動の一環であったことは間違いない。

そして、佳織が今思いついたところによると、千穂の弁当にある変化が起ったのが、丁度

その夏場だった。

千穂の弁当は佳織の目からも見ても目に覚えて感銘<sup>かんめい</sup>になった。

夏の大会と前後して千穂の弁当箱は一回り大きくなり、中身も明らかに冷凍食品などの詰め込みではない、ひと手前<sup>ひとてまえ</sup>かかったものが多くなっていた。

「ふうむ」

「ショージョー？」

「あー、まーちよつと思ひ高たるとこ無いでも無いから、部活までにはなんとか立ち直らせておくよ」

「そうか？　じゃあ任せた！」

佳織がやるとなれば、義経は基本任せっぱなしである。

千穂や佳織が何かやる方が物事がスムーズに進むのは後援者もそろそろ分かりはじめているのだが、それを差っ引いても義経の悪く言えは何も考えてない、良く言えはとこまでも前向きな様子は純粋に周りに良い影響を及ぼすのも確かだ。

春先に道路に悩んでいた頃と比べると、義経は適き物が落ちたように明るさを取り戻した。

そこには千穂の生真面目さと行動力の強さが影響しているが、佳織にとって義経はこうでなくしてはやりにくい。

同時に、貝のように黙<sup>もく</sup>りこくっている千穂など、それ以上にやりにくいことこの上ない。

あつさと燈の中のものを吐き出させてしつかりさせなければ、皆が心配するのだ。

「さきちー、今日なんか具合悪いの？ ご飯、食べられない感じ？」

佳織は空いていた千穂の前の席に座ると、突っ伏した千穂に声をかける。

「……ちーくん、お腹は空いてるの？」

と、思ったよりは元気かつ現金な返事が。

「あそ、じゃあ今から学食行っても座れないだろうから、ここで食べる？ 財布忘れたって言うてたけど、弁当忘れたわけじゃないんでしょ」

「忘れた」

「おいっ！」

佳織は思わず笑ってしまふ。

「じゃあ義母にお金出させるから、学食でカレーかうどんでも食べようよ。カレーかうどんなら今行っても間に合うだろうからさ」

筑城北高校の学食もご多分に漏れずは昼飯争奪戦が激しいが、学校の計らいによりカレーとうどんだけは相当量ストックされていて、最初の混雑が引いた後でも残っていることが多いのだ。お値段はいずれも二百円。高校生の平均的なお小遣いであれば気軽に注文することのできるリーズナブルな価格設定である。



「……………」

千穂は顔を上げずにしばし遠慮し、

「カレーとうどんは、食べられない。それだけは、今日はダメ。申し訳なくて」

「カレーとうどんに？」

「うん」

「カレーとうどんに何か恨みを言うようなことしたの？」

「……迷惑かけた」

「カレーとうどんに？」

「うん」

「実はささちーの正体は学園委員の既婚者なんかで、カレーとうどんなんか悪逆は認めないみたいな主義でも持ってるの？」

「私、うどん派」

「学園の長に迷惑かけたかー」

会話になっているのか分らないのか分からない会話のまま続き、やがて佳織は小さくため息をつくも、椅子の上で足を組み換え、周回を繰り返す。

佳織もいつの間にか男子と一緒に食堂にでも行ったか夢が見えず、教室に残っているお弁当ダループは、自分達の話に夢中のようにだ。

佳織はそれでも周囲を警戒しながら、千穂にだけ聞こえるように囁いた。

「フラれたな？」

「ち、違っ!!」

「おこっ!!」

「あだっ!! ぶっ!!」

千穂は弾かれたように顔を上げようとしたが、頭近くで囁いていた佳織の顔と千穂の後頸部が激突し、そのまま机の上に逆戻り。落下の勢いで鼻の頭をしたたかに打ちつけてしまう。

佳織も不意打ちに思い切り仰け反り、あやうく椅子から転げ落ちそうになった。そして。

「なんか、ごめん」

「私こそ、ごめん」

佳織と千穂は、二人静良く保健室に来ていた。

花も恥じらう女子高生が教室内の激突で鼻血を流すなど、あまりにみつともない話だ。

看護教諭に応急手当をしてもらってしばらく安静にした後、鼻血が止まって保健室を退出した二人は、日中故に薄に薄暗い廊下を歩いていた。

「んで？」

「……言わなきゃだめ？」

「言わないならカレーかうどん食べに行く」

「あう……」

「何？ カレーとうどんは何かの例えじゃなくて、本当に嫌なの？」

佳織は困ったように笑った。

「例えでもあるというか、そうでもないというか、嫌じゃなくて顔を合わせ辛いというか」

「まみ、とりあえず外出ようか」

佳織は手紙を引き連れて校庭に出た。

外ではとこのクラスの男子が、制服姿のままサッカーに興じていて、この寒いのにはワイシャツ姿で汗をかいている。

結構な人数、制服のズボンの裾が見えるも髭に振り切れているから、きつともやっているのだから。

佳織も手紙は校舎の隅の壁に寄りかかって、なんとなく話をし出すきっかけを探る。

「素直についてきたってことは、私には話してくれるのよね？」

「そうじゃないと、許してくれなさそうだったし」

昼休みの校舎内で、人がいない場所を探すのは意外難しい。

人がいないと思われがちな屋上に出るための踊り場は、教員の目を逃れてリラックスしたりトランプなどに興じたりする場所として意外と競争率が高く、技術科室や理科室、音楽室などといった特別教室は、その教室を機械にする使徒や同好会の生徒が溜まっていたりする。

それならばこの季節は、いっそ外に出た方が誰もいない場所は見つけやすい。

「はあ……何から話したらいいか……」

「で？ 相手は誰？ バイト先の例の先輩？」

「かおつ？ 私まだ何も……!!」

何から話したらいいかと言っているのに第一声から思い切り心の板に踏み込んだ佐藤に、千穂は飛び上がってしまふ。

またそのことで、何を言ってももうごまかせないことも同時に悟って、着陸した勢いで膝を抱えてうすくまってしまった。

佐藤は義弟と共に千穂のアルバイト先であるマダロナルド饅頭谷駅南店に何度も来たことがあり、「バイト先の例の先輩」とも話をしたことがある。

だが、その後は特に佐藤に仕事中的の様子を見られるようなことも無かったので、そこまでの確に言い当てられるとは思ひもなかったのだ。

「そういうところ分りやすいなあさちーは。今のところ私が見た範囲で予測できることは、カキうどんを食べてる最中に告白して見事玉砕って構圖だけだ」



「どんな状況よそれ」

文句を言おうとする千穂だが、これまでの経緯を考えると意外とあちえなくないんじゃないかとも思った。

「一応言っておくけど、アラれたとか、そんなんじゃないかも」

「じゃあどんななんなの」

「……それは、その」

千穂は慎重に言葉を探す。

「アラれたんじゃないで……私が、短気短気したの」

「短気？」

「うん……その、何もなくて……何も無い間に色々ありすぎて、何かうやむやになってるんじゃないかって思ってた」

「何も」が多いな。ってか「何もなくて」「短気短気した」ってさ、それ聞きようによっちゃ、さきちーがもう例の先輩と付き合ってたのに、向こうが一切手出ししてこないから不満みたいにも聞こえるんだけど」

「な、無いよ！ 付き合ってるとか、そんなことは無いの！」

千穂は腹（はら）でて否定する。

「無いのか……。なんていう名前だったけあの人。珍しい名前だったよね」

「真奥さん」

「まあ、そんな名前だっけ？　名前までは一、二回会った程度じゃ覚えてないや」

佳織は眉を凝めた。

「で？　付き合ってもないのに「何も無い」ってどういうこと？　もしかして、夏頃から豪華になったささちーのお弁当と何か関係あるの？」

「気づいてたの？」

千穂は目を丸くした。

「だって、ささちーの弁当、他の子と比べても明らかに豪華だったもん。量も多かったし」

「……うん、実はそのせいで一時期、ちょっと太った」

「そっか。それはいいこと聞いた」

いざ心の重しを溶かす食糧をしてみると、佳織の軽口がとても心地良かった。

千穂がワイタ・ローザ登壇二〇一号室に差し入れをすることになったそもそのきっかけは、夏頃に真奥の部屋の隣に引っ越してきた鈴乃が魔王城に入り浸りはじめたことだった。

鈴乃が真奥に想いを寄せているのかも、との勘違いも手伝って、千穂の対抗意識は顕著な上だった。

しかし鈴乃の脳筋は女子高生の自分の目から見てても明らかに普通の家庭料理の範疇を越えたものであったため、それを上回るには並大抵の修行では敵わないとの思いから、人生で初めて

千穂は料理の監視職をしたのだった。

実は、母にはすぐに意図を見抜かれた。その上、父にも報告されてしまった。

父は複雑な顔をしていたが、母は「私が毎日お弁当の献立を考える手間が省ける」という理由から、かなり色々なことを教えてくれた。

そうして千穂の差し入れ作戦が始まったのだが、魔王城の食卓に上がった千穂の手料理は、実は作った料理全体の三割にも満たない。

最初は露乃に負けないために様々な試行錯誤を繰り返したり、技量が追いつかない料理に手を出したりして随分と失敗したものだ。

千穂の「告白」は、真実と差し入れをした記念すべき第一回目の日に、行われた。

もう随分前のことのような気がするが、実はまだ半年も経っていない。

うだるような暑さも潮の声も、あの瞬間だけは千穂の感傷から消え去っていた。

勢いでもはずみでもなく、確信を持って言った。

そのタイミング以外は無いと思った。

その時点で千穂は、真実を意識しはじめたときとは違い、彼に関する多くのことを知っていた。知って尚、想いは変わらなかった。

だから初めて心から好きになった「人」に、想いを告げた。

「おお！ 刺激的！」



「……からかわないでよ。死ぬほど恥ずかしいんだから」

佳織は藤更太衛に驚いてみせる。

千穂はエンテ・イスタに絡む部分は全て伏せたものの、それ以外のことのあらましを正直に話した。おかげで今は、この素直なのに耳の先まで真っ赤である。

「やー、中学の頃はさ、高校生になれば皆彼女で忙しくなるんだろなって思ってたのよ。でも現実め、周りも意外なくらいそういう感じじゃないじゃん。まあいる子はいるんだろけどさ。だから親しい子が誰かに告白したなんて話を聞いたのは初めてだったから」

「うう……」

「かーわいーいなあさちーは。で？ 逸事はとうだったわけ？」

当然、想いを告白したとすれば、誤だつて逸事は気になるだろう。

だが、千穂は顔を暗くした。

「それが……短気を起こしちゃった理由の一つというか……まだもらってないの」

「はい？」

今度の驚きは、本気の驚きのようだ。

「まだって、告白は夏休み中のことでしょ？ え？ もう十二月だよ？」

「うん」

「え、その後も普通にバイト一踏（ひと）になったりしてるんでしょ？」

バイト以外でも色々一緒なのだがそこは伏せて、

「……うん」

千穂は首肯した。

「私もすぐに返事しないでって言ったは言ったんだけど」

「ああ……でもうーん、それにしたってねえ。……まあいいや。で、それが理由の一つと、他にも理由があるのね？」

「うん、それが……」

ここから先の詳細を語ろうとすると、アラス・ラムスの話題に触れざるを得ない。より慎重にエンテ・イスラに関わるワードを避けながら千穂は掻いつまんで語る。

真夏の家に放蕩者の親戚が年増もいかないう子を預けていつてしまった。だが千穂は高校生である立場上、独身男性の家の赤ん坊の世話を積極的に手伝うわけにはいかない。

「そりゃそうだ、そんなことして先生にでも見つかったら、生活指導じや済まないよ」

「うん。バイト先の店長にも叱られた。自分達が世間からどう見られる可能性があるか考えろって」

それでも真実たつての願ひもあり、可能な範囲で手助けをしようし千穂は心に決めた。だがその親戚の子に關する手伝いは、別の女性に託されることとなる。

「ライバル登場ってわけだね？」

「おお、なんでもよつと楽しそうなの」

「仕方ないじゃん。そんな顧問、ワタワタする以外どうしろって言うのよ」

「そうかもしれないけど……でもライバルってわけじゃないんだ」

渡佐恵美というその女性是真奥の古くからの知り合いて、独立した大人の女性であり、真奥の家に通って手伝いをするにはなんの問題も無かった。

本人が真奥の家に通っていたがどうかは大いに議論の余地があるが、結果的にその親戚の子を通して、恵美と真奥の距離は物理的な面に限り縮まっていた。

そして憶ならぬその渡佐恵美こそが、千穂に真奥のことを色々評らかに教えてくれた張本人だった。

「凄く強くて、綺麗で、頼りがいのあるお姉さんなんだ。大切な友達なの」

「……さきちーが本来でそう思ってるのは分かるけど、それだけに凄く毒舌な気配がするよ」  
言い知り合いとはいふものの、恵美と真奥は知り合いが悪かった。その親戚の子の関係が無ければ、まともに会話が成り立たないことすらあったほどだ。

「なんでそんな人が親戚の子の面倒見てくれようなんて思ったの？」

「話すとき長くなるけど、色々事情があったの。その子が渡佐さんに懐ききっちゃったとかね」  
「ふうん」

二人は仲が悪かったが、二人とは個別に仲が良い千穂は二人にも仲良くなってほしいとずっ

と思つていた。

そんな折、重美があるトラブルに巻き込まれて失敗してしまふ。

だが、持ち前の行動力と能力で、重美はすぐに次の現場を見つけることができた。

「え、まさかそれって」

「うん、私と真更さんの働いてる、あのマダロナルド」

「うわーお修羅場ってる修羅場ってるー」

「修羅場っていうのとは違うよ。だって確かに告白はしたけど付き合ってるわけじゃないし、私と蓮佐さん仲良いし、来てくれて本当に感謝しなかったんだもん。丁度お店の人手が足りなくなつた頃で、私から真更さんに蓮佐さんを誘うようにお願いしたし」

「なんでまた」

「同じ仕事してれば、少しは仲良くなつてくれるかなつて思つて」

「自分で修羅場の土台を作つてるよこの子は……」

「だから修羅場なんかじゃないっつたらー 別に私が真更さんや蓮佐さんと喧嘩したとかそういうことでもないんだから」

「じゃあなんなのよ。修羅場でないって言い張るんなら、今んとこさあちーが思つた通り、願つた通りの流れになつてゐるってことでしょ？ 友達や好きな人と一緒に仕事してて、まあちょっと長すぎる気はするけど逆事を急かしてないんなら、真更さんの逆事が保留なのも嫌うなあ

「読みなんでしょーがー」

「うん……そうなんだけど、ね」

千穂は俯いた。

「今度、一人先輩タルーがバイト辞めるの。就職活動だって言うんだけど、そのときふと思っちゃったの。私達のクラスにも、そろそろ受験意識は始めている子がいるでしょ？」

「そうね。勉強してる子も増えた気がするけど」

「その先輩が辞めることで、いつも見てた光景がほんの少し変わっちゃう。シフト表のコマが繁くなったとか、いつも同じ曜日に担当してた場所が変わるとか、そういう変化に気づいたときに、なんかわーわーってなっちゃったの。私、いつまでも今のままでいられないんだって気づいちゃったっていうか」

「今のままでって、どういう意味？」

首を傾げる千穂に、千穂は今日、ずっと考えていたことをゆつくりと言葉にする。

「高校三年生で、親の下で例え自由なく生きて、受験みたいな人生を左右する大きなイベントも無くして、学校に来ればかおや江村君や皆と授業に出てご飯食べて落着いて、バイトに行けば真央さんや遊佐さんや木崎さんがいて、真央さんのアパートには鈴乃さん、それに真央さんのお友達の高屋さんがいて漆原さんがいて……当たり前だと思ってたそういう環境がほんの一時のことではかないって、気づいた。実感が湧いたっていうか……そしたらさ」

「うん」

「私もいつか、コウタさんみたいに誰かの目の前からいなくなる目があるのかもしれないって思ったなら、急に、それまで全無気にならなかったことが、気になって気になって仕方なくなっちゃって」

「コウタって、その癖めろ先輩？」

「そう。まえっと、なか……中山平太郎さん、だったかな。昔は澤名で呼び合ってたから、本名がバツと出てこなくて」

「ああ、それはなんとなく分かる」

「それでね、それからもう、本当につまらないことばかり、頭の中ぐるぐるしてきて」

澤名呼びは、マダロナルド<sup>マダロナルド</sup> 雑貨<sup>雑貨</sup> 谷沢<sup>谷沢</sup> 商店のタルー間ではごく当たり前のことだ。

強制されているわけではないし、人によって別の澤名で呼んだり普通に名前を呼んだりとタースパイタースなのだが、千穂<sup>千穂</sup>に聞けば、東京以外の全てのタルーから「ちーちゃん」と呼ばれている。

「真美さん、私だけは澤名で呼ぶの。遠佐<sup>遠佐</sup>さんのことは真美<sup>真美</sup>って言って、お隣<sup>お隣</sup>の人は鈴乃<sup>鈴乃</sup>って言って。私だけ、ちーちゃん」

「うん」

澤名呼びが必ずしも軽んじる扱いになるかといえどそんなことはないし、真美からそう呼ば

れるようになったのは、彼と深く関わるよりずっと以前からだが、佳織はとりあえず何も言わずに頷いた。

「今だって仲が悪いって言い張るんだけど、昔よりずっと蓮佐さんに優しくしてるの。蓮佐さんのプライドが傷つかないようにわざとぶつかるばうな感じで」

「うんうん」

「真奥さんのアパートに集まる人達の中で私だけが実家暮らしの学生で、来年は受験もしなきゃいけない。どうしても皆と会える機会も減るし……それに……」

「それに？」

「……真奥さんと蓮佐さんの共通の知り合いが最近来て……二人を大きな仕事に誘ってるの」  
大きな仕事、とはもちろん、タイラが望むエンターテインメントの分野のことだが、さすがにそこまでは明かさない。

「あし、うんうん」

「今まで皆で一緒にいるのが日常で、そんな状態がいつまでも続くと思ってたんだけど、全然そんなことない、それどころか日常だと思ってることもものすごく短い期間しかないって気づいたときに、私、焦っちゃうて」

「うん、うん」

佳織は頷きながら、千穂の隣に並んでしゃがみ、千穂の背をさすってやる。

「もしかしたら、真奥さん達はどこかに行つちやうかもしれない。でも私はここを離れることはできない。真奥さん達と、私の居場所は元から違ふ。だから私……急に、答へが欲しくなつた」

「うん」

「本当に真奥さんと蓮佐さんに仲良くってはいしかなかったのに、真奥さんが蓮佐さんに世話を焼いてるのを見るのが辛くなった。とんなに頑張つても来年、今のうちに真奥さん達とは一緒にはいられない。今の日常が短かったみたいに、受験で忙しいのもたつた一年かもしれない。でも、もし真奥さん達がそのお仕事に行くことを決めたなら……それがどうなるのか、私には分からない。もしかしたら、何年も会えなくなるかもしれない。だから、自分の意志で一緒にいられる人が羨ましくて仕方ない」

「うん」

「でも……私、蓮佐さんのこと、大好きなの。なのにこんなくだらない、どうにもならないことでヤキモチ妬いて、駄何やつてるんだらうって、全部自分が望んだことなのに、頑張つても頑張つても……」

「うんっ」

佳織は、千穂の肩を抱き寄せた。

顔は見ない。それは礼儀だ。



「私、真央さんにとってなんなんだろうって」

それは、千穂が心のどこかで、常に抱えていた謎のような小さな小さな不安。

「いつも守られてばかりで、足引っ張ってばかりで、自分がかしたらもの凄く迷惑になってしまうのに、優しいからそれを表に出さないのかなとか、どんどん一人で悪い方悪い方に考えちゃって、もうぐちゃぐちゃで」

真央に想いを告げたとはいえ、一般的に言う「私と付き合ってください」とは違う。

ただ、純粋に一人の人として好きだと伝えただけなのだ。

だから、答えが欲しくても、どんな答えを自分が望んでいるかすら分からなくなる。

「正直よく分かんないけど……さあちーは本当にその人達が好きなんだね。私こそちよつと、妬けてくるよ」

「あ、ご、ごめん、そういうわけじゃ」

「分かっているよ。よそはよそ。うちほうち。私は真央さん達が知らないさあちーを沢山知ってるからね。で、とにかくさあちーは、ヤキモチ妬いた自分が許せないけど、許さなくなったら気持ちの整理はつかないし、結果ぶわーってなっちゃったってことか」

「うん……」

「酷い顔してるよ。ハンカチある？」

「……無い」

「はい、ティクシム」

「ありがとう……」

いつの間にかまた涙を流し、鼻水まで出ていた。

「……しかも、それを鈴乃さんにぶちまけちゃったの」

「うわあ、そりややっちゃったね。鈴乃さんって、真実さんちの隣の人だったっけ？」

「うん、御中で会って、何かそのときも今みたいに全盛ダメで、気がついたら駅のエキセントリックなボールで蹴められてた。今から思えばさっさと鈴乃さん、すっごく困ってたけど、最後まで聞いてくれた」

だが、鈴乃は千穂の痛みを理解はしても、答えばくれなかった。

しきりに、真実は全く気が利かない、千穂に甘えすぎているのだと怒ってくれたが、近い将来真実と道が分かれてしまうという不安に関しては、ケアのしようがなかったのだらう。

「なるほどねー。好きな人から答えはもらえず、大切な友達にヤキモチ妬いた上に、世話になつてる人にダチりまくったってことか。そりや自己嫌悪するのも仕方ないわ」

「……でね、今日のこんな感じなの」

「はいはいまあ、なんとなく分かったよ。カレーとうどん以外のことはね」

後編はしきりに頷き、そして尋ねた。

「どうする？ 私何か思ったこと言った方がいい？」

「……何かあれば、お願いします」

千穂にしてみれば鈴乃に就いて仲蔵にまでこんなみづともなく頼つてしまつて、もう自分で自分が全く分からない状態である。

「うん、じゃあ言うけどさ、ささちーはもうちょつとワガママになるべき」

「どういうこと？」

「そのまんまの意味よ。真奥さんの駒倉頼んでさ、告白の答え寄越せー！ 恵佐さんに優しくしてんのが気に食わないんだー！ つて言っちゃえば？」

だが、仲蔵から飛び出た答えは、非常に刺激的なもので千穂は仰天してしまふ。

「え、ええ？ そんなことできるわけないじゃんー」

「なんで」

「なんでって、それは……」

なんでだろう。なんでそれをできないのだろう。やっではいけない？ どうして？

「やったことは無いでしょ？」

「そ、それは無いけど」

「別に無理に恵佐さんとの間に流風立てろつていうんじゃないでさ、そこまで仲良いんだつたらさういう自分の気持ち、ちゃんと話すべきだと思ふな。付き合いたいとか、来年一年こいう状況だけでもできるだけ長いこと一緒にいたいって言えばいいじゃん。他に解決の方法、無い

と思うけど」

「そ……うかな」

「今の話を聞いた私の素直な感想ね。あとさ、蓮佐さんがどんだけ大切な友達か知らないけど、好きな人が別の子に優しくしてればイラついてきて当然じゃん。普通のことだよ。それにヤキモチ妬いたことを蓮佐さん本人に知られたわけでもないのにそこまで落ち込んでるのは、はっきり言っただけかなりウザい」

「あう……」

刺戟的な上に、容赦が無い。

千穂は自分でも薄々そうじゃないかと思っていたところを全力で言かれて、撃沈した。

「自分だけいい子ちゃんでいたいみたいにも見えるからね、そういうの。ヤキモチは妬くけど友達に友達、それでいいじゃん。それで仲悪くなるようならそれまでの関係ってことだし」

この意見は、鈴乃からは出てこなかった。容赦の無い意見だが、仲間に言われると一言も言い返せない。

同年代の意見として、至極納得できる意見だからだ。

「一回当たれたんなら、次当たって砕けるのも怖くないでしょ。第一鈴乃さんって人がそうやって怒ってくれたんなら、それを味方にしない手は無いんじゃない。やっぱ当事者保留のまま随分月ってのは長いよ」

「う、うん……」

「って、まあそれは部外者の私だから気楽に言えるんだろうけどね。最終的に決めるのはさちちーなんだしき」

「……うん、ありがとう。ごめんね、なんだかとりとめなくて」

「ときとめあつても困るよ、私は恋愛経験ないんだから、付き合ってる男が浮気しててなんて話だったらとつと逃げてたよ。それに、まあすぐには言わないけど、決着ついたら報告義務を怠らないでよね」

「は、はい……」

佳織の本気を見て、千穂は最低でもあと一回は佳織に恥ずかしいところを見せてしまうことを覚悟した。

「あと……」

さらに佳織は、スカートの裾を払いながら立ち上がりとおもむろに校舎の方を見る。

千穂は佳織の先を追うと、そこには校舎に取りつけられた時計が。

「あっ！」

千穂は佳織の意図に気づく。時計の針は無類にも昼休み終了五分前を指していた。

「お昼食べらんなかった件については、後ほどご相談ね」

「え、えっと、その、今度お財布持ってきたときに」

気持ちを引き出した途端に急に頭を白覺しても時すでに遅し。

千穂はその後の五、六時間目を、必死で空腹に耐えねばならなかった。

「ああ……お腹空いた……」

千穂は帰宅すると、自室のベッドに崩れ落ちた。

六時間目と講話のわずかな合間に、佳織にお金を借りて学校近くのコンビニでパンを購入したものの、日頃からよく食べる千穂に惣菜パンの一個などなんの足しにもならない。

結局話も、佳織に榮城をかけたことでそれまでとは違う意味で気持ちが混乱し、射影は乱れるわ矢は折るわついでに腹の音を後輩達に聞かれるわと数々だった。

後輩達は非難強しくも殺気とし、整った射影を見せる千穂の不調を心配してくれたが、怒濤をこじらせた夢句に昼食を食べ咽ねただけとは言えるはずもない。

それでも結局心配する義母や後輩達を佳織がいなしでくれた。おまけにおやつ代まで借りてしまった千穂、千穂は当然佳織には頭が上がりそうになかった。

「あ、そうだ、携帯」

充電コードを挿しっぱなしにしたまま登録してしまった携帯電話は、電話とメールが着信していることを伝えている。

「あれ？ お母さん？」

母、早寝から、学校が終わった場合に何件もの着信が入っている。

帰宅したときには姿が見えなかったが、夕方家にいない用事でもあるのだろうか。

指し返して覚悟すると、ワンコールで、

「ちよっと千鶴何回もかけたのにどうして出ないのよ」

と大声が飛び出してきた。

「ごめん、家に携帯忘れちゃって、今日持ち歩いてなかったの」

「なんだそうなの。じゃあ今はもう家なのね？」

「うん」

「そっか。実は学生時代の友達が入院して、今近くに住んでる友達で集まって皆でお見舞い行

くことになったのよ」

「そうなんだ。入院って、大変な感じ？」

「気の毒に交通事故で骨折って話よ。命に關わるようなことじゃないんだけど、友達が近くに

いるのに行かないのも不人情でしょ。今日くらいしか都合が合う日無いから急遽決まって今

新宿にいるの。あんたが入院したことは別の病院だけど」

「分かった。じゃあ晩ご飯は適当にするね」

「そうしてくれる？ お父さんも今日は仕事で帰ってこないし」

「お母さんは？ お友達と食べるの？」

「お見舞いの後にお酒も無いけど、そのつもり。そんなに遅くならないうちに帰るつもりよ。皆仕事あるしね。それじゃそういうことで、よろしく」

「うん、分かった。気をつけてね……どうしよ」

電話を切ってから、千鶴は枕に顔を埋めて号え込む。

電話終わりでお腹は死ぬほど減っていたが、夕食のことを考えるとお腹に入れるわけにはいかないと思つて、信紙や義母がおこつてくれるという焼りのお茶を断つて帰ってきたのだ。

それなのに、母は不在で夕食も自炊。

食ベに行くにしろ、コンビニで何か買うにしろ、氣力を振り絞つて出かけなければならないが、かといつて今日は、自分で何か作ろうという氣にもなれなかった。

料理をしていると、どうしてもまたぐるぐるしてきてしまう氣がしたのだ。

「どーしよ……あれ？」

とりとめもなく携帯電話をいじっていると、着信していたメールの中に、意外な名を発見する。

十七時頃に着信しているそのメールは、13アイスタリウムとマダロナルドのクーポン付宣伝メールに挟まれていた。

「珍しい。どうしたんだろ」



千穂は文庫に目を凝してから、すぐに電話をかける。

それは、鈴木梨香から晩ご飯のお誘いメールだったのだ。

十八時を少し回り、帰宅ラッシュが始まっている笹塚駅の改札口で所在をさげに立っている梨香を発見した。

「あ、いたいた。鈴木さん！」

「おー、千穂ちゃんどうも。こんな時間にいきなり呼び出してごめんね」

駆け寄った千穂は、梨香が普段のカジュアルな服装ではなく、しっかりお洒落（しやうらつ）をしていることに気づいた。

「おうちの人、大丈夫？」

「はい、今日丁度調養留守にしていたんで。鈴木さん、どこかお出かけの帰りですか？」

「まーそんなとこ」

梨香は少しだけ、ほやけた答えを返してきた。

「それで、メールでも言ったけど、晩ご飯ちょっと付き合ってもらえないかな」

「ええ、それはいいんですけど」

千穂は匿名された理由を語りかねていた。

「聖香とは最近になつてそれなりに仲良くなつたが、聖香が二人で何か食べようと言うなら、まず聖香ではないのだろうか。」

「なんとなくそう思つてると、千穂のその思いを先回りしたように聖香が言った。」

「今日はね、ちよつと東横じゃなくて千穂ちゃんに会いたかつたの。」

「そうなんですか？」

「会いたいと言われて悪い気はしないが、不思議な違和感があることに変わりはない。」

「聖香の纏つている雰囲気、いつもと違うのだ。」

「ガブリエルやエンテ・イスラ東大陸騎士団に襲われたときにも、快えてはいたが根っこにある明るさは失わなかつた聖香の表情に、奇妙な陰りのようなものが見える気がする。」

「まあ、まずはお店決めよう。とはいふ千穂ちゃん連れてお洒落な店に入るわけにはいかないからファミレスとかになつちやうけど、いい？」

「ええ、それはどこでもいいんですけど。」

「じゃ、行こうか。と、言つたものの私この辺のお店はよく分らないから、どこか行きたいところか美味いところあるかな？」

「えつと、そうですね。」

「こういうとき、聖香のような心はどういうお店で食事をするのだろうか。」

「なんとなく自分のセンスを試されているような気がして、千穂は真剣に腕を組む。」

梨香がなんの理由もなく、お洒落して自分に会いに来るとは考えにくい。

もしかしたら恵美や真央達について、二人だけで話したいことがあるのかもしれない。

ゆっくり話ができそうで、千穂の年輪的に十八時以降入店して間違なく、かつご飯が食べられる所。

そして重要なことが一つ。色々な事情が重なって千穂は今、かつてないほどに空寂なのだ。

「そうだ！」

「お、どっかいいところある？」

「はい、ちよつと歩きますけど、いいですか」

「いいよ、行こうか」

常盤駅から歩いて十分弱。梨香が学校のことについてなんとなく質問し、千穂がなんとなく答えるというとりとめのない会話をしながら走り着いたのは、一星白内が売りの回転寿司チェーン「魚々苑」であった。

「おー、なかなかのチヨイスだねえ。いいじゃん」

梨香の表情から見ても、悪くない選択だったようだ。

「よく来るの？ 名前を知ってたけど入ったことは無いんだ。私の活動範囲に無くてさ」

「私も高いお寿司を食べたことがあるわけじゃありませんけど、でも、美味しいのは間違いないと思います」

「ほう」

「しばらく来てなかったんですけど、最近なんだか高級ホテルメニューもあるって広告で読んだ気がして、いい機会かなって思つて」

「あー、なんか一皿百円で勝負してたメニューがちゃんとしたのを二百円で出したり、寿司屋なのにラーメン出したりとか、色々やってるよね」

「ラーメンがあるかどうかは分かりませんが」

千穂は苦笑しながら店の扉を開く。

幸い夕食時のラッシュには差き込まれなかったようで、二人でテーブル席に座ることができた。

「でも、それなりに期待はできるはずですよ。だって」

千穂はお手拭で手を拭いながら言った。

「日本に初めて来たときのエメラダさんは、美味しい美味しいうて言いながら一人で三十皿近く食べてましたから」

「……へー、あの小柄なエメラダちゃんがねえ」

型番は一回だけ意外そうな顔をするが、自分もお手拭で手を拭くと、ぐつたりとソファの背もたれに身を預けた。

「あー、疲れた、参った。はー」

「どこか遠くにお出かけだったんですか？」

「いや、すぐそこ。めっちゃ近く」

千穂が淹れた粉末緑茶の湯呑を受け取りながら、梨香は咬る。

「新着で芦屋さんとデートしてきた」

「へえー、芦屋さんとデ………あっついり!!」

梨香の発言を理解するのに数瞬を要し、千穂は自分の湯呑に注いでいた熱湯を少しこぼしてしまった。

「ちよっと大丈夫？ 火傷してない？」

「い、いえ、大丈夫ですけど、大丈夫ですけど、え、ええ!? 鈴木さん、芦屋さんとデートつ

て、え……ええええ!?」

「千穂ちゃん驚きすぎ。おねーさんだって大人の女ですから、デートくらいしますよ」

「いやそのさういうことじゃなくて、そこに驚いてるんじゃないかって、あ、あ、あの芦屋さんが、で、で、デートですか!?」

『芦屋』と『デート』は『津原』と『勤労奉仕』くらい結びつきにくい組み合わせだろう。

驚きすぎて、千穂はしばし言葉を失ってしよう。

「意外？」

「……正直言って、すっごく意外です」

「そんなに？」

「あ、いえ、その、鈴木さんに魅力が無いとかそういうことでは決してないんですけど、青屋さんがスーパーと図書館と信販のお仕事と真央さん格みの問題以外の用事で外出した話を聞いたことが無くて」

「そっちなかい」

真央は身を起こして苦笑する。

「青屋さんとお出かけするの、別に初めてじゃないよ。前は真央さんと鈴木ちゃんと一緒にたけど、真央さんのテレビ、私と一緒に買いに行っただよ」

「え、いやでも、それとは話が違いますよね？ だって、で、でーとってつまり」

「うん、二人で」

「わあー」

様々な驚きがないまぜになった結果、千穂の口から飛び出たのはそんな間接的な声だった。

「いや、でも逆に千穂ちゃんその反応、ありがたいわ」

「え？ あ、こ、ごめんなさい私今凄く失礼なこと……」

「いーのいーの。ってか今はどっちかつーと私より青屋さんに謝る場面だぜ。家ではどうなのかは知らないけど、外ではきちんとしてる人なんだよ」

「そ、それは……知ってますけど」

「でもよ、千穂ちゃんがそういう反応するってことは、傷れてはいなかったってことだね」  
 「な、例がですか？」

「真美さんや鈴乃ちゃんから、何も聞いてないんでしょ？」

「真美さんと鈴乃さんからよ。今日のデートのことですか？」

「ううん、そうじゃないの。まあデートとはいうけど、前に鈴乃ちゃんと一緒にテレビ買いに行ったときとそんなに変わらなくてさ。戸部さん、連に今日携帯電話買ったよ。しかもスリムフォン。私はそのアドバイサー」

「戸部さんが携帯電話をつ？」

明日は地球の自転が逆回転になるのではないか。

千穂は驚きすぎてまたお茶をこぼしそうになってしまった。

「前から必要性は感じてたみたいで、テレビ買ったときにまたアドバイスするって約束はしてたんだけど、色々あつて延び延びになっちゃってさ」

「色々……種かに色々ありましたもんね」

「でしょ？」

真美がテレビを購入してから今に至るまでの間、千穂は法術を心得たり命の危機に瀕したりしたし、梨香は「世界」や「人間」の概念を根底から覆されているのだ。

「あとはエンターテインメントのトラブルのお話びやら、トラブルんときに中絶手術になってた

説明をきちんとしたいとか、そういうことでね。私もお請いに乗ったのよ」

「そういうことだったんですか」

「まあ、千穂ちゃんや恵美に聞いた話と大体合ってたんだけどね。でも、悪魔側から見た視点ってのは少し新鮮だったかな。どこの地域の騎士団が強かったとか、恵美やエミラダちゃんには少々苦しめられたって話になったときにはどうしようかと思つたけど」

「分かります。私も悪魔の人間がエンデ・イスラに攻め入る前の話、聞いたことがあります。あんまり面白がっちゃうと遠征さんとか鈴乃さんには申し訳ないですけどね」

「ねー。恵美は色々気にしないでいいとは言うけど、当事者じゃない分反論に迷うよね」

「梨香は微笑むと、一つ大きなため息を吐いて、右の頬をぐるぐると回した。」

「あー、まだちょつとしんどいな。はあ」

しつこい肩こりでもほぐすような動きをしてから、梨香はまた大きくため息。

「どうしたんですか？」

「ん、まあお出かけの最中に色々ありました」

「梨香は今度は首を回しながら、大きく深呼吸をする。」

「鈴木さん？ 大丈夫ですか？」

「大分元に戻ってきたかな……あ、うん。それでね、別れたのはついさっきなんだけど」

「駅では物憂げな顔のようなものと思つたが、こうして明るい店内で差し向かいになると、本



當に顔色が優れないようだ。

まるで病み上がりのように、肌が赤みを欠いている。

樂香の体調が心配になる千穂だったが、樂香の口から放たれた言葉は、千穂の全ての思案を一瞬で止めた。

「告白して、見事に玉砕したんだ」

思案も、店內の喧騒も、千穂の感覚から消えた。

何げないことのように言った樂香のフラットな表情だけが、視界にこびりつく。

「な……ん」

「なかなかしんどいものがあったよ」

絶句する千穂に、樂香はただ微笑んでみせる。

「よ、お腹空いたままする話じゃないし、食べながら話そう」

そしてごく自然に寿司のレーンに視線を移すが、千穂は動けなかった。

もはや自分の空腹のことなど、千穂の脳内からは吹き飛んでいた。

## 終

気合いを入れすぎただろうか。

「R新堀駅西口改札で高屋を待つ乗客は、自分の服装をもう一度チェックする。

「……うん、大丈夫」

今回、いくら二人きりだといってもシートなどという浮ついたものとは程遠い話が展開されるのは、想像に難くなかった。

お詫びと説明と携帯電話購入のアドバイス、という全く色気もへったくれもないワードでなんとか逃る姿勢を抑えようとする。

ページュのトレンチコートにワンピース。お洒かけ用のハンドバッグと、書袋はつけない細いゴールドチェーンのペンダント。

うん、普救会社に行くときより、少しだけ豪華になった程度だ。

「そ、それに高屋さんはきつといつもの高屋さんだし、むしろ私が先に立つくらい気分ではないとね」

思えば高屋と一対一になるのは彼がガブリエルによって連れ去られたとき以来だ。

寒い季節になって、重ね着が必要な時期に、高屋が服装にお金をかけていると思うほど豪華も夢見る少女ではない。

だから、

「お待たせしました、鈴木さん」

心地良い声に、それでもかすかなときめきを覚えて顔を上げた乗客の心臓は、

「あ、ああ、あああ、え？」

校舎に飛び込んできた光景にとんでもない勢いで跳ね上がった。

「寒い中待たせて申し訳ありません。普段着ない物を着たので、出かける準備に手配取ってしまってます」

「あ、いや、その、全然今来たところだから、いいんだけど、けど……」

「どうされました？」

「い、いや、その、あの」

声屋がただ首を傾けただけで、また聖香の心臓の鼓動が加速する。

聖香は今日この場に集まるまでに、自分を落ち着かせる意味も含めて心の中で立てていたいいくつかのシミュレーションが、一瞬で砕け散るのを感じた。

こんな事態は、正直全く想定していなかったのだ。

「まさか……まさかスーツで来るとは、思わなくて」

声屋が、チャコールグレーのタイトなスリーピーススーツを纏っているのだ。

「ああ、これですか」

声屋は苦笑する。

「買ったのは随分前ですが、着るのはこれで二度目か三度目です」

すっかり細の効いたワイシャツに真新しい革靴、ストライプのネクタイもしっかり纏まって

いる。

手に持った上着はどうやらユニシロのスベンヤルライトダウンと見えるが、それ以外はどこからどう見ても、長身と体格も相まって紳士服のモデルとも見紛うばかりの出で立ちだ。

髪香は心臓の鼓動が収まらず、頻も上気していくのをはつきりと感じた。

こんなのは反則だ、不意打ちにも我がある。

「何せ着慣れていけませんのでネクタイの結び方も忘れてしまっていて、いやはやお恥ずかしい。おかしいところが無ければいいのですが」

「おかしくなんかないー、凄く結構いい！」

髪香は反射的に、そう叫んでいた。

「む、むしろ私こそ、なんか全然ちやんとしてなくて、ごめん」

先ほどは気合を入れすぎなかつたことに安心していたのに、今は急激に後悔が襲ってきた。

こんなことなら、もっともっと気合を入れてお洒落してくるんだった。

コートは出陣のときも時々着ることのある普段使いの半手前ものだし、今履いている靴を買ったのは何時のことだったか悪い面でない。

ハンドバッグはお気に入りのものであるが、ボタットのフラップに二ヶ所、小さい傷があるのだ。

「いいえ、そんなことはありませんよ」

声屋は穏やかな笑顔で首を横に振った。

「鈴木さんにとっては恐ろしいことの連続でしたでしょうし、きっと腫られてしまうだろうと思っていたんです。今日はご一緒していただいて感謝しています。ちゃんとしてないなんてことはありません。お綺麗ですよ」

「……」

梨香の思考は、早くも臨界を突破しつつあった。

脅威なら、お綺麗です、なんて声の得くようなお世辞に乗せられるような梨香ではない。

だが、声屋の言葉には一切の違和感が感じられない。

本当に、綺麗だと思ってもらえているのだ。

「あ、ありがとうございます」

となればもう、素直にそう言うしか道は残されていないのだ。

「それでは、どうしましょうか。先に色々お話ししたいこともありますが、鈴木さんがよろしければこのままどこか食事のできる店に入ろうかと思っております」

「あ、あーその、ええっと、はい、お願いします」

不意打ちによるクラティカルヒットで完全にブランクを打ち砕かれた梨香は、声屋の言うことにただただ素直に頷く。

「では、いくつか候補を絞ってきたのですが」

言いながら声屋は、内ポケットから折りたたまれた紙を取り出した。

一方の聖香は、内ポケットに手を入れて物を取り出す、という仕草を見ただけで顔面にとさめきが加濃してしまっている。

「地下道を行った先にある唐焼きビザが美味しいというイタリアンか、ルミナにあるランチタイムはおばんさいが食べ放題の創作和食の店……あとは、駅から少し歩きますが、ビーフストロガノフが美味しいロシア料理のお店がある……」

「あ、そこ諸店しちゃった」

突然直知の情報が入ってきて、聖香はわずかだが冷静さを取り戻し反応することができた。

「え？　そうでしたか。サイトの情報が吉かったかな」

どうやら声屋は、グルメサイトで予め情報を集め地図をプリントアウトしてきたようだ。

声屋自身はデジタルデバイスには弱いと言うから、導線あたりにやってもらったのだろうか。

「そのロシア料理屋さん、私も好きだったんだけど、ほんとついこの前閉まっちゃったんだ。ちなみに後から入ったバスタ屋さんはおすすめできかない」

「そうか。考えてみれば鈴木さんのお勤めは新宿なんですよ。へそじのお店は多いでしょうから、私が悪い検索で選んだものより、鈴木さんがお好きな店の方に行きましようか」

「え、あつ……その」

ほんの一瞬だけ、頭の中で以前真実や鈴乃とも一緒に入ったまんまるうどんが未来したが、

梨香は首を横に振って言った。

「そ、そのおばんざいのお店がいい！」

「よろしいのですか？」

「う、うん。ほら、イタリアンもいいけど、吉屋さん、スーパにソースとか売れたらマシじゃない？ 私のおばんざいのお店行ったことないから、そこが……」

梨香はもじもじとパンダの取っ手を両手でいじりながら言った。

「吉屋さんが選んでくれたお店が、いい、です」

まるで十代の少女に戻ってしまっただけのような、心地良いもどかしさが梨香の心を襲う。

「そうですか、分かりました。じゃあ参りましょうか」

「う、うん！」

吉屋は和装わらわすなんの街いもなく鎮くと、梨香を促して歩きはじめた。

西口からルミナまでは、京土線改札口そばの地下モールを抜け、すぐ左折の階段を少し上るのが一番早い。

お昼時とあってやや混雑気味の新宿駅構内を歩く間、梨香は吉屋が、歩く速度をさりげなく自分の歩調に合わせるでくれているのに気づいた。

梨香はレコーウィンドウのガラスや店舗ディスプレイの鏡に映る自分と吉屋の姿が目に入る度に甘い痺りに襲われる。

そこに映る姿は、ごく当たり前日本の男女の姿だった。

同じ会社に勤める同僚。久しぶりに会う友人。或いは、デートを楽しむ恋人同士。

全ての真実を知り、常識外れの恐怖を体験して尚ほ振るがなかった想いを梨香は再確認する。

私は今、間違いないで声屋さんに心感悪している。

ただ、どうしても、ほんの少し先にある声屋の手を握ることだけは、できなかった。

お昼時のため、少しの時間待機列の椅子に腰かけて触れ合いそうな肩にどぎまぎしたり、いさぐさに案内された通路、スリッパの上着を脱いでスリーピースのベスト姿になった声屋にまたときめいたりときめく感情が揺れ動く梨香は、早くも少し疲れはじめていた。

このままでは、買ひ物で冷静な判断ができなくなるのではないか。

そう思った直後のことだった。

「ふうむ……」

オーダーを済ませたはずの声屋が、メニュー表と真列に睨み合っているのだ。

「……あ」

梨香は何げなく眺めていたメニュー表の値段に首なし、眉を上げる。

全てのランチメニューが軒並み千円越え。最も高いものでは千八百円というものである。



正直、梨香にとってもラシチとしてはかなり高いと感ずる類だ。

もともと吉屋の機微が難しいことは十分承知している梨香である。

「あ、吉屋さん、大丈夫？」

吉屋も自分でこの店を調べて来たからには、値段は織り込み済みなのだろう。

とはいえテレビを買ったときのことを思い出すと、無理をしているのではないかとも思えてしまう。

誘ってくれた男性のプライドの問題もあるから、金銭的な無理をしなくても良いということをして、軽便に伝えようか梨香が一瞬悩んでいると、

「いえ、実は」

吉屋はメニュー表から顔を上げずに首を横に振り、妙なことを言い出した。

「自宅でキンメの煮つけ定食をこの値段で作ることができるかどうか考えていたのです」

「え？ 自宅で？」

「はい。この千二百円とは一食の値段としては高いようにも思えますが、これを自宅で作る場合、費用を抑えることは意外と難しいな、と思ひまして」

「そ、そうなの？」

「はい」

吉屋はメニュー表をたたむと、真剣な顔で頷いた。

「まず金日朝<sup>きんじつてい</sup>そのものが安くはないのです。最近では焦<sup>あせ</sup>の値段も上がっていますしね、仮に切り身が一切れ三百円と假定しますが」

「はあ」

「こういう店は一人一人違うものを注文するのが当たり前です。しかし家庭では設備面や手回りの問題もありますからそういうわけにはいきません。我が家は三人暮らしですから切り身三切れ九百円。他に小鉢や味噌汁がつく上におばんざいが食<sup>く</sup>へ放題。その上、米もおかわり自由のようですね。男三人の家庭で同じことをしてしまつては、あつという割に米も尽きます。しかもお店は毎日一定数のキンメの煮つけが出るでしょうが、家庭では毎日同じものを食<sup>く</sup>べるわけにもいきません。そうすると、一食分のキンメの煮つけのためにかかる費用や手間というのは在外に大きい。だから千二百円は意外に安い値段なんだと、ふと思つたんです」

「なるほどね、そういうこと考えたこと無かつたけど」

最初は暖然<sup>だんだん</sup>としていた梨香だが、段々梨香の知<sup>し</sup>っている晋段<sup>しんたん</sup>の声<sup>こゑ</sup>の顔が見えてきて、少しずつ緊張がほぐれてくる。

「あ、それと、晋段は何かとクチが慣<sup>な</sup>れぬの意ですが、今日は折角鈴木<sup>さとう</sup>さんがわざわざ二階<sup>にがい</sup>してくださっているのですから、そういうことは抜きでいきますのでご安心ください。こういうときのためにこそ、晋段の優待<sup>うたい</sup>があるのです」

「うん、分かつた。とはいえ、真実<sup>まこと</sup>さんに怒<sup>いか</sup>られない程度にね」

最初から、梨香の心配など、梨香も良いところだったのだ。

「心します。さて……どうしましょう、どこからお話すればいいか……」

「あんまり改まらないで、藤原さんが来てからのこととかエンテ・イスラのこととか、一応色々聞いてるから、そうだな。さらわれた後、芦屋さんに何があったのを知りたいかな」

「あの後のことですか。そういえば佐々木さんから、しばらく体調を崩されたと聞きましたが、その後は大丈夫でしたか？」

「根が楽天家だからね。千穂ちゃんや大黒さんも色々気を使ってくれたし、本当のこと知った後でも芦屋さんとうとうしてお出かけしてるってことで是非お察しくださいな」

「そうでしたか。いや、あの後カプリエルや鎮守中の書生を問いつめても鈴木さんのことを言わなかったものですから、本当に心配でした。実は……」

真実がエンテ・イスラに因われた事件に関係し、同じようにカプリエルに連れ去られた後のことを芦屋は述懐する。

梨香はそれを、穏やかな笑顔で聞いていた。

話の内容そのものはハードに過ぎたところもあるが、結果的に梨香の大切な人は全員無事であったわけだし、芦屋がその時点で極み切れていなかったことも事実の壁が持っている情懷で解明に近づく期待が持てている。

「大変だけど、皆それぞれ、一歩ずつ先に進んでるんだね」

「魔王軍健在の頃は、予想だにしませんでした」

「私だって、つい一年前まではそんな話を大戦国目だいせんこくめに聞くことになるなんて予想もしてなかったよ」

やがてそれぞれ注文した物が運ばれてくると、話題は真理の話や真屋の日常の生活の話、聖香の生活や聖美がいなくなった後の戦場の話など、とりとめのない会話で盛り上がった。

聖美や同僚の南水良平など、一躍に巨敵を食べて楽しい友達は沢山いるが、このランチタイムの集まりは、全く別の性質を持っていた。

真屋は話題の運びがうまく、聞き上手だった。

真美や真原、聖美との戦いや過去の魔王軍のことになると談話になるところも、なんだか面白いくらい。

「とにかく、魔王の問題もありますので、極力過剰情報は抑える必要があります」

魔王の使い込み癖まで考慮に入れて賣い物を計画するものいつもの真屋だ。

魔王軍らしからぬスーツの秘密も、話の中で輪解かれた。

日本に来てから真美がマダロナルドに入る少し前のこと。

将来スーツを着る仕事に就く可能性を考慮し、紳士服専門店の一着目千円セールで真美と真屋がそれぞれ一着ずつ購入したものだという。

結局真美も真屋もスーツを着るような仕事をしなかったため、普段は押し入れの奥に防虫剤

と共に仕舞いこまれてゐるらしい。

冠婚葬祭に備へた黒ネクタイや白ネクタイも賞備されてゐるという話も、余談で付け加へられた。

「店側の都合とはいへ、私の方が体格が大きかつたため合うスーツが限られてしまい、結果的に魔王様が千円のスーツをお召しにならざるを得なかつたことが、今でも悔やまれます」

「仕方ないよそれは。ああいうのって高い方プラス千円とかだし、実際の値段は二万とか三万はするでしょ、スーツなら」

「畢竟このスーツ以来かもしれません、自分のために大きな買い物をするのは」

「それなら高のことしつかり選ばないとね。それで、なんとなく自分なりに機嫌とか会社とか部屋をつけていたりするの？」

「いや、恥ずかしながら皆目……」

「そっか。実は前にテレビ買ったときから少しして、各社とも料金プラン変わつてゐるんだ。声屋さんが携帯電話を持つにあたつて一番使いそうな機能って……」

食事を終えて、聖香もさすがに声屋の様子に慣れ、バツダからメソとベンを取り出すと仕事モードに入る。

そして、声屋から聞き取れた情報を総合し、聖香が出した結論は、

「とにかく安く上げない。いであ、りんくんとやらは通信機嫌が搭載されていれば活用できる。

従って機種は選ばない。主な用途は通話で長電話しない。メールをやとりする可能性のある人は、あのアパートの関係者のみ。大都市圏から動く予定もない。ゲームや音楽なんかをダウンロードしたりはしない。でもネットは結構活用するかも。以上で間違いは無い？」

「はい」

「おっけー分かった。まーこれだけ聞いちやうと、真央さんが携帯電話を買い換えようってなったときに真央も一言言ってやれば良かったのにつて気がするけど……まあそのことは私もよく分からないし、真央さんは今のキヤリアをかなり長く活用してるっぽいし、他にも理由があつてカラダリーの機種を選んだんだらうから仕方ないか」

梨香はメモ帳を何度も見直して言った。

「真央さん、一括払いでどれくらい出せる？」

「一括払いで、ですか？」

真央は戸惑ったように答えた。

「そうですね。全てを丸々吐き出せば五万円くらいならなんとか……ですがこういうものは多くの場合、分割払いをすると聞いたことがあるのですか」

「確かに今は機種代が滅茶苦茶高いからね。月々の料金に分割購入のお金を上乗せして払っていく人が多いけど、それだと結局どうしても、月に最低六千円は出てく計算になるわ」

「月六千……ですか」

言葉は決して顔をする。

「魔王様の携帯電話料金が月額四千円いくかいかないかといったところでしたので、それくらいかと勘定していたのですが……」

「それがいつのことなのか知らないけど、整美が機種代を一括で全額払ったなら当然分割払いのお金は乗ってないでしょ？ ガラケーなら大容量データのやりとりとかも無いからそんなものだよ。でも仮に五万円の機種を二十四ヶ月分割で買う場合、どんぶり勘定で月に二千元ちょっと。西屋さんの場合新規加入だから月々の総額利用割引きも無いし、真美さん連とは家族ってわけじゃないから共有プランも使えないとなると、色々抑えたとしても月六千円は実ばかり甘い見込み。運用機種や使い方次第じゃもう少し上がっちゃうと思う」

「ううむ……」

「でね、聞いたのよ。一括で機種代を払う気はあるかって」

「はい？」

「ざっくり言っちゃうとね、電話を一括購入すれば月の通信費を三千円以下に抑える方法があるの。まだあんまり一般的じゃないんだけど」

「一般的でないとは、何か難しい電子機器の操作が必要ということですか？」

「ううん。その契約の仕方が日本じゃまた一般的じゃないってだけの話。あとスリムフォンだからこってとところもあるからそういう意味では難しい人には難しい。あとやっぱ一括購入の

壁は高いし、キヤリアメーブルを使えなくなっちゃうから、長く携帯を使ってる人ほどそっちに移るのが面倒だったりのはある。その点西原さんは、機種代もタリヤしちやえばすぐにでも使えるようになるよ」

「よく分かりませんが、それは例えば、社員である鈴木さんだから便宜が図れるとか、そういう話ですか」

「そんなんじゃないよ。私は正社員じゃないし、やろうと思えば誰でもやれるし、お金が安いからって提供される機能やサービスの質が極端に低いとかいうことも無いよ」

「それなのに、一般的ではないのは何故なのですか？」

西原は首を傾げる。

「大々的に告知されてないとか、日本の通信産業の歴史が海外に比べて特殊とか、そもそも日本でそれを利用できるようになったのがごくごく最近で普及はまだまだこれからだったりとか原因は様々あるけど、西原さんが気にするようなことは何も無いと思う。あとは電話本体を一括購入する気があるかどうかだけ。一括購入が難しいようなら、なんとか使い方を制限するのとで料金抑えめのプランにすることもできるかもしれないけど……」

「いえ、実計への負担が低いことこそ魔王城の正義です。月額がそこまで安くなって、鈴木さんが問題ないと思うのなら、採用しない理由はありません」

「分かった。じゃあお願大丈夫なら、まずはドコモの携帯売つてるところに行こう」



「やはりドコデモの契約形態なのですか？」

梨香は通商技術に疎い吉屋にどう伝えるか一瞬考へてから、

「秘密には違ひうんだけれど大きな目で見ればそうと言えなくもないというか……SIMフリーって聞いたことない？」

「しむふりー？」

「まあ、通ずから話すよ。じゃあそろそろ……」

梨香は席を立ちながら、日頃の癖でテーブルの隅にあつた伝票を取ろうとして、

「あ、ここは私が」

さつと伝票を攫おうとした吉屋と、手を重ねてしまった。

「え？ あき で、でも？」

「今日は私からお詫びのためにお願いしたのですし、それにこれからまたご助力いただくのです。持たせてください」

「……は、はい……」

折角様格電話のことで取り戻していたはずの平常心が、また一気に失われてしまい、梨香は素直に手を引いた。

吉屋は満足げに頷くと、スリープの上着を羽織り伝票を手にはぐへと向かう。

その後ろ姿を見ながら梨香は、大きく、少しがサついた男の手の甲の感触を抱きしめるよう

に、胸の前で直屋に触れた右手を強く握ったのだった。

「ああ、もう随分暗くなってきましたねえ」

「まだ五時なのね」

電話店を出たときには、十七時を回ろうとしていた。

一度決断すると早い直屋は、型落ちのドコモのスリムフォンを整番の物めに従ってSIMカードのロックを解除した状態で一括購入。

その場で電話店が代理店となって販売する通信会社と回線契約をし、無事ドコモのSIMフリースリムフォンを持つことに成功した。

だが、ここからが長かった。

電気製品といえば白物家電と電卓とテレビ以外はろくに触れたことのない直屋が突然スリムフォンを持ったのだ。

ショップの店員に、詳しい使い方が分からなくなったときにはP.D.Dの説明書をダウンロードしていただき、と言われたときに直屋は顔色を失った。

それを見た整番は、このままでは直屋が折角買った電話を使わなくなってしまうと判断し、四座に電話店上座のカフェへと引っぱり込んで、電機を入れるところからレタチャイを始めた

のだ。

そのレクチャーの過程で電話帳登録番号の先頭に、製番の名前と番号とメールアドレスが記録された。

西屋がたまたまそのことに意味を見出さなかったとしても、製番にとっては想定していなかった新しい誤算であった。

伝票を取ろうとして手が触れたときは死ぬほど跳ね上がった心臓も、操作のレクチャーで電話の渡し合いをする過程で少しずつ慣れることができた。

途中で適度に休憩を挟みつつ、二時間かけて西屋は電話のかけ方、メールの送受信、電話帳の呼び出しと登録、地図アプリと電車時刻表アプリの使い方方をマスターしたのだった。

「下手したらもう真央さんより使えるんじゃない？」

「魔王様はともかくとしても、スリムフォンという同じ士族に立ったのですからエミリアには負けるつもりはありません」

同じ士族でなんの戦いも繰り広げるつもりなのかは分からないが、地図アプリの使い方を理解したあたりから余裕が出てきて、気が大きくなりはじめたのもなんだが微笑ましかった。

意識込む背中が、大きいのにまるで子供のようだ。

だが、夢のように楽しい時間の終わりは唐突にやってきた。

「結局また色々この商例をおかけして申し訳ない。今日は本当にありがとうございました」

十七時。夜はもう紺色。

主夫は帰宅して、家族のために家事に動しむ時間なのだ。

「……うん、助けになれたんだっただら、良かった」

元から、夕方には帰宅しなければならぬことは聞いていたのだ。

でも、お昼からたっぷり時間はあると思っていた。

仕事中は流か流い十七時が、こんなに早く来るなんて。

「本当に助かりました。鈴木さんの助けがなければ、とても一人で庫入することも、セッティ

ングすることもできなかったと思います」

「うん」

製書は頷く。

「鈴木さんのお宅は高田馬場でしたよね。よければお送りを……」

「ううん、大丈夫、別に危ないこと無いし、高田さんもおうち帰らなさやでしょ」

「そうですか。でも、せめて駅の改札までは……」

言いながら歩きはじめた書屋の手は、やはり製書には遠かった。

それなのに、駅の改札は本当に近い。

色々な場所に行ったような気がしていたのに、新宿駅から十分もしない場所にいたのだ。

待ち合わせと同じ場所に属ってきた製書の気持ちはまるで、小さい頃の遠足の帰り道のように

だった。

素晴らしいイベントが終わり、帰り道で一人また一人と友達と別れ、最後に一人になったときの得も言われぬ寂しさ。

この時間が終わってほしくないという、濃密とした気持ち。

家に帰ってしまえば不眠症と消えてしまうのに、帰るまでの道のりが、なんだか辛くなる。もちろん、声屋と二度と会えないわけではないし、むしろ現実を知った分、以前よりも距離が近くなっていると言えなくもない。

だが声屋と今後、こんな風に出逢ける日は来るのだろうか。

生活エリアが違ふし、本来の意味でも本来住む世界が違ふ。

そんなときに、ふと思ひ出した願が あった。

皆言っていた。

あの子は、たった一人で、自分の意志で、この人達の傍に<sup>そば</sup>いることを選<sup>えら</sup>び続けているんじゃないか。

「あの子!!」

改札の前で乗客が立ち止まり、突然声を張り上げたので声屋は目を見開いて驚く。

「あの子……あとちよっとだけ……時間ある?」

「は、はい? えーと、はい、少しなら」

「じゃあ……じゃあき、少しだけ……話、聞いてくれないかな」

「話、ですか。どこか、暮ら着けるところに行きますか？」

「ううん、ここがいい」

西口改札前広場はそろそろ帰宅ラッシュと街に繰り出そうとする若達であふれはじめている。

「変なこと、聞いていい？」

「なんででしょう。変なことというなら、私の方が今日は色々と変なことを聞いたり話したりしたと思うのですが」

「それは仕方ないでしょ。初めてのことをやるうとするんだから初心者はそれでいいの。つかそういうことじゃなくて」

反射的に笑ってしまったが、見上げた声屋の表情を見て、今の一言が思いつめた感のある聲の緊張をはぐすためのものであったと直感する。

「じゃなくて、さ、変なことっていうのは……ほら、恵美って、さ」

「エミリアですか？」

「うん。人間と天使のハーフ、なんだよね」

「そのようですね」

「つまりさ、エンテ・イスタでは、人間と天使は、結婚できるってこと……だよな？」

「そういうことになりますね。別に日本のように役所に届けを出したり名字変更に伴う複雑な

手続きをしたりということはないでしょうが」

「じゃあ……じゃあさ」

心算が今日一番の勢いで、恐ろしくらいに高鳴る。

心の片隅で、自分の話を勢いづけるためのダシにしてみましたことを親友に詫言しながら、梨香は震える声で尋ねた。

「悪魔と人間が……一緒になることは、できるの？」

「……………は」

さすがの言葉も、梨香の語の推移にしばし言葉を失った。

わずかに口元が引き締まり、梨香の言葉をどう吟味したものか、考える顔になる。

「……正直申し上げて、分かりかねます」

そして、数詞の戸惑いの後、慎重な口調でそう切り出してきた。

「悪魔は人間や天使共とは違い体格や体型、器官の数や形状が種族や個体によってに大きく異なります。人間に近い形状を持つ種族なら成いは可能かもしれませんが、私も具体例を存じませんものでなんとも……」

そして言葉は言いにくそうに、頭をかく。

「実はその、人間と悪魔が、という件について最近思うことがあります、鈴木さんの口からその質問が飛び出してきて、少々驚きました」

「え？」

「佐々木さんのことなんです」

「千穂ちゃん……？」

声原の淡い顔から千穂の名が出て、梨香は不穏な予感に囚われる。

「佐々木さんは以前から我々の過去を全て知った上で魔王様を慕っておられます。ですがこの前、魔王様があまりに佐々木さんのお気持ちに甘えすぎているのではないかという疑義が湧きまして、少しアバウトでモメまして」

「真真さんが千穂ちゃんに甘えてる？」

「佐々木さんは聡明な方ですので、魔王様と接するに当たっても決して感情的になつたり、盲目前になることはありません。エミリアやエンチ・イスラの人間性の怒りや恨みなども全て理解した上で我々と接しておられるので、エミリア達の例を持つことも多くあります。ですが……いざ魔王様とエミリアが再び決裂した場合、佐々木さんは魔王様を支持する……」

「え、それはそうとは限らないんじゃないや」

梨香が口を挟もうとして、

「と、魔王様が勝手に思つておられるのではないかと」

「……って、え？」

「つまりですね、魔王様は、古くは日本の生憎に慣れていたなかったべやや、先日私の就職に巻



き込まれた鈴木さんや、エンターテインメントの雑誌に巻き込まれたエミリアをなんだかんだと手厚く世話しました。ですがそのような気遣いを佐々木さんにだけは怠<sup>おこ</sup>っていたのです。魔王様は仕事の場では上司、先輩として目を配っていたと仰<sup>おぼ</sup>るのですが、店を一旦離れれば常に佐々木さんの寛容さに助けられていた、ということへの自己覚とご理解が浅かったようです」

芦屋がそう言い切るからには、そう言い切るだけの確信があるのだろう。

「良く言えば全編の信賴。悪く言えば甘えるほどに、魔王様は佐々木さんにだけは心を許しておられる。それも、恐らくずっと以前から……」<sup>オマケに</sup> 藤原が、日本で我々の敵として現れたあの頃から」

「それってつまり、藤原さんとの戦いの後で、千穂ちゃんだけが」

「そうです。佐々木さんの記憶だけを魔王様は残された。そのときから不意識に思っていたのです。当時から佐々木さんは、魔王様にとって特別な存在だったということが想像できます。そしてその関係は今も続いています。ですから藤原よく考えるのです。ここだけの話にしていただきたいのですが……」

芦屋は真鍮に顎<sup>あご</sup>に手を当てて言った。

「もし魔王様が佐々木さんを仲間……つまり、妻として迎へ入れることを決断されたら、どうなるのだろうか」と

「つつつ、妻っ？」

いきなり生々しいワードが出てきて、お客は薄気を抜かれる。

「それくらいには私も気にはなっていた、ということですからねとも……まあ、魔王様のお心の内は私にも測りようがありませんし、いざその段になってから考えることとも思いますが……なんの話でしたっけ」

「……あ、え、ええっと、その、悪魔と人間が結婚できるかって話」

「ああ、そうでしたそうでした。で、それが何か……」

「うん、えつとね」

むしろ、思いがけず具体的に生々しい話が出てきた後では、やりやすかった。

「言いやすかった。」

すると、言葉が出てきた。

「私はね、千穂ちゃんが真珠さんに対してそうであるように……あなたのことが好きになったの」

「は……どうしてですか？」

真珠はそれまで通りに頷こうとして、聞かった。

「それは、その」

「一人の女として、あなたが好き」

「……鈴木さん、ですが、私は」

「分かってるよ。今、私手裡ぢやんの気持も、よく分かる。別に付き合ってほしいとか、結婚したいとか、そういうことじゃないんだ。ただ、伝えなきゃって、伝えたいって思ってた。見てほしいから、私のこと」

精神が崩れ潰れ、自分と、西屋以外の音が消える。

「迷惑、かな」

「……」

西屋は、真顔な顔で、真顔な顔の聲音を見返す。

しばし交わった視線がほどけかけた瞬間、西屋はポケットから、手に入れたばかりの携帯電話を取り出した。

「少しお待ちください」

「うん」

西屋はまだ少したどたどしい手つきで電話機を呼び出すと、耳に当てて電話をかける。

「……………遅い。パソコンに張りついてるならさっさと出る。私だ。アルシエルだ。あ、買った。登録しておけ。少し爆力が遅くなる。魔王様も今日はお勤めが夜中までだから、腹が減ったら勝手になんでも食べていろ。ん？ ……やむを得ん、好きにしろ。ただし、食べ終わったものが放置されていたら承知せんぞ、ではな」

ごく短く用件を伝えた相手にヴィタ・ローサ様で留守番をしているであろう部屋である

「これは、梨香にもすぐに分かった。」

「悪いのほか、動揺しています。爆果がビザを取ると言い出したのを、簡単に許可してしまいました」

「……それは、どうも」

他に応えようもない。

声屋は小さくため息をつくとき、電話をポケットにねじ込み、梨香を見た。

「少し……付き合っていただけですか」

声屋は梨香の先に立って地下階を歩き出した。

方向から言って、どうやら銀行方面に向かっているようだ。

向かい風の人流を横き分けつつ進むと、やがて二人は地下道を出け、ビル群の真つたた中に  
出る。

声屋は立ち止まるとしばらく周囲をきょろきょろと見回し、

「こちらへ」

と、梨香を道から外れた場所へと誘った。

大企業や一流ホテルなどの高層ビルがひしめく商業街は風が強い。

梨香は心なし、電器店を出たときよりも威が寒く感じられた。

「何、ここ」

芦屋が立ち止まったのは、もう閉店時間過ぎた、ビルとビルの間のカフェのオープンテラス席だった。

金栗が定時を過ぎると店じまいなのだろう。周囲には人影も無い。

首を傾げる梨香を振り向いた芦屋は、驚くべき行動に出た。

「失礼します、鈴木さん」

「え？ あ、わあっ！」

手を握られ、体を引き寄せられた。

それだけで心臓が暴発しそうになったが、事態はそれでは終わらなかった。

足が、地面から離れた。

気がつけば梨香は芦屋に横抱きにされてしまっていた。

「ななななに芦屋さん何何何がこれええええ」

「しっかり抱きよっててください。あと、舌を噛まないように歯を食いしばって」

「え、何が舌って聞かなくて……」

耳元で囁かれたことをまるで実打できないまま、

「わあああああああああっ」



「せは……せは……び、び、びったあ……」

「申し訳ありません。できるだけ人のいない場所に移動する必要がありますが、いつもので」

「ここ……どこ」

「都庁の屋上です」

「都庁っ？」

梨香は冷や汗をかきながらも飛び上がつて周囲を見回す。

「な、なんで？」

「人間のいない、広い場所に行きたかったものですから」

西屋は笑顔で答えると、風の強い広大なヘリポートで少しずつ、梨香から距離を取りはじめた。

「西屋さん？」

「お気持ちには、とても嬉しく思いました」

「え」

「自分でも意外でした。かつては人間のことを疎遠すべき下賤の権柄と思っていたのに、鈴木さんの想いを知ったとき、全く變な気持ちではしなかった」

月さへも地上の光に横き消されるほどの新宿の夜。

西屋の姿が、影に入りはじめ。

「でも残念ですが、私は鈴木さんのお気持ちに応えることはできません。なぜなら」

その風は、声屋が先ほどビルの陰に聖書を讀んだときと同じ、暗く重い冷たさを寄せていた。聖書には声屋の姿が完全に影に隠れたように見えた。だが、そんなはずはない。

ここは月の光を一切遮る物の無い、都庁の屋上ではないか。

だが目の前の出来事の原因を推測する暇すら無く、声屋が黒い影に包まれた瞬間、一瞬強い風が巻き起こり、

「う、あー」

聖書は、唐突に胸の苦しさを覚えて地面に手をついた。

これまでのような、甘い疼きやときめきによる鼓動ではない。

まるで毒を飲まれたような、呼吸すべき空気が奪われるような、感じたことのない苦しさ  
が聖書を襲ったのだ。

「な、何、これ……」

「この世に、声屋四郎などという男は、いないからだ」

「っけ」

声屋が消えた影の中から、聞いたことも無いような声が聞こえてきた。

低く、それでいて高く、ひどく耳障りな音だ。

「苦しいか？ この姿、この力こそが真実の姿。人間よ、貴様が見ていた全てはこの日本で、



人間の中に秘れるための仮初めの体、仮初めの名に過ぎん」

息苦しさに耐えて必死で頭を上げると、そこにいる人影が一回り大きくなっていた。歩み出てきた者の眼光に、梨香の体は意志に反し震えはじめた。

それは、人間が遂に動て去ることのできなかった原初の感情、憂鬱だ。

「我が名はアルシエル。人の身であれば成づくことすら叶わぬ悪魔大元帥、死にたくなければ、それ以上近づかねことだ。我らの魔力は、弱き人間を容易く殺す」

そこに立っていたのは、黒い服に覆われた、梨香の見たことのない生き物だった。

五体を黒色の甲殻で覆い、鋭く二股に分かれた尾を揺らめかせ、鈍い光を放つ瞳が真つ直ぐに梨香を見つめている。

「あ、……あし、やー……」

「エンテ・イスラに生きた人間共は我が姿に恐怖し膝を屈した。そして我らはまた、彼の地の者共を屈辱させるために戻る」

「う……ぐ、はあっ！」

吐き気と涙が込み上げてきて、梨香は遂にへたり込んでしまう。

「理解したか、貴様か、どれほど愚かで、見え通いで、くだらん感情を凝っていたか」

「うう……うぐっ……」

まるで高熱を出したときのように、関節が震みを上げはじめた。

もはや正視することすら難しくなってきた。

これが、悪魔か。

話には何度か聞いていた、しかし実際に見ることの無かった、悪魔か。

ここではない遠いどこかの世界で、人間を殺し、人間を支配しようとした者が。

悪魔は体にかかる恐ろしい圧力と恐怖に耐えながら、思いを遮らせる。

「……どう……して」

「つまりんことを聞くな。人間の女如きが我らのような高等悪魔相手に二度と愚かな考え違いを起さぬよう……」

「どうして、その姿を見せてくれたの……っ！」

「………何々」

「苦しい……聞いてた、けど、こんなにしんどいとは、思わなかった。うんっ……近寄りたくなって、無理。足、動かない……」

だがそれでも、悪魔は氣力を振り絞って顔を上げ、恐ろしい悪魔が答える前に、言った。

「ありがとう。本当の姿を、見せてくれて」

「……」

アランセルがほんのわずかに、戦慄する氣配が伝わってきた。

「悪い悪い、なら、私が、邪魔なら……記憶を消すことも、できる、んでしょ。聞いたもん、



なのに、なんで」

「……」

「怖いよ。それに苦しい。全然近づくことが出来なくて気がならない。怖い、怖いよ……でも」

聖香はこらえられなくなった涙を拭くこともせず、言った。

「それでも、好きだよ。どんなに怖がらそうとしても、私を遠ざけようと悪いこと言っても、

私、あなたが優しいこと、知ってる。だから、好きだよ。思い違い、なんかじゃ、ない」

「……」

「周りの人が……苦しい思いしないように、ここに來たんでしょ。私が危なくないように、そこまで離れたんでしょ」

聖香は必死で言い募る。

ほとんど叫び声になっていたが、不思議と最初の瞬間のような苦しさは和らぎはじめていた。

「真剣に、私の想いに応えてくれるために、本当の姿を見せてくれたんでしょ」

アルシエルは、表情を動かさずに叫ぶ聖香の顔をただ見ていた。

必死の聖香に気づくことはできなかったが、瞳にだけは、不可思議な感情が浮かんでいた。

「分かった。分かった……あなたも……恋人になんかなれないって……でも、今だって、

言える。あなたが好き。私なんかのために、大切な力を使って誠実に断ってくれる、あなたが

好き。それだけは、思い違いなんかじゃない」

だが、もう限界だった。

「ありがとう……アルシエル、さん……」

聖書の宣説は、最後に一瞬だけ遠い世界に住む想い人の本来の姿をその目に焼きつけた瞬間、  
眼に落ちた。

## 聖

「でね、気がついたら新宿中央公園のベンチでさ。蒼屋さんも人間の姿に戻ってたわけよ。なんだかしきりに謝られちゃって、もうなんか逆に関心地帯すぎるっていうか、あれなら私のこと放置してミステリアスに愛消しててくれた方がまっぼど良かった気もするんだけど、万が一私に何かあったら忠実に殺されるしお詫ひのしようもなくなるって、まーアルシエルのときの威厳なんか欠片も無いいつもの蒼屋さんで、私もう自分が言ったことが恥ずかしいやら何やらで、あれ？ 千穂ちゃんあんま食べててくない？」

「はあ……」

千穂はもはや聖書どころではなく、たまたた聖書の話に圧倒されていた。

一方の聖書は、世界を隔いだ失恋の話をしているととは思えない勢いで筆を重ねている。

「バカみたいな話だけとさ、悲劇になると体太くなるんでしょ？ スーッ感らないためにわ

「わざわざ魔身術の一端（いちめん）できちんと睨（にら）いでたって言うのね。下者はって思わず聞いたなら、伸縮性あるから大丈夫でしたとか言うもんだから、私それで笑っちゃってる。百屋さんやっぱ百屋さんだわーって思ってる」

「はあ……」

「で、本当につきさつ（し）き新宿駅で別れてね。そのまま帰っても良かったんだけど、実際に遠く失態の痛手を抱えたまま自分の部屋に戻りたくなくて、それで悪いと思っただけで千穂ちゃんに声をかけてももらったのよ」

「はあ……」

千穂は、中のお茶もとづくに冷めてしまった湯呑（ゆぐみ）を両手で握ったまま、鎮（しず）くしかない。

「魔力とやらが体にキツいってことは聞いてはいたけど、実際に体験すると本当ヤバかった。さつきまで関節痛いの寒気するむ吐き気はするので体ガツタガタでさ、これだけ飲み食いして、ようやく回復してきた感じ」

回復してきた、というが、聖者の顔色を見ると、回復の度合いは低いように見える。

実際千穂が初めて「魔力に当てられた」ときは、翌日まで体の不調が治まらなかった。

それが魔王である真奥（まおく）の魔力が強力だったからなのか、真奥、声原、彼原（ひなはら）の力を間近で受けたからなのかは分からないが、少なくとも真奥が守ってくれなければあの場で呼吸困難になっていただろうことは覚えている。

その後は鈴乃の治療を受けたり、自分が法術を習得したこととで後に引くことは無くなったが、それでもマレブランカ達の魔力に触れた最初の瞬間だけは、神祕に降る不快感を覚えたものだ。薬香は誰に守られることなく、氣を失うまで魔力を溢び続けた。

何より千穂が違和感を覚えたのが、エンテ・イストラから帰還した直後は「高校の生活に魔力は必要ない」と断言していたはずなのに、薬香の前で変身してみせた、ということだ。

あくまで千穂の理解だが、真奥達が『悪魔型』になるには、一定量以上の魔力を体内に保持する必要があるはずである。

日本に來たばかりの真奥は残された最低限の魔力を使って生活の基盤を作ったらしいが、そのときには「本来の姿を失い」千穂のよく知る人間の姿に身をやつしていた。

つまり今の直屋は、誰にも内緒で常に悪魔型に化けるだけの魔力を体内に貯えているということになる。

もちろんガブリエルの一件や、天界が封鎖されたという情報を信じず常に周囲を警戒しているということも考えられるが、それならそうと直屋は誰かに話していそうなものだ。

だが千穂の見る限り、真奥と直屋がそのことについて把握している気配は無い。

いや、把握して取立て千穂にも知らせないようにしているのだろうか。

「……」

千穂はその考えをすぐに自分の中で否定する。

なぜなら、真兇と吉屋と藤原の三人が申し合わせて隠し事をしてゐるなら、速に真の姿を梨香に見せたことの説明がつかないからだ。

梨香の想いを断ち切るために、敢えて暴ろしい姿を見せる必要があつたのか？

その場合、吉屋は梨香の好意に気づいていて、最初からそのためだけにわざわざ魔力を準備してきたということになる。

だがそれは千穂の知る吉屋像とまるで結びつかないし、梨香の話とも矛盾する。

今日の吉屋にとって、梨香の告白は想定外の出来事だった。

吉屋は優しい男だから、梨香の想いに応えられない代わりに、想いを断ち切るためになんらかの理由で保持していた魔力を敢えて使つて、暴ろしい態度をとつてみせた。

梨香の説明を信じた上でこう考えた方が、ずっと千穂の知る吉屋像と合致する。

だがそうすると縁々その「なんらかの理由」が分からなくなる。

梨香が東美や千穂や鈴乃と仲が良いことは、吉屋もよく承知しているはずだ。

吉屋が変身できるだけの魔力を隠していること梨香が話せば、折角態度が軟化してきている

東美も鈴乃も再び警戒するだろう。

真兇達に今の東美達を改めて敵に回すメリットは無いはずだ。

分らない。

得も言われぬ不安に千穂が襲われたそのとき、梨香が大きく息を吐いた。



「あー、結構食べた。ここ、本当美味しいね。今晩百円もバカにできないね」

「あ、それは、良かったですけど……」

「はー……あー」

梨香は都合十五枚もの皿を重ねて大斜に一息つくし、お茶を淹れ直す。

千穂は空腹のはずだったのに、梨香の語りがあまりに衝撃的すぎてまた五皿た、

「千穂ちゃんさあ」

「はい？」

「頑張んなね」

「ま？」

「……うっふ」

梨香は十六皿目をレインから取ると、既に大分苦しそうなのに、サラダ軍艦を口に運びうと  
している。

「あ、あの、鈴木さん何か無理して食べてませんか？」

「食べてる」

「え」

そういう言っている間に、十七皿目だ。

どう考えても、細身の梨香が食べていい量ではない。

「さうじゃないと、やってらんない。千穂ちゃんも付き合つてよ。おごるからさ」

「あ、いえ、そんな」

「お願い。こればかりは、悪美に付き合つてもらうわけにいかないんだ」

十八厘目を、口を押さえたがらも取る。

「私、結局分からなかった。もし真屋さんに想いが届いたとしても、きっと何もできない。声屋さんには真屋さんの目論す未来があつて、たまたま日本ですれちがっただけの普通の人間の私が追いかけられるような未来じゃない……でも」

「鈴木さん……」

十八厘目をテーブルに置いたまま、梨香は顔を伏せていた。

「でも、不思議なんだけど……なんの根拠も無いんだけど……千穂ちゃんなら、真美さんが目論す未来を追いかけられるんじゃないかって、思つちやつたんだ。今からなら……まだ未来を自由に選べる千穂ちゃんなら……」

「未来を、自由に？ ……って」

千穂は梨香の真意を測りかねて尋ね返すが、すぐにあることに気づいて思わず腰を浮かした。

「私はちよつとこう見えて、背負い込んでるもの、そこそこ多い、から」

「鈴木さん？」

「ごめん、ね、頑張つてただけで、お願いいっぱいになったら、なんか、気持ち、緩んで、こ

「う、美味しいね……」

「な、泣かないで、鈴木さん、そんな、だって私……」

「年上なのに、ごめんね、みっともなくって、ワラれた腹いせにやき食いして、そんなになくしゃぐしゃ泣いて、ごめんね」

「……」

千穂は向かいのシートから立って、梨香の隣に飛び込む。

「大丈夫、大丈夫ですから」

そして、その胸をしつかりと抱きしめた。

「ごめん……千穂ちゃん、私、千穂ちゃんだって、きつと、辛いのに」

「大丈夫です。大丈夫です」

「うう……うううう」

梨香は、千穂の肩に少しだけ寄りかかって、胸を食いしぼる。

「どうせなら……二度と顔見せな、くらい、言ってくれたって、いいじゃん……そしたら、すっぱり謝められんのにさあ……」

「……お屋さんは、優しい人ですから」

「優しくさんだよ……あそこまでやったんなら、なんで私の体調なんか……あんな、嫌で、心配すんなあ……」

「芹屋さんらしいです。すごく」

「好きなんだよ……今も、好きなんだよ……」

千穂は静かに泣く。梨香を、落ち着くまでずっと抱きしめていた。

梨香と別れたときには、もう二十時近くになっていた。

別れる間際には梨香も落ち着き、しきりに千穂に詫言ひて帰っていったが、佐塚、新改札の奥へと納めていくその背は、いつも飄々と千穂や恵美の心をくすぐってくる。気のいいお姉さんの姿ではなかった。

「鈴木さん……」

佐塚は、気持ちをはっきりさせるために立ち向かえと言った。

だが立ち向かった梨香は打ちのめされ、それでも向、気持ちを整理をつけられないでいた。怖い。

想いを告げるときには微塵も思わなかったことなのに、その答えが出たとき、自分と恵美の関係は決定的に分かたれてしまうのではないか。

「私、どうすればいいだろう」

だが、整理がつけられなかった梨香は、もう二度と佐塚に会えなかったり、芹屋と顔合わせ

なくなるだろうか。

それも、何か違う気がする。

声屋と結ばれるようなことは無くても、それでも近くにいたいといふ、立ち向かった者は想うのだろうか。

近くにいるのに決して届かないことで、潰れたりしないのだろうか。

「あれ？　チホ？　どうしたのこんな時間ニ」

「わっせ」

そんなとき、千穂は後ろから突如声をかけられて飛び上がった。

「あ、アシエスちゃん」

そこには、この寒いのにはデヨコレートアイスバーなどを齧りながら、スーバーの袋にたっぶりお菓子のようなものを詰め込んだアシエス・アーラが立っていた。

「バイト帰りかなんか？」

「う、ううん、ちよっと外でご飯食べた帰りで……」

「ご飯？　これか？　私もこー結構きゅー」

帰りだと言っただろうと、概査わらずの食い意地に呆れ半分、全くブレないいつものアシエスに安心半分で千穂は微笑んだ。

「残念だけど私はもうお眠いっばい。アシエスちゃんも今からどこか行ったら、さすがに逃げちゃうよ」

千穂がアシエスの口に咥えられているデコレートアイスバーを指差すと、アシエスは今アイスに気づいたかのように頷いた。

「ムム、それもそうか」

「アシエスちゃんば、一人なの？」

周囲を見回すが、アシエスの保護者である義実、ノルド、天祿の誰も見当たらない。

「ううん、一人じゃないぜ」

「え」

誰も見当たらないのに一人ではない、という真事に千穂は堪わず固まる。

「今外で晩ご飯食べてきた帰りなんだけどさ、アマネとイムオーンが迷子になっちゃってて、さっさと戻してらんぞ」

「……」

千穂は全てを察し、無言で携帯電話を取り出すと非常事態に備えて予め控えておいた天祿の携帯電話をコールする。

「おう千穂ちゃんー　もしかしてアシエスと会ったりしちやったりけ？」

ワンコールで着信を取ったらしい天祿が、やや息を切らせながらこちらの用件を先回りして

きた。

「そーです。今、紅葉駅の改札でばったり。ええ、はい、大丈夫、待ってます」

千穂は善美して、天候が来るまでアシエスを留めておくことを約束し電話を切る。

「こーゆートキのために、マオウは私に携帯電話を買ってくれるベキ」

「あはは……」

自分が迷子になった自覚があるのか無いのか、千穂の通話が終わるとアシエスはまさしく「いけしやあしやあ」の見本のように言い放ったもののだ。

「ところでチホ、誰かと一緒にいなかった？　なんかリカっぽい匂いが残ってるけど」

千穂は目を見開く。

確かに今まで聖香と一緒にいたが、それを匂いでも感ずるとはどういうことだ。

「よ、よく分かったね……あ」

驚きの余り迂闊に答えてしまっただけから、千穂は焦る。

アシエスはアパートの隣の志波家に居候しているが、アパートの各部屋にもよく出入りする。もしこれから、預けたアラス・ラムスを迎えに来た聖美とアシエスが鉢合わせし、聖香が

千穂と一緒にいたことを告げられたらマズいような気がした。

聖香も今日のことはいずれ聖美に話すだろうが、少なくとも気持ちの動向が収まらないうちは、アシエスの口から聞かされたら聖美が心配してしまうのではなかろうか。

「あ、あのさアシエスちゃん。もし遊佐さんが帰ってきても、鈴木さんが墓場に来たこと、内緒にしておいてもらえる？」

「エ？ なんデ？」

「その、ちょっと、その……えっと」

どう言えはアシエスに分かってもらえようだろう。

秘密の話をしていたと言えは「リカがチホと会ってたけど秘密の話だから教えられないんだヨ」と自供する姿が目に見え、かといって真実を話すわけには絶対にいかない。

アシエスは基本的に、要領なく口が軽いのだ。

「あ、明日ね、ライラさんが私達をおうちに招待してくれたんだけど」

千穂は必死に考えて、万が一アシエスが口を滑らせても大丈夫なように話を組み立てる。

「おカーさんの家？ へー。あつたんだ、家」

正体不明の大使とはいえ、そりや家くらいはあるだろう。

「で、ほら、鈴木さんは普段だったから遊佐さんに悩みを打ち明けるんだけど、ライラさんのこととで遊佐さんも大変だからって、今日は私の所に来たわけなの」

「ふうん。でもエミちゃんもちょっとジュウナンになっても良いと思っとうあれハ」

こうしている間にも、アシエスはコンスタントにチヨコレートアイスバーを齧りながら、したり顔で聞いた。



「鈴木さんも、きつとすぐに蓮佐さんに話しに行くだろうから、ね、ちょっと内緒にしてあげて」

「ン！ ソーユーことなら仕方ナイー！ ヒミツにしとてヨ！」

「あはは……お願いね」

限りなく不安だが、これ以上念を押しても仕方が無い。

「でもあれサ、エミもリカもそしだケド、何か言いたいことは早めに言っとかないと後悔することになるかもだかンネ。事情はあるんだろうケド、見てて時々本当心配になるヨ」

「え？ どういうこと？」

「ン！？ 私總分長いことみーサマと離れ離れだったし、言いたいことを伝えられなくなっちゃう前二、言いたいことは言っテ、食べたものは食べておかないとネ！」

「伝えられなくなる前……に」

終わりの方が何かおかしかった気もするが、アシエスの何げない一言は、今の千穂には重い意味を持っていた。

「アシエスちゃん……伝えられなくなっちゃったこと、あるの？」

「ちよいぢヨイ」

アシエスは親指と人差し指の間に千穂には分からない尺度で隙間を作る。

「マ、それでもネーサマとイェオーンにはまた会えたわけだシ、一度チャンスを活かしたから

つて、未だ水島「二曜日は無いワケでもないんだろーけどネ。ただ、サ。次が来るまでハ、本座に結構しんどかったあう」

「……ん、そっか」

「そうだなー！ だからサネ、言うべきことはちゃんと言っテ、食べるべきものはちゃんと食べなきゃネー！ ハイー！ 特別に分けてあげコウー」

「あ、ありがと」

話の流れがよく分からないが、アシエスは千穂の手に風船ガムを一つ押しつけてきた。

「あー！ これ懐かしい。まだ売ってるんだー！」

みかんの輪が描かれた小さな箱に、丸い風船ガムが四つ入っている駄菓子だ。

「ミキティは昔よりもサイズ小っちゃくなっちゃって言ってたけど、千穂も知ってるノ？」

「うん、私、このみかんのが好きだったんだ」

子供の頃にやなるとガムに憧れた時期があって、母にねだって初めて買ってもらったガムがこれであつたことを、こんな所で思い出すことになるうとは。

その後も折につけてサヤシエスがあれば買ってもらい喜んで噛らませていたのに、いつしか興味を失い、見向きもしなくなっていたのだ。

大好きだったはずのみかんガムを最後に噛んでから、もうどれくらい経つただろう。

「私も、気づかない内に変わってるんだなあ」

それが成長なのか、卑なる変化なのかは分からない。

ただ一つ言えることは自分もまた、こうして幼い頃の憧れを思い出し、再び走り会うまでに長い時間がかかり、その憧れを無自覚に過去のものにしていたということ。

「過去には、したくないよね」

「シ？」

千穂は小さなガムの箱を握りしめて、微笑んだ。

「ありがとう、アシエスちゃん。私、ちよっと元気出た」

「ソウ？　なんだか分からんけど、そんならもうちよっと持っていきな。いっぱい食べるとちよっと元気できるからさ」

「えき。あつ、いいよそんなに！」

「エンリヨすんなッテ！　とうせ私のお金で買ったんじゃないシ！」

「それ余計に遠慮えんりょしたい！　あ、ありがとうもう十分だから！」

津原よりよほど楽観なことを言うアシエスから、結局千穂はガムを三箱にキヤラメル二箱、スナイックパイ、スナックを五本ももらってしまった。

買い物ビニール袋に入っているからにはきちんと購入したもののなのだろうが、真実がアシエスにお金を持たせているとも思えないので、才波がノルドあたりが出所なのだろう。

そんなことを考えていると、丁度駅のモールの向こうから、イルオーシの手を引きつつ早足

で追つてくる天跡を発見した。

「千穂ちゃん！ 助かったよ！ お出かけの帰りかなんか？」

「こんばんは天跡さん。はい。私も今日、外でお友達と夕食を……」

「そっか。なんにせよ助かったよ。こらアシエス！ あんたちもろもろすんなって言ったでしようが！ って何そのアイスとかお菓子は何？」

「何か、誰かからもらったお小遣いで買ったみたいですよ？」

「そんな騒が甘いのは、ノルド君がライラかミキタイ伯母さんしかいないな！」

千穂も全く同意見である。今回はガムのことを考えれば志満だろう。

「もう信じられないよ。食べ放題の店で店長ストンプが入ることって、本当にあんのね！」

「へ、へ……」

店長ストンプが入るほど店のものを食べ尽くして尚、アイスとお菓子を食べる余裕のあるアシエスには、改めて畏怖を感じざるを得ない。

「もう腹大盛りで食費いくらとか、そういうの探した方がいいかもって思つてるとこ」

天跡は疲れた顔で囁息するが、そうなるも今度はアシエスの悪癖で、あと少しのところまで完食できずちよつと残してしまう、ということになりそうなのもある。

「とにかくはら、二人ともアパートに帰るよ！ 千穂ちゃんもありがとね！ こいつらいるから逃がつてあげられないけど、気をつけて帰んなね」

「またね、チホ」

「んじやネー、バイバイー」

「じゃあまた。アシエスちゃん、ありがとう！」

嵐のように去っていくセフィラの遠い凱歌連の音を息返りながら、千穂は小さくため息をついた。

天幕には気の毒だが、それでもアシエスとイルオーンの楽しそうな背中を見て、二人が出会ったあそして笑い合い、伝えたことを伝えるまでにどれほどの時間がかかったのか、千穂は少しだけ想像する。

もし、今の自分の想いが届かぬものだったとしても、それを過去にするならちゃんと見送りたい。

何もしないまま、いつかふと思い出して懐かしむような過去にはしたくない。

「当たって砕ける、か」

やはり梨香は千穂にとって素敵なお姉さんだ。

千穂が悩みに悩んだことを、強い意志で進行した。想いを無意識のまま過去に送り出すようなことをしなかった。

「とはいえ、これどうしよう。靴とか持ってこなかったから……」

両手いっぱいのお菓子などをどうやって持って帰ろうか悩んでいると、

「千穂？ 何してんのこんなところで」

「あれ？ お母さん！」

丁度改札から、母里穂が目を丸くしながら出てきた。

「こんな時間に出歩いてこの不良娘。そんなにいっぱい駄菓子、どうしたのよ」

母は苦笑しながら千穂の手からキヤラメルを一つ手に取る。

「懐かしいわね。私の記憶にある限りあんたが初めてダダこねて欲しがったのがこのキヤラメルだったわ。まだ覚ってるのね」

「えっ？ 何それ。ガムじゃなくて？」

「あなた昔から食べることに食欲だったから、大抵のお菓子でダダこねたわよ」

「ええ……そうなんだ」

「それで？ 晩ご飯どうしたの？ 駄菓子で済ませたわけじゃないでしょ？」

「あ、うん、ちょっと友達に誘われて、あそこの回転寿司に」

「まー、昔はキヤラメル一個で大喜びだった子が、自分で寿司なんか食べるような金持ちになっちゃって。次の母の日あたりは期待してていいのかしら」

「う、うん？ ま、まあ」

千穂は暖昧な笑みを浮かべつつ、母の鞆に駄菓子を預け、少しだけすっきりした気持ちでとりとめのない親子の会話を交わしながら、家路についたのだった。

著

「あ、エミ！ お疲れー！」

「アシエス？ こんな時間に出かけてたの？」

仕事上<sup>1</sup>がりの聖美<sup>2</sup>は、アパートの前で重い物袋を抱えたアシエスと鉢合<sup>3</sup>わせ目を丸くする。

「アヤネとイルオーンと外でご飯食べた帰りニ、ちよつと遅れと駅で話し込んでネー」

「千穂ちゃんにとって、この時間に？」

今日の千穂はシフトにも入っていないのに、こんな時間まで外で何をしてたのだろうか。

「今日はネーサマ、どっちにいるノ？」

「べやの所よ、アツシエやが昼間に仕掛ける用事があるって言ってたし、魔王もシフトに入ってたから」

「そつ方。ちよつと聞きたいことがあるから、スズノんとここお邪魔<sup>4</sup>してイイ？」

「え？ 多分大丈夫だと思っけどー」一応聞いてみないと」

アシエスは聖美の後ろから階段を一階<sup>5</sup>に上がったくる。

二〇一号室の灯りはついていて、かすかに新屋<sup>6</sup>と南原<sup>7</sup>の会話が漏れ聞こえてくるから、もう聖香<sup>8</sup>とのデートも終わったのだろうと聖美は小さく頷いた。

外からではうかがい知れないが、聖書は結局何が言つたのだらうか。戸屋はそれにどう反応したのだらうか。

色々と不安は尽きないが、とりあえず今はアラス・ラムスを速急に行かねば。

「ベル、アラス・ラムス。ただいま、私よ」

「エミリアアかき」

「ままー おかえりー」

ドアの向こうから、鈴乃とアラス・ラムスの声が返ってくる。

「ベル、アシエスがちよつと聞きたいことがあるって言つてるんだけど、上がっていい？」

「うん？ どうした？」

鈴乃がドアを開けながら答へ、聖書の後ろにいるアシエスを認めると、二人を部屋に上げる。

「あしえすも、おしここと？」

「違うよネーサマ。ネーサマにはまだちよつと早いお菓子買つて午タ」

「おかし、たべたい！」

「ちよつとアシエス、もう遅い時間なんだから、アラス・ラムスにお菓子見せないで」

「エーもう手遅レ……」

「ダメよ、アラス・ラムス、お菓子はまた明日」

「あん」



アシエスとイルオーンが五千円分近いマダロナルドセットを平らげたという話を聞いて以来、恵美はアラス・ラムスの食べる物に少し神経質になっている。

アシエスやイルオーンのように暴食するような子になってはいけない、という思いが、少し厭しく出てきているようだ。

「アラス・ラムス。またはアラス・ラムスが電報にならないために言っているのだ。我慢しななければならぬぞ」

「うう……あしえすはたべてるのに」

鈴乃の説得にも納得せず、珍しく不機嫌そうに口を尖らせるアラス・ラムス。

どうやら妹であるアシエスが許されて、妹の自分が許されないのが不満のようだ。

成長の度合いの問題でどうしようもないことなのだが、それを説明しても分かってもらえない。さうなので恵美はアラス・ラムスを膝の上に乗せると、あやしながらアシエスに尋ねた。

「それで、ベルに聞きたいことって何なの？」

「スズノだけじゃなく、エミにも聞いておきたいんだケド」

「え？ 何かしら」

「二人とも明日出かけるって聞いたんだケド、行くノ？」

「はっ」

恵美と鈴乃は首を横振りで首を振げる。

「出かけるって、どこに？」

「エ？ 行かないノ？」

「だからどこによ」

意外そうに驚くアシエスと顔が噛み合わない。

「エミもスズノもおカーさんの家、行くんでしょ？ 私そう聞いたヨ？」

「はあ」

今度の「は」は、驚きの「は」だ。

「エミとスズノとチホが行くんなら当然マオウも行くんだろーし、そうすればアシヤやルシファエムも行くんじゃないノ？」

「え？ ちょ、ちよっと待ってば 誰に聞いたのそんな話ー」

慌てた表情が尋ねると、アシエスは高然のように答えた。

「さっきチホが『私達明日ライラさんの家に行く』って言ってたヨ？ だからエミ達も行くもんだとばかり思ってたんだケド」

千穂がこの場にいたら、顔を揃えてうずくまってしまうたに違いない。

梨香が来たことは秘密にできたアシエスだったが、それ以外のことは特別口止めされていないのだ。

それに千穂の言う「私達」の中に、いつも仲良くしている東葉や鈴乃が含まれているとアシ

エスが考えるのは無理な話のことだし、もつと言えば片屋や邊原が本来思慕と敵対関係にあるなどアシエスの理解の浅く及ばないところだ。

だが、思慕にしてみれば千穂には行くとも行かないとも言つてないし、そもそも約束も何もしていいわけから、そんなことを言われても困る。

「い、行かないわよ私達は」

「エ？ そんなン？ スズノもなノ？」

「そ、そうだな。私も特にそのつもりは……」

恵美と鈴乃にしてみれば千穂とアシエスがという経緯でそんな話をするに至ったのかまるで理解できないが、とにかく二人共、タイラの家に行く予定もつもりも一切無かった。

「えい、じゃあチホの言う私達つて、マオウとアシヤとルシフェルだけなノ？」

「明日に限っては、アルシエルもルシフェルも行くとは聞いていないぞ」

「エ？ じゃあ明日はマオウとチホと私だけなノ？」

アシエスが勝手に勘定に入っているのは、単純に真実とアシエスが一定距離以上離れることができないという制約のためである。

「多分、お父さんも行くと思っけど」

「オトーさんとマオウとチホと私でオカーさんの家……ナンカ、途中話断なくて気まずくなりそうなんだけど」

アシエスがそんな気遣いを見せるとは驚きたが、確かにそのメンバーで一体どんな会話が交わされるのか、想像はつきにくい。

「……とにかく、悪いんだけど私達は明日ライラの家に行く予定は無いの。あなたも気まずいなら魔王の中にいればいいでしょ？」

「そりゃソーだけじゃさー。折角のお出かけなんだから、それもある」

東美の説得にアシエスが口を尖らせたそのときだった。

「あしえす、おでかけするの？」

アラス・ラムスが、おでかけ、という単語に鋭く反応した。

「ウン。マオウとチホと一緒に、オカーさん家」

「ばばとちーねーちゃと……」

「う」

東美の膝の上でアラス・ラムスが不穏な気配を覚しはじめ、東美と鈴乃の顔が凍りつく。

「ままー」

「な、なめに、アラス……」

「おでかけすう!!」

強い意志がこもった顔と声と、無言に握りしめられた手を見て、東美の声は上ずる。

「お、おでかけ？ そ、そうねー。じゃあエメラダお姉ちゃんと綾路の公園に……」

「や!! ばばと!!」

東美の簡単なごまかしなど、通用するようなアラス・ラムスではない。

「あのね、ばばは大事な、その、えっと、お仕事で出かけるのよ? 邪魔しちゃうダメで……」

「あしゝすはいいいのになんでダメなの!」

「そ、それはね、アシエスの方が今は大人だから……」

「や! あたしがおねーちゃんなの!!」

「そ、それはそうだけど……」

先ほどのお菓子の取替が、いつになく強情に東美の言うことに反発する。

「別に仕事って訳じゃなくナイ?」

その上アシエスがぼんやりした顔で、そんなことを言うものだから今度は鈴乃が慌てた。

「アシエス! 今エミリアはそういう話をしているわけでは!」

「スズノ!、嘘は良くないヨ!。育児中はトキトシテそういうことしかちたけど、子供がそー

ゆーの見抜かないと思つたら大間違いだヨ?」

「何故、こんなときだけそんなマツモなことを言うのだ!!」

「……まあ、うそさ!」

「ああああアラス・ラムス、嘘じゃないの。嘘は言っていないわ! ばばがお仕事なのは本当な

のよ? でも……」

「ばばとちーねーちやとままのおしごといっしょ！ どうしてままいかないの！」

お仕事、というワードがマズかったのか、アラス・ラムスは全力で食い下がってくる。

ここまで来ると、戦いのときに時折見せるような謎の知性の発達を思い出してしまい、どこまでごまかしていいものか分からず、悪寒はしるもどろになってしまった。

「だからその、普段とは違うお仕事なのよ」

「あしえすおしごとじゃないっていった!!」

「ウン、仕事じゃないデシヨ！」

「アシエス！ お頼いだから空気読んで！」

「ヤー、悪いけど私基本ネーサマの味方だシ？」

「おでかけすーうー目目」ばばとおでかけー目目」

「ちよ、アラス・ラムス勝かにーもう夜だから……」

「ひー……うゑあああああ！ おでかけすうのおおおお目目」

こうなるともう収まらない。

アラス・ラムスは今までに無いほどの機嫌を起こして涼きはじめってしまった。

「え、エミリアア！ どうにかしろーわ、私はこんな状況になったことが無い！」

「私だって無いわよーお、頼いだからアラス・ラムス、言うこと聞いて……」

「いいいいくうううのおおおおおおいいええええあああ目目」

「あーもうネーサマ可愛いナア」

アシエス一人が、彼を瞬（と）ふアラス・ラムスを抱き上げてその顔に傾（かたむ）けしうしている。

「なんだなんだどうした!?」

「ねーちよつとうるさい、何があつたの」

「なんだ、よもやアラス・ラムスが怪我（けが）でもしたのではあるまいな」

「話がややこしくなるからあなた速（はや）に出てこないで」

「ひいひいといよええあああああぶよあああああ!!」

その上アラス・ラムスの泣き声を聞きつけたか、共用廊下の外から真奥（まおく）と隣（とな）屋（や）と音（おと）屋（や）の聲（こゑ）が連続して聞こえてきて、アラス・ラムスのはつとしてアシエスの手から飛び下りて玄関へと駆けつけていき、それを見た惠美と鈴乃（すずの）はがっくりと膝（ひざ）をついて天（あま）を憐（れ）れいだ。

「ぶあああばあああああー おでよかけすうううううううー」

「な、なんだどうした? アラス・ラムスがそんなに泣くなんで、おい惠美お前何したんだ!」

鈴乃（すずの）ここ聞（き）ける! 大丈夫だぞアラス・ラムス! ばばここにいろぞー」

玄関扉（かど）を大泣きしながら叩（たた）くアラス・ラムスの様子に、真奥（まおく）は真剣（まけん）に慌（あわ）てた声を出している。

「アケルヨー」

その場の混乱をただ一人平然と流（なが）り歩くアシエスが玄関の鍵（かぎ）を家主の許可なく勝手に開ける  
と、アラス・ラムスは待（まち）も構（かま）えていた真奥（まおく）の胸（むね）に涙（なみだ）と鼻水（はなみず）でぐちゃぐちゃになった顔で飛び込





んでゆく。

「おでかけすうのおおおあし、まずだけすういいいいあああ！」

「は？ ずるいって何がだよ」

真風は訳が分からず恵美と鈴乃に助けを求めるが、こっちはこっちで打ちひしがれたまま何も言わないので混乱は募るばかりだ。

「マオウ、明日オカーさん家に行くんでしょ？」

「え？ ああ、タイタの家のことか？」

「ホーサマ、一緒に行きたいんだってす」

「あ？ そ、そんなことでこんな大役きしでんのか？」

「ふうういいえええ……ぐすっ……えぐっ……」

「よしよし、落ち着け落ち着け……おい、恵美」

「……………何」

恵美はたつぷりす秒は留めてから、腹も上げずにうめくように答えた。

「お前まさか、行かないつもりだったのか」

「……………うん」

タイタの誘いを断ったことを、恵美は結局鈴乃以外の誰にも明かしていない。

それがまさか、こんな形で露見するとは夢にも思わなかった。

「おいおい……」

真美は顔を嫌めてから、アラス・ラムスと悪戯をしばし交互に見て、

「お前これ、行きたくないで済むと思つてねえよな？」

「……途中であなたが千穂ちゃんに預けて、ライラに会わずにどこかにいちやダメ？」

「バカか」

真美の無様な足掻きを、真美は爪先で蹴り飛ばした。

「新宿まではライラが迎えに来るけど、その後どこに行くか誰も知らねえんだ。途中で距離離れすぎて連絡状態に戻ったら、どう言い訳するつもりだ」

「……………どうも」

真美は頓念しきれない様子でうめいた。正直、今もライラのことなど知りたくないのだ。

理解が深まれば、それこそ真美相手にそうだったように、ライラに対する色々な怒りが薄れてしまふかもしれない。

だが怒りを失ったところで、普通の母子のようになれるとはとても思えない。

怖いのだ。

ライラをより知ることで、その先自分はライラとどう接すればいいのかわからないから。

それに真美を巡る千穂との悪いのズレも、なんら決着を見ていない。

だが、またぞろ心に毒を出した真美の病気の虫を、真美は冷静に破壊した。

「どうしても嫌だっつーんなら無理にとは言わねえが、ただ、アラス・ラムスは別にそんな極端なわがまま言ってるわけじゃねえ。納得させられなくて、お前とライラみてよになっても知らねえからな」

「……っ」

アラス・ラムスは減事なことでは腹痛を起こさない。

日頃に関き分けのいい子だし、悪いことを悪いしちやんと理解する分別もある。

それだけに、東美の勝手で行きたくない、などということをもし見抜かれれば、アラス・ラムスが腹奥に不信感を抱く可能性は否定できない。

何せ今の東美のライラに対する拒絶は、自分の単純な迷いや戸惑いを直視したくないがための後ろ向きな拒絶なのだ。

ライラ側が少しずつこちらの側の事情を把握し譲歩してきているのは東美もよく分かっている。それだけに、絶対に行かないと心に決めるだけの材料も無く、アラス・ラムスも具体的なことは分からないにせよ、東美のその迷いを敏感に察しているからこそ言うことを聞いてくれないのだらう。

「願念するしかないんじやナイ？」

「……」

アレスは、もしかして分かってやっていたのではないか。

そんな疑いすら抱いてしよう。恵美だが、それを確かめる術はない。  
 諦めたように恵美は顔を上げると、

「まああ……」

「恵美」

アラス・ラムスの紋を磨らした顔と真実の高樹な顔と目が合った。

「……………分かった。行くわ」

恵美は乾き出すような声で言つて、視念したのだった。

魔王と勇者、国の前にある現実を回復する



前日に劇的なドラマが人知れず練り上げられていた。國王親新宿駅西口改札前は、思いがけず大人数がたむろしていた。

「はーらー アンエスー うろちよろしないー イルオーンを見習いなー」

「シなこと言つたつてアマホー カレーの匂いがするんタロー 興奮せざるをエナイー」

「カレーのスパイスにそんな効果はねえー 大人しくしてねえとハウスだぞアシエスー」

「出てくる前にあれだけ魔王のところで米ばかり平らげていただろうに……」気の毒にアルシエは涙目になっていたぞ。

「イルオーン、体調は大丈夫か。電車は怖くなかったか？」

「ありがとう、ノルド。大丈夫。怖くなかった」

「むしろ電車の方が怖がるんじゃないですかねう……」

「エスラダさん、しー！ イルオーン君結構気にしてるんですから！」

「やー、相違わず人が多いねこの駅は！ ねーエミリアー！ いい加減その子に、僕に慣れるよう言ってくれないかな」

「お隣りよ。慣れてはしければアラス・ラムスの観客から消えて頂戴」

「うう……なんでがうりよるいの……」

隅に固まっついていないと、帰宅ラッシュが始まらんとするこの夕刻、人の流れを全力で阻害する人数である。

ライラの日本実話新聞ツアー参加者は、あれよあれよという間に当初の真実と千種とアシエスに加え、惠美、アラス・ラムス、鈴乃、ノルド、イルオーン、天海、エヌラダ、おまけにガブリエルまでやってきたのだった。

「本当に、どうしてガブリエルがいるの、天海さん」

このメンバーの中では、明らかにガブリエル一人、ゴジションも夜寝も浮いている。

元々真実とも惠美とも明確に敵対した相手だし、この寒い最中に相変わらずのトリーゴと丁シヤツなのだ。

「やー、だってイルオーンが電車で出かけるって言うならさ、万が一のとき私一人じゃ手が足りなくなるかもしれないのは昨日よく分かったし」

「……イルオーン、カレーでも食べるか？ アシエスも一緒に」

「エッ！ いいのオトーさん！」

「いいの？」

「ノルドの奴、また甘やかしやがって」

天海がイルオーンの危険要素を語るのを聞きつけたノルドが、改札のすぐ近くにある立ち食いカレー屋へとイルオーンを誘い、アシエスもお相伴に与る。

普段の真実なら止めるところだが、デリケートな話をイルオーンに聞かせまいとするノルドの親やも理解できるので、つい止めに入れなかった。

「そぞ、僕は今日はおまねよきんのお手伝いで来てんのよ。ミキチイにすっかり言い含められてるから、君連に悪いようなことはしないから安心して」

「なんだよおまねよきんで……」

単純な実力差の問題があるにしろ、ガブリエルが何故そこまで志波と奥登にし、かつ志波の言うことに従順に従っているのかは、ウィタ・ローザ復讐に集う君連共黨の謎である。

「今は安定してるけど、アラス・ラムスちゃんもアシエスちゃんも、何がきっかけで暴走するか分かんないし、惣惣私一人で三人のセフィラを相手にしなきゃならないんだもん。用心棒は欲しくなるわよ」

「まあ、デブラーはともかく、イエソドに関してはある程度慣れてるから任せといて……って言うん、こちらのご夫婦が怖い顔するからできれば何事も無く終わって欲しいね」

「誰が夫婦だ（よ）!!」

「……息びつたり……」

真珠と惣美が声を揃えて、ガブリエルを威嚇し、千穂と純乃とエメラダが声を揃えて笑れたようにため息をつく。

だがガブリエルの言う通り、惣美は一度、アラス・ラムスがアシエスを求めて暴走した瞬間を目の当たりにしている。

真珠もエンテ・イスラ東大陸に於いて、カマエル達との戦いで、アシエスの性格が凶暴に豹



覚したことを思い出して、天祥の言うことに頷かざるを得なかった。

「それにしてもイルオーン君とアシエスちゃんは今からカレーなんか食べて大丈夫なんですかね？」　ライラとの待ち合わせは十八時ですわね？　あと五分しか……」

「大丈夫だエメラダ殿。アシエスなら、特に問題はない」

エメラダの疑問に、鈴乃はなんでもなしに言った。

「はら、もう出てきましたよ」

千穂も、特に問題にしていなかったようで、何げなく店の方角を眺めた。

「まだ　は、遅すぎませんか？」

ノルドとイルオーンとアシエスの妻が店に消えてから、まだ三分と経っていない。

「マ、これであと三十分は持つかな」

「おいしかった……」

「うっぶ……」

けろりとした顔のアシエスとイルオーンに比べ、ノルドは口を押さえて青い顔をしている。

「二人に付き合って、律儀に食べたのね」

恵美は、三人の背後で店の客が入り口から顔を覗かせて驚愕の眼差しでこちらを見ているのに気づき、父の様子を見て店の中で何か繰り広げられたのかを察した。

「お父さん、大丈夫？」

アシエスとイルオーンのベースに無理に合わせて食べなくとも良かっただろうに。

「な、なんとか……し、しかしエミリア、私は今、この国の真実の一端に触れた」

「え？」

ノルドは、出てきたところで口の周りを丁寧に拭いてもらっているアシエスとイルオーンを横目で見ながら、言った。

「カレーは、本当に飲み物だったのだな」

「……」

それはそういう意味ではない、と言ったところで意味は無い。

「あれが健康を害するという理由で世の中から廃れた『一気飲み』か……」

父がなんの話をしているのか、分かるようで分からないし分かりたくもない。

第一、父はアシエスやイルオーンがそういう食事をしたら、諫めねばならない立場だろうに。

「アラス・ラムスの食事は、きちんと私が管理しなきゃ」

「またあしすだけ……うう」

決意を固める真実の戦いの中で、またもアラス・ラムスが不満そうに口を笑らせた、そのときだった。

「エミリア君」

高い声に、その場の全員が振り返った。

「……………ライラ」

そこには、普通のアニメの上にダウンコートを羽織るライラが立っていた。

驚愕の余り目を見開きながら口を両手で押さへ、目を潤ませながら恵美を見ている。

「来て……………くれたの？」

「来たくて来たんじゃないわよ」

油断すると抱きついてきそうな気配を見せたため、恵美はアラス・ラムスを抱っこし直しつつ警戒しながら距離を取る。

「ううん、いいの。それでもいいの。ありがとう。時間を作ってくれて」

「…………」

喜びに涙すら浮かべるライラの顔を直視していられず、恵美は無言で顔を背けてしまう。

ライラが喜ぶ姿を見て、一瞬でも来て良かった、と思いたくない。

ノルドはそんな恵美の姿に、口を押さえながらも深く頷いた。

「皆さんも……………ありがとうございます。わざわざ、時間を作っていただいた」

ライラは少しだけまなじりを拭いてから、改めて恵美とノルドの後ろにいる真奥達に深々と頭を下げた。

「私とガブ君は勘定に入れないでいいよ。ミキティ伯母さんに傷せつかっただけの、いざっつーときの用心棒だから」

「それでも感謝します。イルオーンが安心して外を歩けるのは天路さんのおかげですから」

「……そうだね」

イルオーンは神妙な顔持ちで首肯した。

「本当は、あなた達が自由に生きられる場所があったはずなんです……」

ライラは、イルオーンの言葉を聴きながら寂しげに俯く。

「私達が、それを奪ってしまったから」

「ライラだけが悪いんじゃない」

イルオーンは少し早口に言うが、

「それは素直に申し訳ないけど、ここで立ちっぱでする話でもないんじゃない？」

憤然とするライラに、ガブリエルは至極軽い調子で言った。

「それに、イルオーンとアシエス・アールと、この赤ん坊以外は、皆もう、大体のところは把握してゐるでしょ？」

「大体……把握、してるのかなあ」

千穂は首を傾げる。

それは、例の世界の危機ファイルのことを言っているのだろうか。

千穂もさっと一読したし、真実もノルドも、そしてずっと以前からライラのことを知っている天裕も把握しているだろう。

だが、真実とエメラダはライラとはほとんど接触していないし、鈴乃も真実に付き合っただけで、ライラと目立った交流をしていない。

青屋と煉屋は真実とライラの交際関係としてある程度話を聞いているはずだが、ライラの話の筋がエンテ・イスラの「人類が」危ないということだったので、悪魔である彼らは最初からそれほど興味を抱いているように見えなかった。

さらに、千穂には青屋に関して懸念というには余りに小さい、だが決して無視することのできない懸念がある。

聖者の目の前で青屋が悪魔型に戻った、戻るだけの魔力を隠し持っていた、という事実を、真実は把握しているのだろうか。

青屋が真実を裏切るようなことを考えているとは微塵も思わない。

さうして青屋が理由なくそのような行動をとることも考え辛い。

青屋は、今日のこの集まりに来ていない。

そもそも来る気の無い煉屋が勝手をしていないように、というのが千穂の聞いた理由だが、今の青屋にとって「悪魔を見張る」ことが「真実がライラと一歩踏み込んだ接触をするのに同意する」ことに優先するとは千穂にはどうしても思えないのだ。

まるでハンバーグの中に混じった固いスシを噛んだような違和感を拭えない千穂だが、そのことを詳細に誰かに相談することは、聖者のプライドを傷つけることに繋がりがわかない。

不安は表情となつて表に出たが、ライラはその顔を、ガブリエルの發言を受けての疑問と取つたが、千穂に少しだけ微笑みかけてからガブリエルに言った。

「ガブリエル。今はその話は無しよ。サタンとの交渉条件を満たしていないわ」

「へいへい」

ライラは厳しい声色でそう返めてから、改めて全員に向き直る。

「天海さんは車渡さんから聞いてご存じかも知れませんが、私の日本の假の妻は練馬にありま  
す」

「練馬だと？」

「そんな、近くに……」

「三鷹からは、近いようで遠いな」

聞いたのは真梨と恵美とノルドだった。

「俺、よく富島園にヘルプに行くのに通ってたぞ」

「そうなの？」

ライラも聞いたように目を見開く。

新宿から練馬に行くのなら、一番簡単なのは経常大江戸線の先が丘方面行きに乗ることだ。

真梨の言う、管内では有数の遊園地である富島園には、練馬からさらに西武池袋線の支線に乗り換える必要がある。

マダロナルド食品店はその陳内店舗であり、木崎の同僚で幼馴染みである水島由起が店長を務めている関係で、時折人員の貸し借りが行われるのだ。

「私は食品店に行ったことは無いけど、とにかく私の家は、練馬駅から歩いて五分くらいのマシジョンよ。志敏さんをお持ちの物件で、少し安く貸していただいているの。仕事があるときは、そこから新宿まで通っているわ」

「お仕事ですか？」

千穂が尋ねる。

「ええ、千穂さんの疑問にも今日は答えられると思う。私が日本でどんな生活をしていたか」

「そうですか……って、あれ？」

複雑な顔をして頷く千穂は、ふとあることに気づいた。

「ライラさん、少し顔色悪くありませんか？」

「えっ？」

千穂の指摘に、ライラはなぜか上ずったような悲痛に近い反応を見せた。

「そういえば、なんか目の周りにクマ浮いてるね」

千穂に染つかって、天祥も遠慮なく言う。

「あ、それは、その」

そしてライラは急に顔紅えながら視線をあちこちに逸らしてから、やがてその視線をノルド

に合わせる。

「あの、ね。この間も言っただけど」

「ああ」

「お、驚かないでね？」

「だ、だから何に」

「私、頑張ったの。頑張ったんだけど……その、ちょっと、忙しきにかまけて放置しすぎて、実際に一日だけじゃどうにもならなくて」

なんの語をしているのだろうか。誰もが首を傾げたが、

「とに、とにかく、その、まずは移動ね！ 大江戸線で向かうんでいいかしら！」

タイラはより黒くなった顔色のまま、わざとらしく高らかな声を上げて先頭立って歩きはじめた。

「……なんだあやや」

「分かんない……」

鹿島とノルドは、タイラの奇妙なテンションに終始首を傾げっぱなしだったが、とりあえず全員そろそろとタイラの後に続くことにする。

京王ショッピングモールを抜けた右手の大江戸線改札を通り、地下深くまで下りると一度光が丘行きの電車が来たところだった。



大江戸線は他の都内の軌道と違い少し車体の規格が小さく、独特な形状をしている。

そのことに気づいたアシエスとアラス・ラムスまではいいとして、鈴乃とエメラダまでが物珍しげに落ち着かない様子で周囲をきろきろと見回しはじめたのには真美も訝（うしろ）めた。

ライラはノルドの隣に腰掛け、ときおり真美の方に視線を送っては、真美が意識せず視線を合わせてしまうと慌てて逃らすということを繰り返し、その真美は真美で不自然に千穂の方をちらちらと窺（うかが）っていて、大江戸線を使い慣れて特別物珍しいこともない真美にはなんとも内心が悪い。

やがて練馬駅（うつけま）に到着して、地上階に出ると、またライラの先導で全員がそろそろと練馬の街を歩き出す。

改札を出て右折し、すぐに線路と並走する大通りに出る。

右手に練馬区役所を眺めながらさらに住宅街に入ること五分ほど。

「……ここが、今私の住んでるマンション。ここが、三階」

ライラは、なんの違和感もない十階建て集合住宅の目の前で立ち止まった。

ペーシェ色の外壁の、本当にごく普通のワンルームマンションのようだ。

「ここまでは、特別製は無いな」

ノルドは、やや困惑したように言う。

「魔王サタンがああのアパートに住んでることに比べれば、天使がこのマンションに住んでいて

も特別とうということは無いと思うが」

「かといって、サリエル様の住まいのようにやたら装飾が高そう、というわけでもないな」  
鈴乃も似たような感想を抱いたようだ。

「本当なら私は、驚くところなんでしょうけど……」

この大人数にあって唯一人の一般人である子穂は少し苦笑気味だ。

魔士だ天使だといった連中の真実を目の当たりにし疑けてきた子穂にとっては、もう神様が隣の家に住んでいたところで驚くことなど無いのだ。

「なんかツマンなぞーなトコ」

そして最後の最後にアシエスが容赦ないコメント。

「す、住みやすいのよ？ 大騒動からちよつと裏に入ってるから車の騒音とか無いし、お買い物できる店も役所も近いし、駅からもね……」

「んなことはいい。中を見るまでは信用ならねえ」

真実ばうんざりしたように、ライラを促した。

「あ、うん……」

だがここに来て、急に道を切らない悪魔のライラ。

「……おい、本当にここなんだろうな」

「こゝ、ここに住んでるのは本当よ。ね、天使さん！」

ライラは驚いて、天柝に助けを求める。

「まーねー。一応聞いてたことごと一致するし、真兇君、そこ見てみ？」

「ん？」

天柝が顔をしゃくろ先を見ると、そこにはマンションの名らしき金属プレートが表示が、

「ロイヤル・リリー・ガーデン豊永……」

音響的なマンションにこのネーミングは、確かに志望のセンスを彷彿とさせる。

「ちよっと、心の準備がね。ふー……とにかく、どうぞ、エレベーター広いから、多分皆で乗れると思うわ」

ライラは意を決してロビーへと向かう。

「……なあ、ちーちゃん」

「は、はい？」

真兇はその最後尾につきながら、小声で千穂に言った。

千穂は千穂で、突然真兇に囁くように声をかけられ、思わず背筋を伸ばしてしまふ。

「華いんだけとき、ちよっとしっかり見ておいてくれないか」

「し、しっかりって、ライラさんの部屋を、ですか？」

千穂も思わず小声になる。

「ああ。本当にここに、ライラが住んでるのか、生活の実態があるのかってところをさ」

「生活の宝庫？」

「女が一人暮らししてて、不自然じゃないかってこと」

真央は眉根を寄せて噓をつた。

「一人暮らしの女の家の様子なんて知らないからさ、外側だけ取り繕われても気がつかねえかもしれない。実際に女性的な目から見ても、不自然なこととか妙なことに気づいたら、些細なことで構わないから教えてほしいんだ」

「わ、私もそんなに自信ないですけど……って、あ」

話しながらロビーに入ると、丁度エレベーターがやってきたのだが、

「あ、こ、ごめんない。次のエレベーターで……」

あつという間にエレベーターは満員になり、真央と千穂だけが外に残さねてしまっていた。考えてみれば今日はタイラ含めて総勢十二人で行動しているのだ。

ワンルームマンションのエレベーターならぎりぎりの数だろう。

大きなマンションだと引つ越し業者用に大きなエレベーターを設置しているケースもあるが、ここのエレベーターは一基だけのようだ。

「いいよ。三階だろう？ 俺達は階段で上がる」

「悪いわー。んじや上で」

真央が言うなり、手前側にいたガブリエルが閉じるボタンを押して、エレベーターの扉は容

靴なく閉まった。

エレベーターが上があるぞーター音がかすかに聞こえたとき、

「……悪いな、いつも」

真奥は閉じたエレベーターの扉を見たまま、ぼつりと言った。

「俺はちーちゃんに甘えすぎてる。分かってはいたんだ」

「まっ……」

真奥の思いがけない言葉に、千穂は息を呑む。

「ちーちゃんが受け入れてくれんのいいことに、いつも俺に付き合わせて、いつもこんな風に、色んな場面でちーちゃんにばかり詞を食わせてる。本当、すまん」

真奥に合わせてたら、いつのまにか傍聴を使うことになっていたように。

「それは……別に、だって、私が好きでしてることですから……」

「たとしてもその気持ちの奥にあるものを付度（ついで）もせず、いよいよに利用しつぱなしなど言議道断って、昨日も、真屋に減茶（へんちや）茶（ちや）琴（きん）られたよ」

「まっ」

思いがけないところで真屋の名が出てきて、千穂はまたどきりとする。

昨日の、いつのことなのだろう。

何故（なぜ）真屋は、真奥にそんなことを言ったのだろうか。

だが千穂の疑問には答えず、真央は苦笑した。

「あいつがあんな怒り方したの、いつ以来だったかな。一昨日も色々あったし、珍しく涙腺も空を涙みやかかって口挟んでこねえもんだから、もう針の施でさ」

一昨日の色々も、あんな怒り方、というのもどういうものなのかは分からない。

だが、真央がそこまで言うからには、千穂が何故も口撃している声屋の激怒シーンとは一線を画したものであったことは想像に難くない。

「ただ……ちーちゃん、いつも俺に優しいからさ、ついさ、今も、悪い」

途切れ途切れの言葉は、速いのだろうか、言葉を連ねているのか、はたまた、真央の心の整理がついていないからなのか。

「ダメだな、何か纏まらねえ」

真央は決まり意そうに頭を掻いた。

「その、重荷だったら早いと……」

「最近、真央さんに忘れられてるんじゃないかって思うことも多々あるんですけど」  
重荷、という言葉が聞こえた瞬間、千穂は気がつけば口を開いていた。

「私、大分前と言いましたよね。真央さんのこと、好きだって」

「えあつて」

千穂の真っ直ぐな言葉に、真央は思わず表情を上げる。

「私は重荷になんて思つたことは一度も無いですし、真奥さんが信頼してくれていること、凄く嬉しいですし、真奥さんに甘えてもらえるならなんの問題も無いんですけど」

千穂は、少し口を失せながら真奥を睨んだ。

「一応私も女の子なので、その信頼の理由とか、甘えてくれる理由を、はんのちよつとでいいですから知りたいんです。できれば、真奥さんの口から」

「え、え」と……」

千穂は条件反射で出た自分の言葉の中に、思いがけず心の中もややを解くための答えが隠されていたことに気がついた。

「真奥さんの信頼を疑つたりしないし、重荷になんて思いません。でも、どうして私がそんなに信頼されてるのか、実は私、ずっと分らないままなんです」

恵美や鈴乃のように強いわけでも、青柳や藤原のように古い絆で結ばれているわけでも、ライラのように命を救つたわけでもない。

ただアルバイト先の後輩だったというだけの自分に対し、どうして真奥はそこまでの信頼を寄せてくれているのだろうか。

もちろん人間関係に於ける信頼の理由など、細かい事象の積み重ねであつたり、曖昧な印象からくるものであつたりすることが大半だが、それなら尚のこと、客観的に見た自分のポジションは、真奥が特別な信頼を置くのに不十分であると言わざるを得ない。

職もしない、生活を支えられもしない、種族も故郷も地帯も何もかも違ふ、そんな自分をどうして信賴してくれるのか。

「いつか、教えてくれますか？」

だが、その答えがあると思へば、恐らくそれは千穂の好意に対する真実の明確な回答とはば到底のものとなるだろう。

少なくともその答えは、上層に人を待たせているこのタイミングで急かすものではない。

「……正直なところ今はまだ自分でもよく……」

「分からないなら分からないでいいです。でも、もし分かったときは、一番最初に、教えてください」

「……分かった、約束する」

もし作戦がこの場にいたら、また真実を知平を与える千穂を甘いと糾弾するだろう。

だが、これが千穂の限界だった。

タイラとの話し合いの串でたった一つ決断するだけで、命のかかった重要な局面に身を置かねばならないかもしれない真実には、人間関係の解創作業などストレスでしかないだろう。

真実のストレスの元となるのは、千穂の望むところではない。

「行きましょう。上でタイラさん達、待っていますから」

「……ああ」



千穂に促され、真央はのろのろと、ロビー脇にある階段へと足向けを向ける。

その迷いのある動きに、千穂はどうしようもないほどの切なさ、それでも真央が自分のことを真顔に考えていてくれたという喜びを覚く、つい壁からその手を掴み、自分が喉に立つて真央を引っ張った。

「ちーちゃん」

「早くしないと、遊佐さん達にも怒られます」

足音が響く共用階段を早足に上りながら、千穂は真央の手の感触を確かめる。

冬に入ってから空気が乾燥しているし、毎日バイトで忙しい真央の手は冷たく、少し乾いていた。ほんの少しだけザラついていたその感触は、千穂に初めて真央と手を繋いだときのことを思い出させた。

憧れから芽生える恋心の土台が固まりはじめていたあのときの千穂にとって、この手を取ることは人生最大の勇気が必要とする一大決心だった。

「手……繋いで……いいですか」

「そんなことが、いいよ別に」

自分の手が新しい体温を感じ取った瞬間に心臓が口から飛び出しようになった。

驚きすぎて、顔しすぎて、そのせいでそのときの真央の手の様子を覚えていない。

だが、千穂の手に引っ張られて反発的に振り返ってくる真央の手の力の優しさは、あのとき

と同じだと確信する。

確信するだけの心の積み重ねは沢山ある。

「ブレンジャーかけちゃいますけどー」

「え？」

「私、真奥さんと一緒にいられるなら、エレベーターより階段をゆっくり上がりたいです！」

「ど、どういふことだ？」

「そのまんまの意味ですよー」

混乱している真奥は、千穂の言葉の真意には気づけていないようだ。

でも、今はそれでいい。

千穂はこの数日心に溜まっていた暗い潮みが、ようやく消えていくのを感じていた。

「階段分かりにくかった？」

三階では、タイラが心配そうに待っていた。

「ちょっとだけロビーでぐずぐずしちゃってました。お待たせしてすみません」

真奥が何かを言う前に、千穂はそう言って小さく頭を下げた。

タイラは時になんの疑問も持たなかったように、



「むしろ階段使わせてごめんなさい。それで、あの三〇六号室が私の部屋なんだけど」  
話題を変えて廊下の先の角部屋を指示した。

「昔にはもう言つてあるけど……その、驚かないでね」

しつこいくらいに念を押してくるライラは、さすがに千穂も不安になってくる。

真実（まこと）に頼まれたことには注意するつもりだが、部屋そのものが真空間に繋がっていて、ドアを開けるなり真世界に飛ばされたらどうしよう、などと変な想像力まで働いてしまう。

ライラはコートポケットから鍵を取り出し、鍵穴に差し込むと、大きく息を吐いてからノックと、そして悪美（あくみ）を振り返った。

「またあなた達には辛い……というか、恥（はづ）かしい思いをさせてしまうことになるけど」

「はあ」

「本当、ごめんなさい！　ここが、日本の私の家なのさ」

ライラは遂に観念したように、開錠（かいじやう）し勢いよくドアを開いた。

「さ、これは………うん」

そして、最初の驚愕（きやうがく）の声は、夫、ノックの口から漏れたのであった。

「ありやひでよ……驚くなつてのは無理だ」

「凄かつたですわ……生活の実態とかそれ以前の問題でしたもんねー」

真梨と千穂は、呆然としたま言葉を交わし、

「ルシフェルだってあそこまで酷いことにはならんだらう」

「私もーそんなに人のこと言える生活態度じやありませんかーさすがにあれはー……」

鈴乃とエメラダも困惑しきり。

「少し前に遊佐ちゃん家の家族争議がどうとかいう話があつたけど、まさかノルド君は離婚するとか言い出さないだらうね」

「生活態度の食い違ひってのは、離婚原因の上位にランキングされるって言うしねー」  
天祐とかブリエルは完全に他人事の模様。

「うまいー」

「おいしい」

アシエスとイルオーンは、あれを見ても特別な感情は抱かなかつたようで、練馬駅の中にあるモスバーガーで相違わらず恐ろしい量をオーダーしていつもの食欲を見せつけ、真梨と天祐の頭を掻きよさせていた。

「マオウー マダはナルドよりもこっちの方がポテト太いぞー」

「……ああそうか」

「でも、バーガーが食べにくい。こぼれる」

どこまでもマイペースなセフィラの子達に真実もまた、アラス・ラムスの将来を患い気が遠くなってしまふ。

「それで？ 魔王はライラの色々に納得できたの？」

「納得したかぬえまあんなの」

アセロラ・ハードソーダを飲みながら尋ねてくるガブリエルに、真実は悪い顔で首を横に振る。確かにライラのはっきりとした生活の実態を知りたいとは思ったが、まさかあんなことになつてゐるとは。

天降やガブリエルが言うような、離婚云々という話もなんとなく冗談と思ふなうなつてしまつてゐる。

## ※

「な……んなの、これは」

最初に声を上げたのは恵美だった。

「なんという……」

ノルドもまたうめき声を上げる。

「……すいません、緊張したんですけど、やっぱり急ぎだったから」

タイラが一人、玄関ドアを開け放った格好のまま、申し訳なさそうに顔を伏せる。

「まあ、おへや、くらい」

「マジかよ……」

「うわあ……」

「こ、これは」

「ええー」

「……せまそう」

「は、入って大丈夫なのかね、これ」

「こりや酷いや」

それぞれがそれぞれに驚嘆とも呆れともつかぬ声を上げ、最後にアシエスが、

「めっちゃくちやジャン」

の一言で締めくくった。

そこは、もはや部屋ではなかった。

本来はキッチンとユニットバス付き、八畳強の広さのワンルームのようだが、玄関から見た限り、どこからがキッチンでどこからが部屋なのか、判別できない。

部屋を埋め尽くしているのは、約四割が書籍。約二割が衣類。約一割が段ボール箱。それ以

外はもう贈貨としか言いようのない物が所収しと積み上げられている。

収納されているのではない。積み上げられているのだ。

本来衣類や布類などを収めるためのクローゼットの戸は完全解放され中から極太のつかえ棒が扉の反対側まで伸びており、そこに掛けられているあらゆる衣類が断崖のカーテンのように断崖への探光を阻害している。

本棚は無く、大きさも揃えられずに積み上げられた本が壁から断崖の中央に向けてアリジゴクのように鉢のように傾斜を作っていた。

その傾斜の中央には何か布の覆のようなものが、鳥の巣のように纏っている。

恐らくキンチンと断崖の地目であろうあたりには、漆原が書架使っている床座り用デスクがあり、恵美の目にもかなり時代がかったパソコンのモニターらしきものが鎮座していた。

「これでも……道場って片付けたの……」

「え」

夫と娘は揃って顔を緊張させた。

「その、後援のアパートに付けない日は、結婚仕事が忙しくて……」

「仕事……そういえば、あなたの仕事って……」

「うん、実はね」

ライラは少しだけ言いにくそうに、千穂を振り返った。





くるわね」

慣れないと転倒する部屋とはどんな部屋なのだろうか。どこかにワイヤートラップでもしか  
けられているのだろうか。

とにかくライラは靴を脱いで部屋へと上がっていき、

「あ、痛っ！ あ、な、何か引っかかって……」

しばらくの間、激痛苦悶する声が聞こえてきて、やがて薄い額を持って戻ってきた。

「ほ、ほらこれ！」

そこには確かに、看護師専門学校名が記された十年以上前の目付の卒業証書と共に、試験の  
合格を知らせる紙が入っていた。

そして、そこに書かれている名は、

「ライラ・ユステイナ……あなた、名前そのままなの？」

カタカナでユステイナ姓の名がそのまま書かれた表面を見て、恵美は目を丸くした。

「ええ、私、帰化外国人なの。最初は就学ビザで専門学校に通って、五年経ったら帰化申請し  
て、恵美さんのお世話のお世話にもなって、出身はイギリスってことになってるわ」

名前をオーブンにすることは天界の通手から逃れする上で問題にならなかったのかとも思う  
が、

「日本の名前を使おうと思ったことが無いわけじゃないの。でも帰化してこの名前がこの世界

にある同じ生きる「人間」として認められるんだと思つたら、どうしても、本名を使いたかった。私を、人間として認めてくれた人の名を受け入れてくれる世界があるって、思いたかったから」

ライラはそれも覚悟で名を改めずにいたようだ。

ついでに言えば、恵美と鈴乃とエメラダだけが気づいたことだが、今ここにいる国々は人知れず惨害（さいがい）られていた。

ノルトの姓を載（の）せる名を日本の戸籍に登録したかった、ということだからだ。

「これで私が、この国にもきちんと拠点を持ってること、分かってもらえたかしら」

ライラの問いに、恵美はとう答えるべきか悩んでいた。

ライラは恵美の想像よりも、ずっと明確な形で日本で地に足の着いた生活をしていた。部屋の有様を見るに、酒に足を取られている感じもするが。

「あ、そ、その、病院に勤めてる証拠があるなら、近々出勤する日があるから、その日に病院に来てもらえれば時間作るわー」

恵美の戸惑いを疑念ととったか、ライラは饒（た）めてそう付け加え、

「ね、不安なら今から住居費も取ってくるし、この部屋のどこかに電気やカスの回収書もあるし、それに、ええつと……」

もはや恵美だけを相手にあれこれと自分の生活（くらし）を詳らかにしようとする躍起（うき）になりはじめる。

「……お父さん、何かコメントは？」

「ええ、ああ、ああ」

麗美はとりあえず、この場に自分以外の人間がいることを思い出させるために、ノルドに話を振った。

するとノルドは、頭ひげを撫ちながらにいじりながら、暴る暴る尋ねる。

「ら、ライラ」

「は、はい……」

「私の記憶では……君はここまで生活にだらしなくなかったはずだが」

「さ、ごめんなさいっ！ その、病院のこともそうだし、エンターイスラのこととかも、色々忙しいなかまけてて、ここ、ほんとに寝るときにしか使っていないの！」

愛する夫からの生憎とも呆れともとれる一言に、ライラはひたすら平謝り。

「あのですねー」

そこに意外な人物が声を上げた。

「私は……この部屋はライラが住んでいる部屋だと思えますー」

「エメ？」

エメラダが、暴る暴るといった様子で手を上げる。

思わぬところからの助け舟にライラの顔がぱっと明るくなるが、

「一時お貸ししていた技術監理院の布告の一案が、ライラがいなくなった後、こんな感じになっちやってましたから」

その助け身には大層が満載されており、目の前で大暴発したもののだからライラは笑顔のまま歸まつてしまう。

「そ、それはあの……その姉は、ご迷惑をおかけして申し訳ありません……」

言い訳せずに詫びる姿勢は強靱だが、娘からどんな目で見られているか怖くてライラは顔も上げられない。

「志波さんにお世話になりながら生活の基礎を夢よる間……今まで見たことも無いくらいに人間達が生き生きしてるこの国の中で生活してたら、つい、浮かれてしまつて……反省してます」

「不況不況の大合唱で、基本的には沈んでる時代のはずだがな」

真央は冷静に突っ込むが、ライラは冷や汗を流しつつも真面目な顔で首を横に振る。

「親を亡くした子供が路上で物乞いをしながら短い生涯を過ごすような国を、沢山見てきたの。不況とは言うけど、明日は今日より少しでもいい日にしたいって願ってる人達が多い国は、生き生きしているわ。皆が良い方向を見れば、世の中が良い方向に向く。それはとても幸せなことよ」

「だからって、部屋を生き生きと敷らかしくっていいってことにはならないわよね」

「う」

観界の外からの娘の鋭い一言に、ライラは言葉を詰まらせた。

「ルシフェルもそうだけど、天使ってのは生き方の基本がだらしのないのね。サリエルやガブリエルは生活態度も、ちよつと気になってきたわ」

「……必ず言葉もございません」

もう、敬語である。

「必ず言葉も無いねー。本当」

なぜかガブリエルまで乗ってきた。

「はあ……」

観界の外からの悪天のため息に、ライラは身を凍らせる。

が、

「……遠佐さん？」

悪天の表情には、思いのほか穏やかな色が浮かんでいることに、千穂は気づいた。

「こんなにメチャクチャな使い方をして、いざ退去するときに、敷金礼金が返ってくると思うの？ マンション暮らし、ナメてるんじゃない？」

「壁とか床が極端に汚れたり壊れたりしてなきや、ミキティ伯母さんなら返すと思うけどね」

「そういう問題じゃないわ天海さん。賃貸に暮らしている以上、最低限綺麗に使うのは当然の心がけでしょ」

「あー、でもどこかの魔士様がうちの店に来た理由は、借りてる部屋に大穴開けたせいじゃなかったっけ？」

「天幕さん、それこいつのせいだから」

「ちょー！ 僕じゃないよ！ お宅のお子さんがやったことじゃん！ 何か顔にもこんな露れ衣着せられた気がするよ」

畢ねの飛び火にカブリエルが僕でる。

「とにかく、勇者だって魔王だって、家に帰れば家事しなきゃいけないのも、あなたが何を思つて踏躰してたかは知らないけど、自分の身一つまともに立てられない人の話なんか聞きたくないわ」

「そ、それは……」

ライラの顔には悔惜が見えたが、こんな有様を見せられれば悪美の言うことも一理ありすぎるため、どうにも擁護のしようも無い。

「……おいエメラダ、どうすんだあれ。悪美のやつまた話を聞かない口実を見つけたぞ」

「……いい加減う私も観念してはいんですけど」

とはいえ、ライラへの態度を決めかねて性格が変わってしまったかのように煮え切らない態度が続く悪美に、周囲が辟易しはじめているのも確かである。

特に、日本で悪美の部屋に起居しているエメラダなど、船のメンバーとは比べ物にならない

はじ、恵美のそんな姿を見ているはずだ」

また今日もこの部屋の有様を理由に睡を返してしまふのかと誰かが諦めかけたときだった。

「だから今日も話を聞くつもりは無いけど……この部屋は掃除させてもらうわよ」

恵美の口から、思いがけない提案が為され、顔を煮くしかけていたライラの頬にきつと雫が溢した。

「……エミリア？」

掃除云々はともかく、恵美はライラの部屋に上がると、そう言っているのだ。

「は、本当に？」

恵美は分かりやすくライラから顔を逸らしながら、少し早口になる。

「友達に、自分の母親がこんな生活にだらしない人だったなんて思われたくないだけよ！」

「エミリア……あ、ありがとう……ありがとう」

恵美の口から、逆送であつても母と呼ばれたことに、ライラは思わず涙を浮かべる。

「言っておくけど、あなたはエミにも憎みがあること、察れないでね。娘の友達にタカるなんて恥かしい真似、本当最悪だわ」

「は、はい……」

「第一こんなに近くにいながら、お父さんにアシエスを預けっぱなしで協力もしなかったことは許せないし、アラス・ラムスをダイラ・ローザ彼等に何も言わずに放り込んできたときのこと」



とだってあなたが関わってないとは言わせないわ。最初とこれだけ私達が混乱したか」

「はい………すいません」

「でも……」

恵美はここで、初めて口調を和らげた。

「こんな有様はさすがに想像していなかっただけども、私、今初めてあなたが私の目の前に

「生きてる」って思えた。それだけは、今日の私の直感」

「遊佐さん……」

「エミリア……」

「正直じゃありませんねー」

千穂も鈴乃もエメラダも、色々と理由を並べ立てる恵美が、ほんの少しだけライラに本み寄る意志を見せたことにわずかが安心した。

「遊佐さん、私も手伝い……」

千穂はそう申し出るが、恵美はそれを平んわりと断った。

「ありがとう。でもこの有様の中に何人も入ったら、身動き取れなくなっちゃうわ。家族の不始末は、家族がつける。皆……今まで、ごめんなさい」

恵美の短い詫びの言葉には、この一ヶ月間の騒がった自分の全てを謝罪する意志がこもっていた。

「魔王、あなたは？　もういい？」

そして最後に、真美よりもずっとライラの生活について抱腹したがっていた真美に確認をとる。

「……お前がいいってんなら、俺はもういい。あとは好きにしろよ。俺だって別に、これを見たからってすぐに考えが変わるわけじゃねえ」

「そう。悪いわね」

真美は軽く手を上げて、礼を示す。

「……おい、帰るぞ」

「エエ？　もう帰るノ？　一体何しに来たノ？」

アシエスの疑問は最もだが、ライラの生活環境を確認するだけで真無道の目的は達成されたようなものだ。

アシエスとイルオーンが連れてこられたのは、単純に保護者の都合である。

「ハア？　何コレ？　骨折り樹シヤン！」

アシエスがなんの骨を折ったのかは知らないが、とにかくこのまま帰ることが不満のようだ。

「はあ……じゃあ、どっかで飯でも食ってくか」

「そうこなくっチャ！」

収まりそうにないアシエスを収めるにはやはり飽を差し出すしかなかったようだが、

「カレー食ってんだから少しは自覚しろよ」

何やらやる気満々のアシエスの様子に、真鳥は既に不機なものを感じていた。

「じゃあノルド、修繕するわ」

「え」

真鳥が辞意を示すと、ノルドはらしくもなく固まってしまった。

ノルドの後ろでは早くも悪寒がライラ宅の解習作業に取り掛かっており、

「さてー もう使ってないようないない物はどんどん捨ててくわよー」

「持ってエミリアー！ それはこの国に来たとき初めて買ったお気に入りの子豚柄の靴下……」

「問答無用さ 大事な物ならちやんと洗濯した後たたんでしまっておきなさい!! 塵土の群衆

があんなに片付いてるのに乾すかしくないの?」

母と娘の片付けバトルがにぎにぎしく開催されている。

「の、残らねば、ダメかし」

「そりゃそうだろ。お前の嫁と娘のことだろうが」

「あ、いや、それはそうだが……」

「真様とお嬢さんのケアはお任せしましたー」

「あの、エメラダさん、その、あの」

「お父さんー お願い!! 来る途中にあった薬局に行って、マスク買ってきてー こんなところ

で呼吸してたら喘息になっちゃうわ！」

「ほら、毒佐ちゃんが呼んでるよ」

「が、緊張してくださいね……」

「これ以上は、家族水入らずということぞ」

「こっちは任せとけてことだけライラに言っておいて」

「よしッ！ ご旅行こうご殿！」

「ご殿、なにがいいかな……」

「あ、み、みんな、ちよつと待……」

「お父さん！ あとゴミ袋とビニール紐と鉄も！」

「エミリア待ってお願い！ 洗濯するから！ あとそれ乾料書だから！ 今でもたまに使うから捨てないで！」

そろそろと帰っていつてしまう高機速を果敢と見送るノルドの背に、

「あなた！ 助けて！」

「お父さん！ 甘やかしちゃダメよ！」

素と顔の対極の絶叫が飛び、

「……じいちゃ」

足元でスポンの柄が引っ張られるのを感じたノルドがふと目を落とすと、

「まあたち、ちよつとこわい」

「そ、そうだな」

アラス・ラムスが心なしで凍った表情で助けを求めてきて、思わず抱き上げ、

「わ、私がしつかりしなくては……」

悲愴な決意を固めたのだった。

※

「源流さん、特直りできるかなあ」

千鶴はなんとなく、窓の外を眺めながら遠い目になる。

「どうだろうな。距離は短まるだろうが、特直りまで行くかどうかは」

「でも、近づけばそれだけきつかけも見つけやすいですから」

真央に比べ、エメラダは、楽観はしていないが悲観もしていない、という表情。

「にしても、あの部屋でどうやってあいつは、天使の羽根ペン作るつもりなんだ」

「え？ 天使の羽根ペンって？ どういうことですか？」

真央の言葉に驚いたエメラダは、日本で購入したシヨルダーバツダから、まさしく天使の羽根ペンそのものを取り出して見せた。

「わあー私、実物は初めて見ました！ 綺麗ですね！」

淡い光を帯びた羽ペンを見て、千鶴が快活を上げる。

エメラダが持つ天使の羽根ペンは、かつてライラがエメラダに託し、東洋を漂すエメラダとアルバートが日本に来るために用いたものである。

「ライラがああ部屋で、やろうと思えば人数分作ることもできるって言いやがったんだよ。報酬のつもりなのか、それを使って何かをやっではいいのかは知らねえがな」

「……あの部屋ですかー」

エメラダは厭厭を寄せる。

「どうやって作るのかは知りませんがーなんだかとても埃っぽくなりそうですわー」

「違う。それに、俺が知ってるのは大天使の羽根を使ってできてる羽ペンだってことだけでどうやって作るかは知らないからな。おいガブリエル。まさか言語の鑑みてえに、自分の羽根を抜いて作るのかい。うんじやねえだろうな」

真実が話を振ると、ガブリエルはいつも通りのへらへら笑い。

「だとしてどうする？」

「単純に、何か嫌だ」

天使とはいふ、見た目はほとんど人だ。

髪などは本物の毛髪を材料に作られていることも多いが、それも然るべき加工手順を踏まれ

ているのも、加工後にできる物の用途が原材料の本来の役目と変わらないから抵抗なく使えるのだ。

一方でもし天使の羽根ペンが、天使が自分の羽根を一本一本切りながら作っているかも知れないと思うと、神々しさのストンプ安もいいところである。

「まあ、君が知っても意味は無いけど、物理的に羽根抜くわけじゃないから安心して。秘術があるんだよ」

まるで答えになっていない答えを返すカプリエルだが、それを聞いた瞬間千穂とエメラダは、同時にあることに思い至った。

「あれうでも確かー」

「は、はい。私も同じこと、あのとき聞きました」

二人は思わず、真実の顔を見る。

「魔王はあのとき確かー」

「悪魔に天使の羽根ペンは使えないって言ってますんでしたか？」

「ああ、そういやそんなこと言ったな」

真実はあっさり頷いた。

天使の羽根ペンを使えるのは聖注気を持つ者だけ。聖注気を持たない悪魔には当然使えないとできない。それは真実が幼い頃、ライラ本人から聞いたことである。

だがそれなら、何故真奥は天使の羽根ペンを作れる、とライラが言ったとき、それに反応したのだろうか。

「その羽根ペンがどうということはよく分かんが……鷹鷹が使えない、という語はルシフェルにも当てはまるのか？」

すると、鈴乃が横から尋ねる。

「五分つてとこじやないか。うまいこといつでも安定するかどうかは実際に使ってみないと分からん」

「じゃ、じゃあどうして真奥さん……」

「やり方次第かなって思ったのが一つ。あとは、今だって天使が敵であることは間違いないから、敵の重要な情報の一つ手に入るかも、くらいに考えた」

「ああ、そういうことですか」

「やり方次第かあ。結構難しそうですけど」

エメラダは納得し、千穂はどんな「やり方」があるのか考え、

「……」

鈴乃だけが訝しげな目で真奥を見続けていた。

「まあ、どっちにしてもエメラダが言った通り、あんな器用から出てきた羽根ペンなんか使えない気しねえし、そもそも作れるって話もまだ明瞭だしな。大抵いいのかよ、医療従事者の私生



話があんなので」

真鳥は鈴乃のその視線に気づいているのかいないのか、ごく自然に肩を揺めて話題を変えた。「でも、まさか看護師さんだったなんて……もしかしたら私、知らずに入院中お世話になってたかもしれないんですね」

「っていうか、間違いないだろ。病院で寝てるうちちゃんに指輪をつけられる奴なんか限られてるし」

「確かに、そうですね」

千穂は、今日もアタセサリーケースの中にある小さなイエソドの欠片があしらわれた指輪を思い起こす。

「まあ看護師なんて仕事してても不思議は無いよ、タイラは太昔は医者だったし、医療関係の勉強なんかはお手のものなんじゃないのかな」

「は？」

「え？」

会話を割って入ってきたガブリエルの唐突な一言に、真鳥達は目を細く。

「タイラが、医者？」

「うん」

「天界って、お世帯、あるんですか？」

「あるというが、あつたというか……でもあれよ。皆が皆、ルシフェルみたいな一流の字持つてゐると思わないでよね。そりや大半は無賴だし、日本のサラリーマンみたいに勤勉かつて聞かれたら自信ないけど、僕だってイエソドの守護天使って仕事持ってたんだから」

続けてガブリエルは、今はもうとくにクビになつてゐるだらうけど、と自嘲気味に駄いた。「ただタイラが本当の意味で医者やつてたのは……そうだな」

ガブリエルは相変わらずのへらへら顔のまま、唇の外の改札を行き来する百武海袋の乗客たちを眺めながら言つた。

「僕らが、天使になる前のことだね」

「天使になる前？」

鈴乃とエメラダが、肩をひそめて顔を見合わせ、真実ば口を引き結ぶ。

「あー、やつぱさういうことね」

天路一人がガブリエルの言うことに納得している。

「センタッキーに勤めてるカブ君の仲間は何れも叶かなかつたけど、あんな達が『天使になつた』のっていつごろの話よ」

「あまねえさん、サリエル畑つてもの？　ちなみにあいつは、日本の言葉で言えば元は法律家みたいな仕事してたんだよ」

「天界に職業適性って言葉は無いのか」

裏奥の壁口を、ガブリエルは笑って流す。

「まあともかく、年月を数える尺度が微妙に違うから正確なところはもう分かんないけど……僕らが天使になってから、一万年は経つかどうかかな」

一万年。

たかだか百年も生きることの難しい人間には、おおよそ想像だにし得ない感覚の、畏ろしいまでの年月。

「ガブリエルさん」

「ん？ 何、佐々木千穂」

「ガブリエルさんはライラの行動の理由を、知ってるんですか？」

「ああ、一応ね。連絡取り合ってたわけじゃないから詳細は知らないけど……でも、結婚してたことは、魔王、君がエンテ・イスラに改め込んだ頃に知った。エンテ・イスラの存在を知ること、間接的にだけど」

それは、イエソドの欠片が魔剣と敵邪の衣を登場したときに知った、ということなのだろうか。

「まあ、僕はライラと違って日和見主義者だったからね。ライラは外に出る道を選び、僕は残る道を選んだ。その違いは結構大きくて、百年単位で連絡とらないことも珍しくはなかったな。でも、君選んたのであるだろ？ 何年も連絡とらない友達とある日突然お基しても、平気で

皆みたいには絶頂り上がるのかき。そんな感じ」

そんな感じはそんな感じかもしれないが、現実問題として数ヶ月と数百年では、人間の身からは圧倒的な差がある。

「雑談として、聞いていいですか」

「何かな」

「ライラさんは真実さんと遊佐さんに、エンタ・イスラの人達を救ってほしいんですね」

「単純にそれだけだと諸弊があるけど、最終的にはそうだね」

「それは……どれくらいの時聞がかかるとですか」

「ちーちゃん？」

手塚の声色は、揺れてはいないが真剣だった。

「なんでそんなこと知りたいの？」

「前にガブリエルさんが遊佐さんと真実さんを獲ったとき、私、ただこっちで待ってるだけでした。足手まといになるから、最初から行くつもりはありませんでしたけど、真実さんと鈴乃さんも、できるだけ早くこっちに「帰ってくる」って言ってくれましたし。でも、一つの世界の人類を救うなんて大事業が、この前みたいに一週間やそこらで終わるはずありませんから」「ふむ。で、君はどれくらいかかると思ってるワケ？ 魔王が指名した立会人の一人なんだから、ライラからある程度説明は受けたんだろう？」

「……はい」

千穂は、ライラの世界の危機、ファイルの中身を思い出しながらはつきりと頷いた。

「私の予想を言えば、最悪で一ヶ月かからないくらい。長ければ百年以上もあり得るか」と

「へえ！」

「な、何だ？」

「百年ですか？」

「……」

ファイルやライラの話を知らない鈴乃とユメラダは驚愕に腰を浮かし、ガブリエルは感心したように眉を上げ、真実を知ったままだ。

「やっぱ佐々木千穂、君達いね。ライラが見込んだのも分かるよ。ついでにどうしてその期間をはじき出したか、聞いていい？」

ガブリエルは、千穂の言葉を否定せず質問を重ねた。

「ライラさんもガブリエルさんも、そのための準備を何百年と続けてきた。強い力を持ち、長い寿命を持つあなた達がそれだけ準備に時間をかけなきゃいけない仕事だ、そう簡単に終わるわけがないと思ったのが一つ。ただ、何かの偶然で条件が整えば、意外と簡単に終わってしまふんじゃないかとも思ったんです」

「ふむ。でも、それだけじゃなさそうだね」

「はい」

千穂ははっきりと頷いた。

「イエソドの欠片であるアラス・ラムスちゃんがタイラさんの娘の遺佐さんに。アシエスちゃんが悪魔である真奥さんのところにある。この状態なら、もの凄く長期にわたる作戦も可能なんじゃないかって思いました」

「ま、待て千穂殿。それはおかしいぞ」

「何がですか、鈴乃さん」

「長期と言っても百年は行きすぎだろう。魔土はともかく、エミリアはどうなる？　そもそもエミリアの魔上討伐の経緯だって、五年もかかっていないというのに……」

「真奥さんを倒すときは、話が違います。タイラさんは真奥さんと遺佐さんに……」

千穂はなんら気負うことなく、事実を告げた。

「神様を倒させようとしてるんですよ」

「……」

鈴乃とエメラダは息を呑み、

「神様ねえ……そんなのが本当に現れる環境が整っちゃってたなんて、不幸だねえ」

天竺だけが興味なさそうにアシエスのポットを一本横取りしている。

「ちーちゃん、何もそこまで……」

真実は大変な事実を、轉機點のモズバーガーの中で雑談交じりに告げる手筈を止めようとするが、その真実を止めたのはガブリエルだった。

「雑談だって言つたつしよ？ 君はもう知ってることだし、交渉は変わらずライラと君とエミリアの間で行われることだ。ただ、彼女達にも真実を知る権利と考える権利と」

ガブリエルはドラクダを最後まで飲み切つて、カップをテーブルに置く。

「君達の助けになりたいと思つた権利はあるだろう？ クレステイア・ペルも、エメラダ・エトリヴァも、エンテ・イスタの人間である以上君達に救われる立場なんだから」

「……言つておくが」

言つてゐることは真面目だが、それをガブリエルには言われたくない。さうして反論の言葉も浮かばず真実は隠しけにガブリエルを睨んでから、鈴乃とエメラダに釘を刺す。

「俺はまだこれに關して、一切受けるとも言つてねえからな」

「あ、ああ……だが魔王、アルシエルとルシフェルはこのことを……」

「西壁は放つとけつて言うに決まつてんだろ。彼等は、あいつは例も言わねえよ」

「……何も言わない、だろ？」

真実はいつも通りを強調しようとしたが、今更そんなことに引つ掛かる鈴乃ではなかった。

「いい加減にしたらどうだ魔王。お前はまた、嘘でもないが本意でもないことを」

「あ？」

鈴乃は少し口を曲げて、真奥を睨む。

「奴が本気で嫌がるなら『そんな面倒事に参加するのは絶対に嫌だから自分を離定に入れるな』と言わなければおかしい。それなのに、一切口を挟まないのなら、奴はこの話を放置できないと考えているのではないか？」

「……」

真奥は、思わず鼻白む。

「ガブリエルの言うことに賛同するのは嫌だが、私だってお前達のことを案じているんだ。少しは、信用してくれ」

「……あー……なんだ、まったく……なんだこれは」

ほとんど動くような鈴乃の顔を直視できず、顔を押さえて言葉を失う真奥に千鶴は言った。

「真奥さん、私、真奥さんや遠佐さんと一緒にいられなくなるの嫌なんです。一年くらいなら、ガブリエルさんが言ったみたいに我慢できます。でも、百年は待てません。さすがに遠佐さんと真奥さんが百年も一緒にいたら、私だってヤキモチ妬きます」

「おチホー 言うねエー」

「うん、私、真奥さんも遠佐さんも大好きだから」

アシエスのからかい半分の戯言を、千鶴は正面から堂々と受けた。

「私だけじゃない。鈴乃さんやエメラダさん連エンテ・イスラの人も、木崎さんを鈴木さん、



清水さんにかワつちさんみたいな日本人にも……真実さん達が好きな人、いっぱいいます。その人達だって、大切な友達に百年も遠くに行つてはしくないはずです。だから、私は聞きたいんです。これからやるべきこと、どうしてそんなことになったかを」

「ライラは、全話話してらんじやないの？」

「ライラさんが知らないことも、ガブリエルさんは知つてるでしょう？ それにあつきライラさんに、こつちは任せろつて言つてたじやないですか」

「……はあ。やりにくいなあ」

言葉とは裏腹に、ガブリエルはとても憂しそつに言つた。

「それにまた、ライラさんは真実さんと遊ばさんに対する必要な補綴を全くしていませんし、補綴軍も提示していませんから」

「鉄の器？ それとも、強い者に何かをやらせる器？」

補綴、という言葉について妙な比喩を持ち出すガブリエルに、またも真実は苦虫を噛み潰したような顔。

鈴乃は「鉄」という言葉に一瞬だけ何か引っかけかりを覚えたようだが、彼女が何かを思い出す前に千穂が言つた。

「例えの意味はよく分かりませんが、多分、後の方です」

千穂は少しだけ機軸的な目で言つた。

「ライラさんもガブリエルさんも、真美さんと遊佐さんが日本を離れている間、マドロナルド帽チヤ谷駅前店のシアトの穴をどうするつもりなのか、私聞いてません」

人一人が昔段いる場所からいなくなる。

その重みを、千穂は十分すぎるほどよく理解していた。

「シアトの穴、か。ははは」

毅然と言い放った千穂の言葉に面白そうに笑ったのは、天祐だった。

「睡いやないよ。そういうの。むしろ好きだ」

それまで真美達の話をつまらなそうに無視しながら、イルオーンだけを境界から外さないようにしていた天祐が、初めて身を乗り出してくる。

「私もどっちかって言うと立場的に千穂ちゃんに近いんだ。面倒事を持ち込まれた側だからね。はっきり言って私は千穂ちゃんや製香ちゃんみたいなのっちの人の人生の方が、どこにあるかも知らない他所の星の人類全員よりよっぽど大事だからね」

「天祐さん……」

「私も、セフィラの関係者だからさ」

色黒なだけに白い歯が光る笑顔を浮かべてから、天祐はガブリエルに釘を刺した。

「千穂ちゃん小さなハンバーガー屋一つの労働環境と、一つの世界の人類を天秤にかけてるなんて悪い悪いするんじゃないよ？ この子は真美真美と遊佐恵美っていう二人の「人間」の

人生と、その二人に關わる多くの人達の人生と、自分の人生を丸ごと、君達が救いたいのもの、反対側に棄せてるんだ。この重みが分らないようなら、例え真裏道や激戦もゃんが納得しても、絶対に千穂もゃんが納得しない。この子はきつと、命を張って真裏道連を止める。そしてエンテ・イスラの人類が滅びることを願うだらうね」

「命を張られるのは嫌だなき。魔王とエミリアが納得してるのにそんなことされたら、障害は排除したいところだけど」

「そしたらそのときは、私とミキタイ伯爵さんがあんだの敵になるだけで。分かかってて言うてるでしょ？」

「まーねー」

ガブリエルはモフィラの守護天使だ。

それ故に、セフィラの豫めしきは重よりも分かっているつもりである。

「いいよ、白状しよう。ライラにはそのつもりは無いけど、僕はいざとなれば百年か、もしくはそれ以上、魔王とエミリアを拘束してでもやってほしいことがある。これはライラの交際の態度が悪くなることを承知で言うけど、こないだアルシエルに車大騒ぎで足労願ったのも、かなり遠いところだけで関係してる。たぶん、その百年を費やすに値する報酬や、その間に得られるはずだった他の利益についての補償金は、残念ながらもまだ持ち合わせていない」

「でもう補償云々はともかくさすがに百年は……生きていたとしてもうエミリアはその頃に

はお婆ちゃんになってますよー？」

エメラダの当然の疑問に、ガブリエルはやはり当然のように返した。

「エミリアが普通の人間と同じように老いて死ねると思ってるの？　半分天使なんだよ？」

「そ……それはっ？」

エメラダは、殴られたような衝撃を受けて絶句してしまふ。

「僕やライラやサリエルやルシフェルが、今の姿のままどれくらいの時を過ごしてると思う？　ある程度成長して肉体が全盛期になった天使は、そこから成長と老いが止まって永遠の時を過ごすことになる。堕天をすればその限りではないけど、エミリアが堕天できないのはずっと前にサリエルが証明済みだ。」

確かに天使を堕天させる力を持つサリエルの堕天の邪眼光を溶びた悪魔は、聖法氣こそ消耗したが、（進化聖剣・片翼）を操る力や、半天使ともいふべき変身能力を失うことは無かった。  
「悪魔が、天使ほどでは無いにしても長寿命なのは知ってるだろう？　この魔王は、何百年生きているか知らないけどそれでも魔界じゃまだまだ若手だ。少なくとも僕やライラの十分の一も生

さちやいないだろう」

「ある程度成長すりゃ、そこから先は年齢じゃねえだろう」

「いかにも優秀な若者が言いきうなことだけど、どんな才能に恵まれた若者も『年を重ねる』って経験だけは十人並みにしかできないからね。若い頃には大人は年齢だけじゃ測れないって特がってたくせに、年を取ったら世代を理由に若者をこき下ろしはじめる面白い人間を僕は太勢見てきた。まあそれは余談だ。ここから先は魔王相手だと『交渉』と受け取られかねないから、話すならお嬢さん方に雑談交じりに話すよ。魔王は聞きたくないなら帰ったらか？」

「……うっせえよ」

真央は思ひしげに立ち上がると、財布だけ持ってまたカウンスターへと向かう。

どうやら、居座るのにテーブルが空なのは居心地が悪いらしい。

その背を見送りながら、ガブリエルは続けた。

「さて、きつき彼々本千種は神を倒すなんて言ったけど、僕ら『天使』のさらに上位の人類がいるわけじゃない。エンテ・イスラの人類を救う上で倒しておきたい一人が、僕ら天使を束ねる存在で、まあ神って言うて言えなくはないって程度の話。他にも君達が知ってるカマエルとかラダエルとか厄介なのは多いけど、彼女に比べれば、正直大したことない」

「……彼女？」

鈴乃の疑問に、ガブリエルは頷きながら、天幕の隅でひたすら飲み食い続けているアシエ

スミイルオーンに目を向ける。

「そう、この子達を本当に必要とする者達を鏡像に殺していく、寄生虫達の観望」

ガブリエルは、千穂達の反応を面白がるようにチーブルに肘をつきながら、言った。

「そうになってしまふ前の彼女は、偉大な統治者で、科学者で、戦士で、高潔で聡明な人物だった。だが、あるとき彼女は人の身で絶対に出してはならない領域に手を出し、結果一つの惑星の人類をほぼ、滅ぼしてしまった」

「惑星一つよりつよりはエンテ・イスラとも、地球とも違う異世界ということですよね？」

エメラダはまだ宇宙の認識が暗に落ちていないのかそう確認すると、

「その認識で構わないよ」

ガブリエルも肯定する。

「彼女はそれときの経験のせいで、今もとても謙虚いことをしているのに、エンテ・イスラの人類のためになることをしていると勘違いしている。たが、残念なことには僕やライラと同じように考える者は多くはなかった。カマエルなんかは彼女の信奉者筆頭だね。実はそのせいで僕は、この前の東大陸での一件で結構ワリを食った」

ガブリエルはカウンターで何やらスイーツを注文している真奥の音を見た。

「今僕らが魔王とエミリアにやってもらいたい計画には元々の発案者がいる。僕とライラは、その遺志を継ぐ者なんだ。僕は自分の命がまず第一だからライラほど真剣に取り組んではいな

いけど、とにかくエンテ・イスラを観測すればするほど、発案者は正しかったというデータが出てこないんだ。でも彼女はそれを理解しようとしなかった。二人は決闘し、ある日戦いが始まった。彼女は勝利し「彼」は破れた」

ガブリエルは遠い過去を懐かしむように、言った。

「僕らに真実を伝え、あの日天界を二つに割った男の名は、サタナエル。人間だったときの名は、サタナエル・ノイ」

「サタナ……エル？」

誰かの口がその名を復唱し、その誰かは、思わずレジの側でこちらに背を向ける青年の背に目をやった。

「サタン」の名を冠する者が、かつて天界にいた？」

千穂はその存在に、心当たりがあった。そしてその予測は、すぐに肯定される。

「彼こそ魔界に伝わる『古の大魔王サタン』その人さ。そして『大魔王サタンの笑み』の『原因』或いは『百鬼夜行』とは、彼の……だった」

鈴乃は驚愕に目を丸開き、千穂も直ぐに聞いた言葉を思い出して息を呑む。

「人間、だった？」

「古の大魔王って……虎兇さんの前に、魔界を統一していたって言う……」

「そういうこと」

ガブリエルは二人の反応を楽しみながら、口の端を上げた。

「そして古の大魔王を救し、今の天界を倒り上げた僕らの長、つまり神の名は……」

「神様なんてのは、人間の前に現れちゃいけないんだよ」

天界の悪いのはか強い悪魔の独り言と、ガブリエルが放った次の一言の前には、なんの意味も持っていないかった。

「彼女の名は、イダノラ。ルシフェルの母親さ」



# 作者、あとがく — AND YOU —

今回のあとがきには若干のネタバレ要素があります。

あとがきから先行される方、ご注意ください。

これまで『はたらく魔王さま!』では電撃文庫刊行の既刊を追っていれば新刊をお読みいただく上で支障が無いよう物語を構成して参りました。

しかし本書中の一部のエピソードについて、電撃文庫MAGAZINEに掲載され、かつ文庫本収録の収録をご覧になっていた方には、

「もう、そんな話や設定あったっけ？」

と首を傾げてしまうであろう描写が盛り込まれております。

ご安心ください。ちゃんとあるんです。

これまでも一部キャラクターやエピソードをアニメから逆輸入したりしていましたが、基本的には電撃文庫既刊だけをお読みいただければ問題ないように導入しております。

しかし本書『はたらく魔王さま! 13』では、作品世界正史の出来事である収録のエピソード無しには語れない部分が多々ありました。

その短編を読んでいるいと物語が進まなくなる、といったことはございませんが、いずれにせよ電撃文庫MAGAZINEをお読みでない皆様には情報キャッチを逃していることになり、申し訳ない気持ちでいっぱいでございます。

その代わり、ということが適切かどうかは分かりませんが、電撃文庫MAGAZINEに掲載された文庫未収録の短編は、いずれ必ず文庫化してお手元にお届けいたします。

今しばらく、お待ちいたなければ幸いです。

あさがくが珍しく事務連絡してみました。

本書はそんな過去にあった種々くも様々なエピソードを一気に集めた物語を加速させて、時間はいつも通りに流れるので、結局毎日眠を省いて飯を食い家で眠る連中が、人生を自分の意志で加速させようとするお話です。

残念ながら和ヶ原の執筆速度はそれほど加速いたしません、それでもできる限り早くまた皆様にお会いできることを願って。

それではっ！！

# はたらく魔王さま!13

和原聡司

発行 2025年8月18日 既刊発行

発行所 塚田正晃  
発行所 株式会社KADOKAWA  
〒102-8277 東京都千代田区新大塚3-13-3

プロデュース アスキー・メディアワークス  
〒102-8284 東京都千代田区新大塚3-4-10  
03-3218-8299 (編集)  
03-3218-1854 (営業)

原丁書 原保樹司 (METEOR & MATERIALS)  
印刷 株式会社地印刷  
製本 株式会社ビルデザイン・ブックセンター

※本誌の複製権限 (コピー・スクリーン、デジタル化等) は、元々所収複製権の譲渡及び配付等、著作権法上での特権を留め置かれております。また、複製を代金無償などの第三者に転売して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での範囲であっても一部認められておりません。

※電子版 (電子版) は、本誌とは別物として扱われます。購入した本誌の権利を行使して、アスキー・メディアワークス上での権利行使は、本誌とは別物として扱われます。

※本誌の複製権限は、本誌とは別物として扱われます。

※本誌の複製権限は、本誌とは別物として扱われます。

※本誌の複製権限は、本誌とは別物として扱われます。

©2015 KADOKAWA PUBLISHED  
ISBN 978-4-04-862205-6 C0193 Printed in Japan